

第 30 号

令和 3 年度

教 育 研 究 集 録

令和 4 年 3 月刊行

公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

令和3年度「教育研究集録」刊行に当たって

～実践研究を教育論文として発信してみませんか？～



新年度が始まり、先生方には、清新な思いで教育活動等に取り組まれていることと存じます。また、長引くコロナ禍の中、子どもたちの安全・安心の確保に向けて種々ご尽力されていますことに敬意を表しますとともに、平素から公益財団法人日本教育公務員弘済会岡山支部の各種事業の推進に、ご理解とご支援を賜っておりますことに深く感謝を申し上げます。

さて、新学習指導要領につきましては、これまでの小学校・中学校の完全実施に引き続き、令和4年度には、高等学校においても新入生から順次実施されます。これら指導要領の改訂には、「これからの社会がどんなに変化して予測困難な時代になっても、自ら課題を見付け、自ら学び、考え、判断して行動し、それぞれが思い描く幸せを実現してほしい」といった思いが込められています。

各学校園では、新学習指導要領、幼稚園教育要領を踏まえるとともに、日頃から子どもたちや保護者の願い、地域の期待等を受け止め、指導の充実に努めることが求められています。

こうした中、弘済会では、先生方が日々行っている教育実践の優れた研究を広く募り、その成果を普及するために教育研究論文・著書の募集を行っています。

本年度は、論文の学校部門が6編、個人部門が19編、著書部門は5編、合わせて30編の応募となっています。この中から、昨年10月の審査会におきまして、最優秀は学校部門・個人部門各1編の計2編、優秀は学校部門3編・個人部門2編の計5編、優良は学校部門2編・個人部門4編の計6編、奨励が個人部門11編・著書部門2編の計13編の受賞と決定しました。

これらの中から3編を日教弘教育賞に推薦していましたが、この度、学校部門で岡山市立高島中学校が最優秀賞に、総社市立昭和中学校が優良賞に、また個人部門で県立津山中学校の井尾佳弘指導教諭が優秀賞に選ばれましたことは誠に喜ばしく、受賞者の皆様に心からお祝いを申し上げます。

弘済会としましては、こうした素晴らしい実践研究が更に広がるよう、優良以上の論文を冊子にまとめ、学校に配布しています。また、冊子の最後には、本年度の日教弘教育賞の全国最優秀論文（個人部門）も掲載していますので、教育研究実践やまとめ方の参考にしていただければ幸いです。

結びに、大変ご多用の中、論文審査に当たっていただきました岡山大学教師教育開発センター教授の高旗浩志先生をはじめ、審査委員の先生方に厚くお礼を申し上げます。

公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部
支部長 竹 井 千 庫

巻 頭 言

日々の実践を研究に

審査委員長（岡山大学教師教育開発センター・教授） 高 旗 浩 志



昨年度まで審査委員長をお務めになった中国学園大学・中国短期大学副学長の住野好久先生のを引き継ぎました。歴史と伝統あるこの事業です。私に務まるか大いに不安がございました。しかし、故郷岡山の教育の発展に少しでもお役に立てればと思い、非力を顧みずお引き受けした次第です。この機会を頂きましたことに、まず厚く御礼申し上げます。

新型コロナ感染症との闘いが2年以上続いています。歴史に「もし」はありません。しかしコロナ禍さえ無ければ、私たちは新学習指導要領の完全実施に向き合い、小・中・高の学校段階ごとに新たなスタートを切る3年間となるはずでした。人智を越えた厄災が、そのゆとりを奪ってしまいました。

しかし、このような困難にも関わらず、学校と教育行政、地域社会と保護者の皆様が一体となり、日々の学びをとめること無く、懸命な努力を重ねてくださっています。年が改まって以降、感染力の強いオミクロン株が猛威を振るう只中にあります。しかし対策に万全を期し、日々の教育活動を豊かに実現してくださっています。本当にありがたく思っております。

一方で、コロナ禍という厄災は、これまで自明であった「学校の当たり前」を問い直す好機ともなりました。新しい発想や方法による取組が様々に生まれています。決して容易なことではありませんが、私はそのような実践の中にこそ、学校の自立、そして教師の自立を感じます。その自立の頭れのひとつが、この教育研究論文・著書への投稿であると考えています。

さて、このように困難な状況の中、いったい何件の応募を頂けるものか気がかりでした。しかし、蓋を開けてみますと、学校部門6編、個人部門19編、著書部門5編という結果でした。学校部門は昨年度に比べて約半減でしたが、いずれも意欲的な力作揃いでした。また個人部門と著書部門の数はわずかな変動に留まっており、とてもありがたく受けとめました。応募して下さったすべての先生方のご尽力を称えたく思います。

まず学校部門では最優秀賞1編のほか、優秀賞3編、優良賞2編としました。いずれの研究にも共通することは、今の時代を象徴する魅力的なキーワードを掲げつつ、自校の必要に根差した研究仮説を設定し、地道な実践を積み重ね、確かな成果を導き出していることでした。「流行」の力を借りつつ、確かな「不易」に繋がる実践を創造してくださっている、ということです。たとえば最優秀賞に輝いた岡山市立高島中学校の「「デザイン思考」による生徒の潜在的ニーズへのアプローチ」、優秀賞に輝いた総社市立昭和中学校の「英語特区における幼小中一貫教育とインバウンド教育」等です。学校や校区を単位とする共同研究として、一人ひとりの先生が役割を担って参画し、日々の実践と研究に取り組んでおられる様子が伺えました。導かれた成果はもとより、研究を核に学校の組織的実践力が高まることこそ価値があります。そのことを見事に示して下さった論文です。

学校部門の最優秀賞に選ばれた岡山市立高島中学校のご研究は、人々の潜在的ニーズにアプローチする「デザイン思考」という手法を、自校の課題解決に生かすべく取り組まれたものです。「学力向上」、「地域連携」、「心の教育」という3つの課題に対して、すべての教職員がいずれかのプロジェ

クトを選択してチームを編成し、「着想→発案→実現」という「デザイン思考の3段階」を踏まえた取組を重ねてられました。またその成果と課題の検証にも客観的な指標を設定し、シビアに自己評価するとともに、次に繋がる課題を明確にしておられました。このような取組を通して、3つのプロジェクトにおける個別の成果はもとより、何よりも創造的であり、また支え合い、助け合い、高め合う「課題解決型の教師集団」への成長が促されたのではないのでしょうか。

次に個人部門では、最優秀賞1編のほか、優秀賞2編、優良賞4編、奨励賞11編としました。応募された内容はICT活用に関する論文が4編、総合的な学習の時間やSDGs、PBL（課題解決型学習）に関する論文が5編、特定の教科とその指導方略に関する論文が7編、学級経営や臨床的課題に関する論文が3編でした。そのなかでも課題設定と研究仮説に説得力があり、研究の方法論が吟味され、かつ成果の検証方法が客観的で厳密であるなど、「研究」として一定の水準を超えていること、そして取組の斬新さと成果から伺える汎用性を備えた研究が高く評価されました。

個人部門の最優秀賞に選ばれた井尾佳弘先生（岡山県立津山中学校）の「1人1台端末を毎時間使う英語の授業実践と成果検証」は、その副題にもありますように、ChromebookとGoogle Workspaceを「文房具」として活用する方法を開発し、「聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと」という4技能の向上を目指した実践研究です。授業で用いる教材群をパッケージ化して生徒に提供すること、そしてChromebook活用の利点ばかりではなく問題点をも実証し、教科や校種を超えた汎用性を示した点、また、洋文献を中心に先行研究を厳密にレビューしている点も高く評価された理由です。

なお、著書部門には5編の応募がありました。このうち2編は募集要項の「学校教育の振興に役立つもの」という要件に対し、どちらかというと純粋な学術研究の志向が強いと認められました。また、残る3編は貴重な実践記録等としてその意義を評価し、うち2編を奨励賞としました。

最後に「実践研究」という概念について申し述べます。募集要項のほか、「教育研究論文作成上の視点」にも示しておりますが、実践研究では次の2つのことが重要です。つまり、①学校の実態と現状を踏まえること、②これからの教育を展望した新しい提案があることです。先生方の強みは、日々の実践が研究のフィールドであり、そこに顔と名前の一致する子どもたちが居ることにあります。子どもたち一人ひとりのより良い変容を促し、支えるのが教師の仕事です。その日々の営みに仮説を持って取り組み、実践し、成果と課題を明らかにして省察し、次の実践に繋げること、これ即ち実践研究なのです。その意味で全ての教師は本来的に「実践研究者」と言えるのです。

先生方には、ぜひ、このような「実践研究者」としての志を高く掲げて頂き、ご自身の実践の成果と課題を活字にして世に問うて頂きたいと思います。「学び続ける教師」のひとつの姿がここにあります。皆様の実践に出会えることを楽しみにしております。

最後になりましたが、この助成事業のためにご尽力頂いたすべての皆様に対し、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

追記

2月中旬に吉報が届き、岡山市立高島中学校の論文が（公財）日教弘教育賞最優秀賞、井尾佳弘先生の論文が同優秀賞、総社市立昭和中学校の論文が同優良賞の荣誉に輝いたとのことです。岡山支部推薦の論文が2年連続で全国最優秀賞を受賞し、また推薦論文3編全てが全国優良賞以上という快挙となりました。受賞されました皆様に心よりお慶び申し上げますとともに、岡山支部審査委員の皆様にも厚く御礼申し上げます。

祝 辞



岡山県教育委員会 教育長 鍵 本 芳 明

公益財団法人日本教育公務員弘済会岡山支部の令和3年度「教育研究集録」が上梓されるに当たり、並々ならぬ御研鑽を重ねられ、このたび教育研究論文及び著書の部で受賞されました方々に、心からお祝いを申し上げます。

さて、人口減少社会やSociety5.0の到来、グローバル化の進展などにより、将来の予測が困難な時代が到来することに備え、「社会に開かれた教育課程」という理念の下「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」といった視点を踏まえた新学習指導要領が順次実施されております。これまで学校教育で目指してきた知徳体のバランスのとれた生きる力の育成を継続するとともに、知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力の育成、学びに向かう力・人間性の涵養を重視し、未来社会を切り拓くための資質能力を育むことが求められております。

こうした状況の中、本県では、「第3次晴れの国おかやま生き生きプラン」において、「教育県岡山の復活」を重点戦略の第一に位置付け、学ぶ力育成、徳育・体育推進、グローバル人材育成を重点プログラムとして掲げ、グローバルな視点を持って、県内外の様々な分野で主体的に活躍できる人材や、他者と協働しながら新たな価値を生み出し、本県の持続的発展に貢献できる人材の育成に取り組んでいるところであります。こうした状況の中、教職員が学校現場で創造的に教育実践に取り組み、それを実践研究として取りまとめ、お互いに研鑽を重ねることは非常に意義深いことであります。

このたび、受賞されました教育研究論文や著書は、ICTの活用や授業改善、SDGsの視点を踏まえた取組等、多岐にわたっておりますが、いずれもそれぞれの学校や地域の実態を踏まえ、課題を検証し、重点化・具体化した改善策を示す研究であり、多くの教職員の資質・能力の向上のため、広く活用していただけるものと考えております。

そして、受賞された皆様方には、今回の受賞を更なる契機として、引き続き実践や研究を深められ、それぞれの学校や地域の先導役として御活躍いただけることを期待しております。

終わりにになりましたが、教育研究助成事業の実施に当たり、御尽力いただきました関係者の皆様方に心から感謝申し上げますとともに、公益財団法人日本教育公務員弘済会岡山支部の今後ますますの御発展を祈念いたしまして、祝辞とさせていただきます。

令和3年度 教育研究論文・著書

審査委員名簿

(敬称略)

審査委員長	岡山大学教師教育開発センター教授	高旗浩志
審査副委員長	岡山県総合教育センター企画調整監	滝澤浩三
審査委員	岡山市立岡山中央小学校長	小川泰永
審査委員	岡山市立御南中学校長	河合浩一
審査委員	岡山県立岡山芳泉高等学校長	姫路勲
審査委員	岡山大学特任教授	平野和司
審査委員	くらしき作陽大学子ども教育学部教授	福島治子
審査委員	元小学校長	武藤幹夫
審査委員	元高等学校長	松沢克彦

目 次

(所属は令和4年3月31日現在)

論文 (学校部門)

〈最優秀・日教弘教育賞最優秀賞〉

1. 生徒の潜在的ニーズを満たしポジティブな感情を引き出す教育の実践
—「デザイン思考」によるプロジェクトの推進を通して—
岡山市立高島中学校 校長 梅原信芳 …………… 1

〈優秀・日教弘教育賞優良賞〉

2. 少子化の進む中で地域への愛着と誇りを持ち、
グローバル化する国際社会に主体的に生きようとする生徒の育成
—英語特区・五つ星学園における幼小中一貫教育とインバウンド教育の実践を通して—
総社市立昭和中学校 校長 東長典 …………… 5

〈優秀〉

3. 小学校高学年における教科担任制の試行
—小規模校での授業交換型を中心とした教科担任制の成果と課題—
美作市立江見小学校 校長 新田義純 …………… 9
4. 志を育む系統的なキャリアプログラムの編成と検証
—未来を拓く普通科高校生の育成を目指して—
岡山県立笠岡高等学校 校長 山崎淑加 …………… 13

〈優良〉

5. 命の大切さを実感し、自ら命を守ることでできる子どもを目指して
—ユニバーサルデザインの視点を取り入れたコロナ禍における命の教育—
総社市立池田幼稚園 園長 横山木実 …………… 17
6. 主体的に学び 伝え高め合う子どもの育成
—子どもたちの思いや願いが実現していく授業づくり—
笠岡市立神内小学校 校長 三島博子 …………… 21

論文 (個人部門)

〈最優秀・日教弘教育賞優秀賞〉

1. 1人1台端末を毎時間使う英語の授業実践と成果検証
—Google Workspaceで授業パッケージ化/手書きvsタイピング学習成果検証—
岡山県立津山中学校 指導教諭 井尾佳弘 …………… 25

〈優秀〉

2. 漢字指導における合理的配慮
—インクルーシブ教育の観点から「書く・読む・使う」の力を伸ばす—
総社市立総社中央小学校 教諭 矢吹由子 …………… 29
3. 当事者意識を育む対話型授業の場のマネジメント
—「何ができるようになるか」のために「どのように学ぶか」—
岡山県立瀬戸南高等学校 指導教諭 佐々木正剛 …………… 33

〈優良〉

4. 深い学びを促す道徳科の授業づくり
—中心発問の組織化を用いて—
倉敷市立第三福田小学校 教諭 福吉知宏 …………… 37
5. 英語入門初期における、調べることを踏まえた思考型課題の実践
—英語学習への内発的動機付けを高める手立てとして—
岡山市立福浜中学校 教諭 新谷彰男 …………… 41

6. 中学校技術・家庭科（家庭分野）から発信するSDGs5・ジェンダー平等の取り組み —持続可能な社会の構築を目指す生徒の育成をめざして—		
岡山大学教育学部附属中学校	教諭 川上祥子	45
7. パンデミックの中、GIGAスクール構想（一人一台端末の活用）を加速させる学校経営 —個別最適な学びをキーワードに「光南の夢育」を推進するPBLと地域探究学習—		
岡山県立玉野光南高等学校	校長 三澤宏之	49

令和3年度「日教弘教育賞」

〈最優秀賞・学校部門 岡山支部推薦論文〉

生徒の潜在的ニーズを満たしポジティブな感情を引き出す教育の実践

—「デザイン思考」によるプロジェクトの推進を通して—

岡山県岡山市立高島中学校 校長 梅原信芳 1

〈最優秀賞・個人部門〉

視覚障害児童の主体的・対話的な学び合いを支える集団づくりと学習活動の充実を図る取り組み

—盲学校同士をオンラインでつないだ遠隔合同授業の実践を通して—

沖縄県立沖縄盲学校 教諭 伊波興穂 53

〈優秀賞・個人部門 岡山支部推薦論文〉

1人1台端末を毎時間使う英語の授業実践と成果検証

—Google Workspaceで授業パッケージ化／手書きvsタイピング学習成果検証—

岡山県立津山中学校 指導教諭 井尾佳弘 25

〈優良賞・学校部門 岡山支部推薦論文〉

少子化の進む中で地域への愛着と誇りを持ち、

グローバル化する国際社会に主体的に生きようとする生徒の育成

—英語特区・五つ星学園における幼小中一貫教育とインバウンド教育の実践を通して—

岡山県総社市立昭和中学校 校長 東長典 5

奨励賞の所属・代表者名（氏名）・研究題目の一覧表〈参考〉

論文（個人部門）

所 属	氏 名	研 究 題 目
備前市立 吉永認定こども園	保育教諭 若本 佑允	幼児教育・保育の無償化に伴い、保育現場で求められること —保育相談支援の視点から—
玉野市立 八浜小学校	教諭 向井 早紀	主体的で協働的な学習による学級経営 —理科「チョウを育てよう」の学習を通して—
高梁市立 高梁北中学校	校長 小林 朝雄	地域を理解し、郷土愛を育む学習の考察 —総合的な学習の時間「高梁郷土学習」を通して—
岡山市立 操南中学校	教諭 竹島 潤	中学校教員間で“ESD for SDGs”を共有する試み —岡大附属中における教員研修・総合学習プログラム・全体研究を通して—
倉敷市立 西中学校	教諭 小林 義忠	教師による生徒への言葉掛けが生徒の感情に及ぼす影響についての一考察 —本校2年生へのアンケート調査と令和2年度の教育実践から—
高梁市立 高梁中学校	教諭 神原 優一	栽培体験を通して生きる力を育てる —栽培体験から、想像以上の学びがみつかった—
岡山市立 福浜中学校	指導教諭 小橋 和子	バーコードを活用した給食献立コンクールの学習展開について —岡山県版クッキングカードの情報をバーコードで読み取る学習活動を通して—
岡山大学教育学部 附属中学校	教諭 山本 芳幸	生き方を育む科学部の部活動経営 —コロナ禍でも内外に発信し続ける部に—
岡山県立 玉野光南高等学校	教諭 岡崎 則武	習得型授業での反転授業とジグソー法導入による授業改善 —教育における天動説から地動説への歴史的転換が始まった—
倉敷市立 精思高等学校数学科	教諭 山神 大輝	ICTを活用した手作りの個別最適な学びの実践 —精思数学検定を通して—
岡山県立 岡山瀬戸高等支援学校 第2学年 ものづくりコース	教諭 小林 敬二 教諭 小林 たみ 教諭 影井 紫織 教諭 檜原 靖 実習教諭 長川 優	特別支援学校における有効な産業現場等における実習の在り方についての模索 —生徒の自立を育む支援とは—

著書部門

所 属	氏 名	研 究 題 目
岡山市立 福浜中学校	校長 藤枝 茂雄	「朝読書」10分教材集
退職者	森上 敏夫	感謝の日々



生徒の潜在的ニーズを満たしポジティブな感情を引き出す教育の実践 — 「デザイン思考」によるプロジェクトの推進を通して—

岡山市立高島中学校 校長 梅原信芳

1 はじめに

学区は岡山市の市街地の北東部に位置し、もとは純農村地帯であったが、市街化が進み、人口が増加してきた。本校は、昭和56年に竜操中学校・操山中学校の2校から分離して新設された学校である。

地域は自然に恵まれ文化財の宝庫でもあり、住民は地域へ深い愛着を持っている。そして、家庭と学校園と共に地域の子どもを育てる雰囲気醸成されている。

生徒は、素直で何事にも前向きに取り組むことができるが、自分に自信が持てないところが見られる。

生徒や地域の実態や時代の要請から、「学力向上」「地域連携」「心の教育」が、本校の課題として浮彫となっている。

2 主題設定の理由

課題解決のためには、生徒の立場に立って考えることが大切であり、その前提として生徒理解を深める必要がある。生徒は、様々な場面で「やりたくない」「できない」「楽しくない」といった思いを表出することがあるが、その裏には「もっとやりたい」「できるようになりたい」「楽しみたい」といったポジティブな思いがあることを理解し、その感情を引き出したい。このように、表出された表面的なニーズに対応するのではなく、本質的な欲求である潜在的ニーズを探り、そこへアプローチしていくことが課題解決につながると考えた。

「デザイン思考」は、イノベーションを生み出すための手法、新しいマーケットを創造する手段として企業等で用いられているが、潜在的ニーズを探ることは生徒理解を深め、生徒の立場に立ってきた教育の本質とつながるものであり、教育課題の解決に生かされる発想であると考えた。前述の課題の解決を全教職員が共有し、本校の今年度のプロジェクトとするとともに、分掌を横断したプロジェクトチームによる取組と個々の取組の積み重ねから解決を図ることとし、研究主題を設定した。

3 研究仮説と研究方法

(1) 研究仮説

本研究では、課題解決に向け、生徒の本質的な欲求である潜在的なニーズを満たし、ポジティブな感情を引き出すことに着目し、次の研究仮説を立てる。

〈研究仮説〉「デザイン思考」によるプロジェクトを推進することで、生徒の本質的な欲求である潜在的ニーズを満たし、ポジティブな感情を引き出すことができる。

(2) 課題解決を図るプロジェクト

3つのプロジェクトの目的を以下のように設定した。

【学力向上プロジェクト】

これからの時代に求められる学力の育成

【地域連携プロジェクト】

地域を愛し、地域に役立とうとする生徒の育成

【心の教育プロジェクト】

自他を尊重する生徒の育成

(3) 「デザイン思考」によるプロジェクトの推進

プロジェクトの推進にあたって「デザイン思考」の3段階で取り組むことを全教職員で共通理解した。

- ①着想：本質的な欲求である潜在的ニーズを探る。
- ②発案：潜在的ニーズを満たすアイデアを創造する。
- ③実現：改善した取組を実施し、効果を検証する。

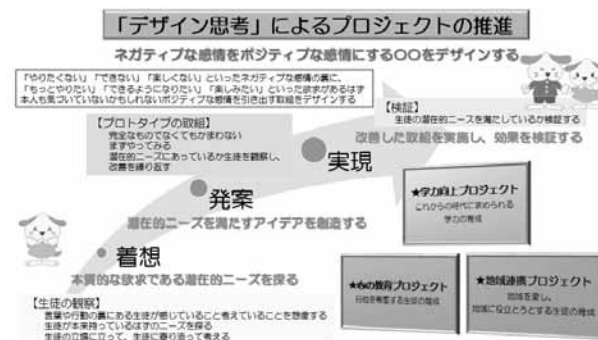


図1 「デザイン思考」によるプロジェクト推進のイメージ

4 実践内容

(1) プロジェクトチームの編制

プロジェクトの目的を設定し、関連課題の分掌担当者を構成員とするプロジェクトチームを編制した。プロジェクトとしての目標は、岡山市が毎年実施する「教育に関する総合調査」の関連項目を評価指標とし、昨年度の肯定的回答の割合を目標の基準値とする。

学力向上	目的	これからの時代に求められる学力の育成
	目標	学校の授業はわかりやすく楽しい (R2: 69.1%)
	関連課題	指導と評価の一体化, ICT活用, 家庭学習の充実
	リーダー	研究主任
	構成員	研究推進委員, 評価係, ICT教育係, 学活係
地域連携	目的	地域を愛し、地域に役立とうとする生徒の育成
	目標	地域の方とのふれあいに興味・関心がある (R2: 46.3%)
	関連課題	コロナ禍での地域連携, 高島中ESDの構築
	リーダー	地域連携担当
	構成員	生徒会係, ESD・交流教育係
心の教育	目的	自他を尊重する生徒の育成
	目標	人が困っているときに進んで助けている (R2: 83.2%)
	関連課題	自己肯定感・自尊感情の高揚, 不登校支援, メディアコントロール
	リーダー	生徒指導主事
	構成員	教育相談・不登校係, 人権教育係, 道徳教育係, ESD・交流教育係, 学活係

図2 プロジェクトチームの目的・目標・構成員

(2) プロジェクト会議での「着想」「発案」と「実現」

年度始めに各プロジェクトで会議を開き、「デザイン思考」の2段階である「着想」「発案」について協議する。生徒の潜在的ニーズを探るために、生徒が考え感じていることを生徒の立場に立って想像する。その際、生徒の言葉や行動の観察から想像し、それを「共感マップ」と呼ぶ表にまとめる。



図3 共感マップによる「着想」の協議

「生徒の立場に立つ」「生徒に寄り添う」等の言葉は日頃から使うが、実際にどうすることは教職員間で捉え方の違いが見られる。「共感マップ」を用いて、生徒の言葉や行動と生徒の考えや感じていることを結び付けながら潜在的ニーズを探る作業は、生徒の立場に立ち、寄り添うことを体感し、教職員間でそれを共有する機会になると考えた。

① 学力向上プロジェクト

本校の生徒は、落ち着いた授業に取り組むことができ

るが、学力の向上に十分結びついていない。「分かる授業づくり」にはこれまでも取り組んできたが、昨年度の「教育に関する総合調査」の調査項目「学校の授業はわかりやすく楽しい」の肯定的な回答の割合は、市の平均を下回った。

潜在的ニーズを探る「着想」の協議では、ポジティブな感情である「分かるようになりたい」「できるようになりたい」からスタートし、更に具体的な場面での生徒の思いを想像した。例えば、分かった時に「自分の考えを聞いてもらいたい」「話したい」、つまづいた時に「教えてもらいたい」「他の人の考えを聞きたい」、取組の後に「自分への評価を聞きたい」「自分の姿を客観的に見たい」などである。

生徒の思いを想像した上で、ポジティブな感情を引き出す取組をデザインする「発案」の協議で、「教え合い活動の工夫」「説明する活動の導入」「活動の様子動画撮影とその視聴による振り返り」「スモールティーチャーの活用」などの案が出された。これらは、今までも各教科で取り入れてきたが、生徒のニーズを発案の出発点とすることで、取組の目的が明確になる。生徒が「授業がわかりやすく楽しい」と感じられるためには、「授業の中で、分かった・できたと感じてうれしくなるときがある」といった実感を伴う体験が必要であると考え、具体的な取組をデザインした。

例えば、今までの観察から、生徒が最も活発に発言するのは「1対1」「全体」ではなく、「班」ではないかといった意見が出された。「教え合う活動」や「説明する活動」を行う際に、学習形態がポイントの一つであることを確認し



図4 ブレインストーミングによる「発案」の協議

② 地域連携プロジェクト

コロナ禍では、生徒が地域の方と直接触れ合う取組が困難であり、直接体験を通して地域の方の思いを実感することができにくい。

「着想」では、生徒と地域の方の潜在的ニーズを探る。「ほめてもらいたい」「認めてもらいたい」「教えてもらいたい」といった生徒の思い、「関心がある」「知りたい」「教えてあげたい」「守ってあげたい」といった地域の方の思いを想像した。

「発案」の協議では、コロナ禍での地域連携について考えた。今までのような行事はできないことを受け、「学校ではできないけれど公民館ならできることがあるのでは」といった意見が出される。そこで、「公民館を利用して、地域と生徒をつなぐ仕組みをデザインする」ことが提案された。具体が「公民館に中学校掲示板を、中学校に地域掲示板を」である。昨年度の第1学年が、郷土学習、平和学習、SDGsの学習に取り組み、成果発表会を開催したが、感染防止のため、学校外の方を招くことができなかった。地域の高島公民館に依頼し、「高島中学校文化発表会作品展」としてロビーの一角に作品の一部を展示していただいた。作品を見てくださった地域の方から、温かい言葉や励ましのメッセージをいただいた。中学校には「地域活動掲示板」を作成し、公民館で展示作業をした様子や地域の方のメッセージを掲示した。地域と学校をつなぎ、地域の方々の温かい思いを生徒へ届けることができた。



図5 公民館の中学校掲示板



図6 中学校の地域活動掲示板

③ 心の教育プロジェクト

本校の生徒は、他の人が困っているときに進んで助けようとするなど思いやりのある生徒が多い。しかし、自分の長所や良さを認め、自信をもつことができにくいところがある。自分に自信をもち、自他の存在を認め、自他を尊重する生徒の育成を図りたい。

「着想」の協議では、「ほめてもらいたい」「認めてもらいたい」といった当たり前の感情を想像したが、「自己肯定感とはどんなものか」「幸せな気持ちになるのはどんな体験をしたときだろう」「本当はどうしてもらいたいのだろう」といった議論にも広がった。学校生活を「授業」「学年・学校行事」「その他の生活場面」に分けて、

それぞれの場面で、どのような気持ちが起こりやすいかを想像する。

「自分や他者の存在について考え、互いの大切さを感じたい・認め合いたい」等を生徒の本質的な欲求と考え、これに応える取組をデザインすることとした。

「発案」の協議では、まず、自分や他者の理解を深める機会と、他者からそれを認めてもらえる機会を意図的につくることとした。本校では、「いじめ」等の把握のために、毎週金曜日の帰りの会で「今週気になったこと」を書いて担任に提出する「週末調査」を行っている。これに「発見！今週のキラリさん」と題して、だれかに助けてもらったことや誰かが良いことをしていたことなどを記入する調査用紙を作成した。抵抗なく記入する生徒の姿が見られたため、友達との会話で学んだことや気づいたこと、自他ができるようになったことなどを記入する「今週の周りの人の新たなキラリ！」や、「今週のあなたの仕事(係・当番など。家での仕事でもいいよ)は？やってみてどう？」との質問で記入する「今週は仕事でキラリ」など、調査内容を週ごとに変えた。更に、良いところだけでなく、自分の得意や嫌いなことについて新たな自分を発見する質問も取り入れた。また、これを学級で紹介し合う活動も行った。

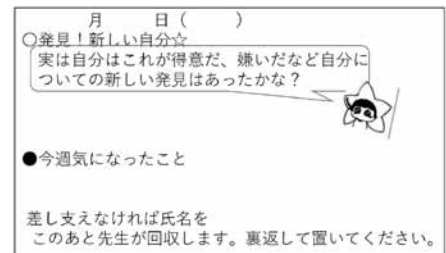


図7 週末調査「発見！新しい自分」

「デザイン思考」では、完全な取組を考えてから始めるのではなく、まずやってみて、生徒のニーズにあっているか確認しながら、改善することがポイントの一つである。「心の教育プロジェクト」では、取組を全校で進めながら、生徒の反応を観察し、改善を重ねることを大切にした。

(3) プロジェクト推進に向けた個々の教職員の取組

プロジェクト推進にあたって、プロジェクトチームとしての取組と同時に、全教職員が個々の取組を行った。どのプロジェクトについて取り組むのかは自分で選択することとした。新たな取組を行うのではなく、今まで行ってきたことを、「着想」の段階で、生徒の本質的な欲求である潜在的ニーズに立ち返る作業を大切にした。それを出発点として「発案」で今までの取組の目的を明確にして取り組んでいく。

学力向上	着想	学習したことを身に付けたい 自信がもてるようになりたい
	発案	復習したくなる「小テスト」をデザインする ・授業のワークシートから5問に絞って出題する ・分からなかったことへアドバイスを小テストに添える
	実現	「授業→復習→小テスト・アドバイス」の流れが自信につながる
地域連携	着想	自分の知識や技能を役立たせたい 地域の方に喜んでもらいたい
	発案	地域の方のためになる夏休み課題をデザインする ・人や社会、環境に配慮した「エシカル消費」をとりあげる ・地域の方が生活で実践できる「エシカル消費行動かるた」を作成する
	実現	地域の方のためにという視点が、課題へ取り組み意欲の向上につながる
心の教育	着想	友達に聴いてもらいたい 認めてもらいたい つながりたい
	発案	友達とのつながりが感じられる伝え方・聴き方をデザインする 伝え方：伝える範囲をイメージする 聴き方：発言者が聴いてくれていると意識できる聴き方
	実現	伝え方・聴き方を生徒自身が工夫するようになる

図8 個々の教職員の取組例

5 成果と課題

1学期末（令和3年7月）に、各プロジェクトの「着想」で考えた生徒の潜在的ニーズに関する質問項目と、評価指標とした「教育に関する総合調査」の質問項目で、全校生徒を対象に調査を行った。

潜在的ニーズに関する質問項目では、特に授業で、ポジティブな感情が得られたことについて、肯定的な回答が高い割合となった。

生徒の潜在的ニーズに着目した取組をデザインし実行することが、ポジティブな感情を引き出すことにつながると考えられる。



図9 学力向上（潜在的ニーズ）



図10 地域連携（潜在的ニーズ）



図11 心の教育（潜在的ニーズ）

「教育に関する総合調査」の質問項目は、令和2年10月と比較して、肯定的な回答の割合がいずれも上昇した。特に「あてはまる」の回答が、大きく上昇している。

「着想」「発案」「実現」の3段階で取り組み、生徒のポジティブな感情を引き出すことと、プロジェクトの目標値がいずれも上昇する結果が得られ、「デザイン思考」

によるプロジェクトの推進についての効果を確認することができた。プロジェクトの目的を達成するためには、「デザイン思考」のサイクルを今後も繰り返す必要があると考える。

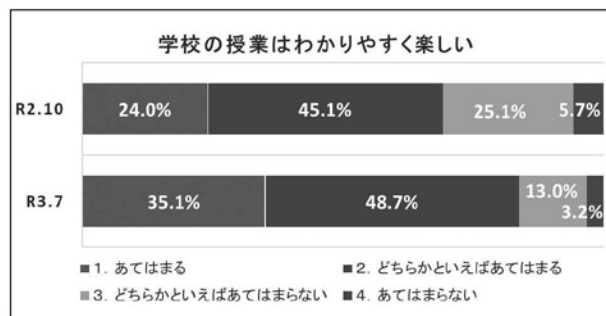


図12 学力向上（教育に関する総合調査の項目）

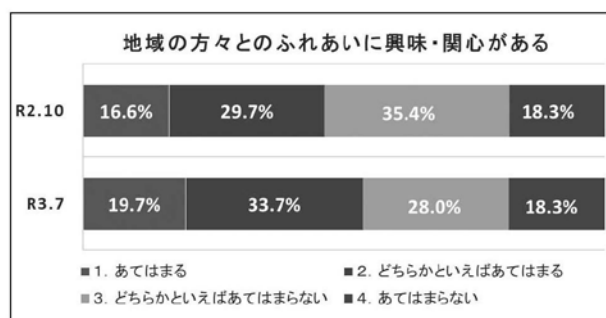


図13 地域連携（教育に関する総合調査の項目）

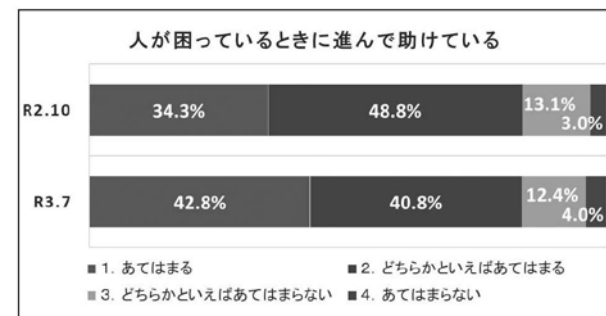


図14 心の教育（教育に関する総合調査の項目）

6 まとめ

生徒の本質的な欲求である潜在的ニーズを探ることは、今までの教育で大切にしてきた生徒理解を深め、生徒の立場に立つことであり、今回、あらためてこのことに立ち返ることができた。「デザイン思考」という共通の言葉で実践を進めたことも全教職員が同じ方向に向けて取り組むことにつながった。今後も、生徒を中心に据える姿勢を大切にしていきたい。

<参考文献>

- ・小山田那由他 著 「これからのデザイン思考」 エムディエヌコーポレーション（2021）
- ・ハーバード・ビジネス・レビュー編集部 「デザイン思考の教科書」ダイヤモンド社（2020）



少子化の進む中で地域への愛着と誇りを持ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きようとする生徒の育成

—英語特区・五つ星学園における幼小中一貫教育とインバウンド教育の実践を通して—

総社市立昭和中学校 校長 東 長 典

1 研究主題設定の理由と仮説

人口減少が進み過疎地等の学校統合の動きが目立つ。一方で、グローバル化も著しく、平成28年12月の中教審答申には、求められる資質・能力として「外国語を使って多様な人々と目的に応じたコミュニケーションを図れるようにすること」が示されている。

本校は、過疎化の進む中山間地域に立地する小規模校(令和3年度は生徒数61名)であり、「五つ星学園」(昭和幼、維新幼、昭和小、維新小、昭和中で構成、以下「学園」という。)と称して幼小中一貫教育を実践するとともに、平成26年度から「総社市英語特区」に指定されている。学区内の幼・小・中が連携し、一貫性のある特別な英語教育を提供することにより、豊かなコミュニケーション能力と国際的視野を身に付けた人材を育成することが、英語特区の目的として示されている。過疎地域にあって少子化の進む学校園に特別な教育内容と教育環境を整えて学校園の特色化を図り、その魅力によって人を呼び込んで学校園や地域を活性化することも、本事業の趣旨である。

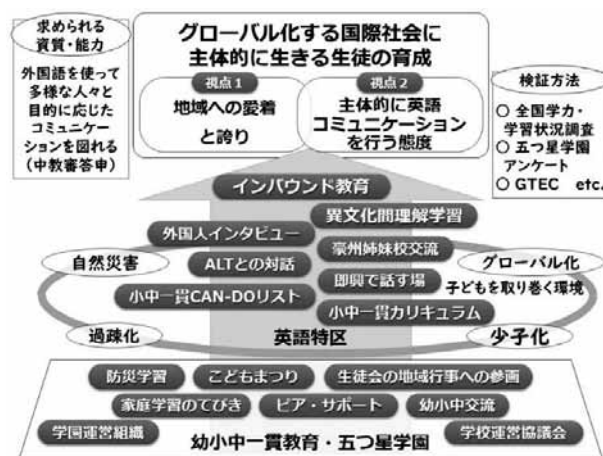
生徒の地域に対する姿勢を各種調査からひもとくと、「昭和地区はよいところだと思う」生徒が94.1%(平成29年度五つ星学園アンケート)、「今住んでいる地域の行事に参加している」生徒が70.6%(同年度全国学力・学習状況調査、全国平均+28.5ポイント)に上る一方で、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」生徒は23.5%(同年度全国学力・学習状況調査)であり、全国平均を9.9ポイント下回っている。学園の経営目標の柱として「地域への誇りと愛着の育成」を掲げているが、地域社会の一員としての自覚という面では今一つである。

また、GTECによると本校3年生の平均3技能(Reading, Listening, Writing)スコアは、岡山平均を45.4ポイント上回っている(平成29年度)ものの、「英語の授業で英語の力が身に付いてきていると思う」生徒は63.7%(平成29年度昭和中学校アンケート)であり、自分の英語力に自信を持つという面で英語特区としては物足りない。英語を使おうとする意欲が備わら

ないと、外国人との豊かなコミュニケーションは行えないし、国際社会に主体的に関わろうとする態度にもつながりにくい。

以上から、本研究では「地域への愛着と誇り」を視点1、「主体的に英語コミュニケーションを行う態度」を視点2とする。グローバル化する国際社会に主体的に生きようとする生徒の育成が本校の重大な使命であり、視点1・2がその鍵を握る。折しも、英語特区スーパーヴァイザーの木村松雄教授(青山学院大学)から、外国人に地域の魅力を英語で伝えるインバウンド教育に関するご助言があった。インバウンド教育とは、郷土に誇りを持たせ自分の思いを英語で表現する力を鍛える教育である。

そこで、「幼小中一貫教育を基盤として、インバウンド教育等の特色のある英語教育及び異文化間理解学習を工夫すれば、生徒は地域への愛着と誇りを持ち、主体的に英語コミュニケーションを行う態度が身に付く。」という仮説を立てて実践した。



研究構想図

2 研究実践の概要

(1) 視点1 「地域への愛着と誇り」

① 五つ星学園運営組織と学校運営協議会

学園の運営は、管理職部会が主導しつつ、全職員が英語教育部・学園生活部・地域連携部のいずれかに所属して行っている。このうち、学園生活部は、子どもの幼小中12年間を見通した健全育成と学習意欲・学校

適応感の向上を受け持つ。幼児・幼小・幼中・小小・小中の交流促進、ピア・サポート活動、中学校教員による小学校への出前授業、メディア・コントロール・ウィーク等のための5校園の教育課程・学校行事の調整、小中一貫した「家庭学習のてびき」の作成等を通して、一人一人の子どもがよりよい家庭生活・学校生活を送ることのできるようにした。

学校運営協議会は、保護者・地域住民等に学園運営の状況を周知するとともに、保護者、地域住民等の意見を聴取し、地域と共にある学校づくり及び幼小中一貫教育の推進に資することを目的に設置した。昭和公民館長及び分館長、コミュニティ協議会長、学校支援ボランティア代表、各校園のPTA会長等の総勢約40人の委員で構成され、学園運営及びその評価に関することや、学園・家庭・地域社会の連携に関することについて意見交換を行うとともに、先進地視察も行った。

② 地区別生徒会の地域行事への参画

学区は大きく4地区に分かれ、夏祭り等が地区別に開催されている。本校生徒は地区別生徒会単位で各地区の夏祭りの実行委員会に出席するとともに、事前の用具・物品の準備、当日の会場設営、祭りの運営、片付けなどに携わるようにした。輪投げやヨーヨー釣りの運営と小さい子の世話、かき氷やフランクフルトの販売等を任せられ、地域住民から頼りにされている。

③ 五つ星学園こどもまつりの活動の工夫

学園の子どもや保護者、地域住民の交流のため、昭和地区社会福祉協議会主催で「五つ星学園こどもまつり」が開催されている。小学生の英語の歌・踊り、幼稚園児の歌・踊り、地域住民による水鉄砲や流しそうめん、スポーツ少年団によるパフォーマンスなどが行われる。本校としては、総合的な学習の時間の学習成果や豪州姉妹校ホームステイ体験等の発表の場として全校で参加し、自分たちの思いや考えを地域の老若男女に聞いてもらうよう工夫した。

④ 防災学習の工夫

平成30年7月豪雨は、本校学区随所に甚大な被害をもたらし、家屋の2階まで浸水した地区もある。発災後、被災した家々に自発的に駆け付け、泥かきや片付け作業に精を出した生徒たちの姿に胸を打たれた。防災学習の重要性を再認識し、翌年代表生徒4人を熊本地震で震度7に見舞われた益城町に派遣した。語り部の話を伺ったり断層を見学したり、現地の中学校を訪問し防災に関する意見交換もしたりした。4人は学ん



小学生に益城町での震災学習を報告する生徒

だ成果をまとめてこどもまつりで発表するとともに、学区内2小学校に赴き小学生に報告することを通して防災意識の高揚に貢献した。また、防災教育の全体計画を見直し、学年ごとに防災への備え、AEDと心肺蘇生法、段ボールベッド作りと非常食等、家庭・地域と連携した体験学習のサイクルを整えた。

(2) 視点2「主体的に英語コミュニケーションを行う態度」

① 小中一貫英語カリキュラムとCAN-DOリストの整備

学園のCAN-DOリストは、英語教育部会で作成した。その特徴は、児童生徒の発達段階に応じて、言葉を体験的に学ぶ第Ⅰ期（小学校1～4年生）、知的好奇心が強くなり、言葉の規則性に興味をもつ第Ⅱ期（小学校5年生～中学校1年生）、言葉を体系的・論理的に学ぼうとする第Ⅲ期（中学校2・3年生）に分け、小中の連続性を重視した指標を設定したことである。また、英語検定とGTECのグレードを示したり、第Ⅱ期以降に外国人や豪州姉妹校との交流活動に関する目標を組み込んだりし、本学園の独自性を出すようにした。

② ALT等との対話機会、即興で話す機会の確保

ALTを含む複数の教師が英語授業を行い、日常的な基本文暗唱テストやセクションごとの音読テスト、即興トークなどにおいて、生徒が教師たちと英語で対話する機会を確保した。昼休みには、生徒がALTと一対一で対話する時間を設定し、毎日一人ずつ好きな話題についてやり取りするようにした。

③ インバウンド教育

ア 豪州姉妹校との交流

本校は、姉妹校であるオーストラリアのMelton Secondary College（以下、「MSC」という。）と、手紙やクリスマスカードなどの交換を続けている。新たに、入学式・卒業式等におけるビデオメッセージの交換や、岡山や総社のよいところをフリップにまとめ英語で紹介する動画の作成・送付も行った。

MSCでのホームステイには、毎年6～8人が参加

し、バディと共に授業を受けたり、日本語授業で日本の紹介をしたりした。生徒は、現地の生活・文化やものの見方を体験し、日本のそれと照らし合わせて多くの気づきを得ることができた。

隔年でMSCからも7～8人が本校にホームステイに来ている。一緒に授業を受け、座禅体験に出掛け、給食を食べ、掃除をし、休み時間を過ごしながらか両校の生徒は互いの距離をどんどん縮めた。岡山や総社の紹介をする英語の授業では、市のマスコットキャラクターについて大いに盛り上がる場面も見られた。歓迎集会やお別れ集会は生徒会が主催し、英語で挨拶や進行をした。普段学習している英語を日常的に使う機会になり、「自分の英語が通じたのですごくうれしかった」と感想を述べた生徒がいるように、伝わるうれしさを実感し自信を持った様子が見える。また、「一緒に笑ったりできて楽しかった」「みんなとってもフレンドリーだった」などと、国を超えて人とつながる喜びを感じ



豪州姉妹校の生徒と話し込む生徒

る生徒も多かった。

イ ヒロシマ研修における外国人インタビュー

2年生は、広島平和記念資料館に出掛け現地平和学習を行った。平和記念公園界隈は、様々な外国人であふれており、生徒はグループごとに外国人に声を掛けインタビューをさせてもらった。どこから来たのか、広島印象はどうかなどについて英語で質問するとともに、自分たちのことを紹介した。

ウ 異文化間理解学習

より広い視野を身に付けることを目指し、1年生が「インターナショナル・デイ」と称する異文化間理解学習を行った。AMDA社会開発機構やUNICEF、日本とネパールの民間交流に取り組むダフェプロジェクトなどから講師を招いてワークショップを体験したり、元青年海外協力隊員の講話を伺ったりした。同日に多数の外国人を招き、グループごとに英語で対話・交流する活動も行った。世界の現状の一面を知ることを通して、異文化について理解したり今の自分たちにできることを考えたりするきっかけになった。

3 結果と検証

(1) 視点1「地域への愛着と誇り」について

「昭和・維新地区はよいところだと思う」生徒の割合は90%台後半になった（五つ星学園アンケート、図1）。「今住んでいる地域の行事に参加している」生徒は90%を超え、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」生徒は、平成30年度に全国平均を上回り増加傾向にある（全国学力・学習状況調査、図2）。

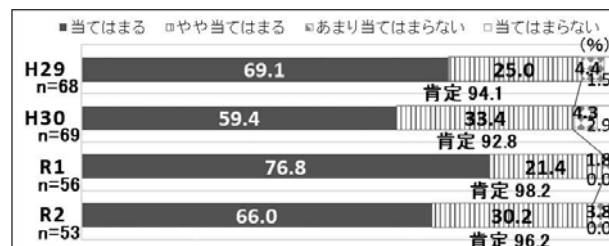


図1 質問「昭和・維新地区はよいところだと思う」の回答

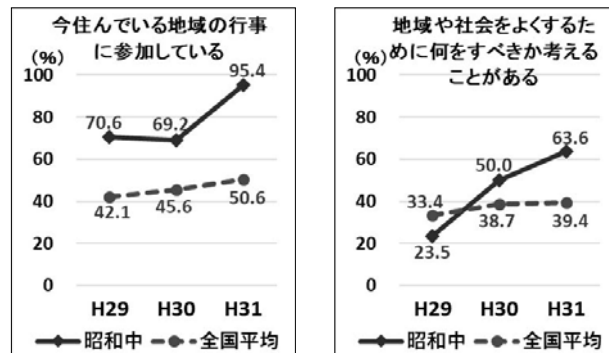


図2 全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査の結果

生徒が保護者のみならず地域住民と共に行事に参画したり、学区内の園児児童をサポートをしたり、外国人に地域のよさを紹介したりして、学区内外の多様な世代の人々と触れ合う機会を設けたことが、地域への想いを深め、地域をよくするために自分ができることを考えようとする姿勢につながったのではないかと考えられる。

(2) 視点2「主体的に英語コミュニケーションを行う態度」について

① GTECの結果

GTECは、令和元年度から参考値ではあるが全国平均が示されるようになり、本校の結果と比較することにより、英語教育の進捗を検証している。トータルスコアを見ると、元年度は本校2年生が21.4点、3年生が55.7点全国を上回っている。2年度は本校2年生が102点、3年生が48.6点全国を上回っており、好結果が続いている。中でも、Writingの数値の高さが際立つ

ている（図3）。



図3 GTECの結果

また、同一生徒集団の4技能トータルの経年比較では、2年度の3年生が2年生のときより全国平均との差を広げていることが分かる（図4）。

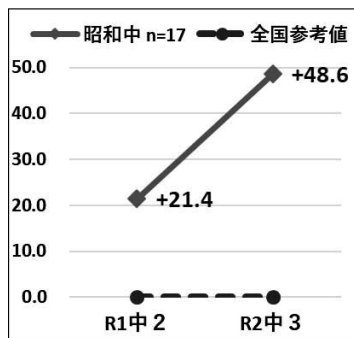


図4 同一生徒集団の4技能トータルの経年比較

② 英語を学ぶ意欲の変容

中学校3年生対象の平成31（令和元）年度全国学力・学習状況調査の生徒質問紙において、英語学習に関する質問の肯定的回答の割合は、14項目全てで本校が全国平均を上回った。そのうち、「授業では、原稿などの準備をすることなく、（即興で）自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合う活動が行われていたと思う」生徒は、全国平均を28.0ポイント上回った。また、「将来、積極的に英語を使うような生活をしたたり、職業に就いたりしたいと思う」生徒は、全国平均を21.4ポイント上回っている（図5）。令和2年度の本校3年生に同じ項目で質問紙調査を行ったところ、62.5%が肯定的回答をしており、将来にわたって英語と関わろうとする生徒の割合の高い状況が続いている。なお、2

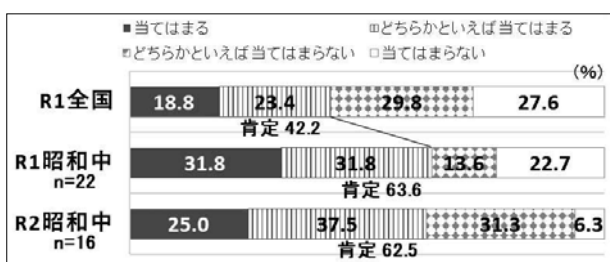


図5 質問「将来、積極的に英語を使うような生活をしたたり、職業に就いたりしたいと思いますか」の回答

年度の卒業生の一人は、英語を公用語とするフィジー共和国の国立高等学校に進学した。

①・②から、小中一貫のCAN-DOリストに基づき、ALTと会話する機会を確保しながら、様々な外国人と触れ合って異文化間理解を進めるとともに、自分の住む地域のよさを英語で伝えるインバウンド教育の活動を設定したことが、英語の学力や意欲・態度を高めることにつながったのではないかと考えられる。

(3) 成果と今後の課題

① 成果

(1)・(2)から、仮説「幼小中一貫教育を基盤として、インバウンド教育等の特色のある英語教育及び異文化間理解学習を工夫すれば、生徒は地域への愛着と誇りを持ち、主体的に英語コミュニケーションを行う態度が身に付く」ことが検証できた。

また、実践を通して、生徒がアウトプットする活動をいかに多く設定するかが重要だということが分かった。英語の授業等で周りの人に自分の気付きや考えたことを表現する活動を重ねるとともに、折に触れ地域の人々や外国人に何かを伝える体験をすることによって、英語のコミュニケーション能力や態度が高まり、「相手に通じた」という成功体験が所属するコミュニティへの愛着をもたらすという手応えが得られた。

② 課題

課題として、二つ挙げられる。

一つは、英語学力の二極化への対応である。幼稚園から英語を学び小学校で英検2級を取得する者もいる一方で、中学校に入ってからWritingの学習等につまずき自信の持てない生徒もいる。アウトプットの活動の重要性を考えると、例えば、暗唱の活動等において、何も見ずに言う、思い出せないときのみ英文を見ながら言う、日本語の文を見ながら言う、英文を見ながら言うなどと習熟度に応じた方法を生徒が自分で選んで行うなど、二極化に対応した学習指導の在り方を更に改善する必要がある。

もう一つは、交流活動の機会の保障である。新型コロナウイルス感染症により、豪州姉妹校や外国人との直接交流がしにくい状況になっている。本実践によりインバウンド教育の可能性を確かめることができただけに、交流が停滞することは生徒にとって不運である。例えば、GIGA端末を利用したオンライン交流の仕組みを構築するなど、国際社会情勢に対応した交流の場を提供することの必要性を痛感している。



小学校高学年における教科担任制の試行

—小規模校での授業交換型を中心とした教科担任制の成果と課題—

美作市立江見小学校 校長 新田 義純

1 はじめに

中央教育審議会（以下中教審）は、小中高校の教育の在り方に関する答申を取りまとめた。答申では、小学校高学年で専門の教員が教える教科担任制を2022年度（令和4年度）をめどに本格導入すると明記し、対象教科に理科と算数、英語を例示した。令和3年には、ベテラン教員の負担を考慮し、体育が追加された。

本校は全校児童134名の小規模校で、学級数は、通常学級6、特別支援学級2である。教員数は常勤13名で、本務の専科教員の配置はない（R2.5.1現在）。これまでも非常勤講師等により、音楽や理科について担任外が指導することはあったが、基本的には、担任がほぼ全ての教科領域の授業を受け持っていた。

美作市内にある9小学校で、通常学級が一学年2学級以上ある学校は1校のみで、他は単級または複式学級である。津山教育事務所管内においても、全校児童数が200人未満の小規模の小学校が約75%を占めている。

中教審の答申や多くが通常学級が単級であるという管内の状況を踏まえ、小学校高学年における教科担任制の試行を行い、小規模校での授業交換型を中心とした教科担任制の成果と課題を整理し、本格導入に向けての一助としたいと考える。

2 研究の概要

(1) 小学校における教科担任制の目的

中教審の答申に示されている次の3点である。

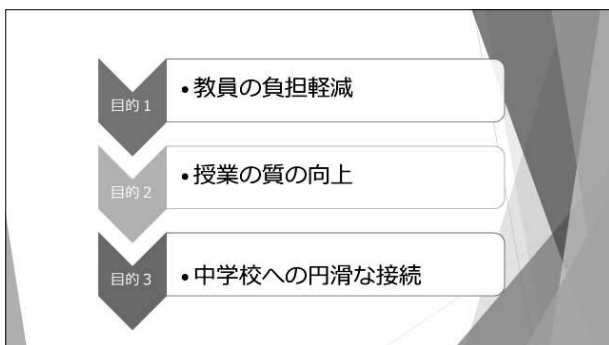


図1 小学校における教科担任制の目的

目的1は、教員の授業持ち時間数を減らすことや得意分野の授業を多く指導できることによる教員の負担軽減である。また、生徒指導に関わる教員の負担軽減も考えられる。目的2は、教員が得意分野を指導することにより授業の質が向上することである。目的3は、中1ギャップの解消を目指し、教科担任制を主とする中学校への円滑な接続である。

(2) 本校の教科担任制の実施概要

① 研究推進体制

図2に示すように、教育課程検討委員会（校長・教頭・教務主任・教務部）で原案を作成し、分掌リーダー会（校長・教頭・教務主任・生徒指導主事・保健主事・事務・研究主任・特別支援教育コーディネーター）に諮り全体提案とする。高学年団任を教科担任制プロジェクトチームとし、具体的な推進を図る。全教職員への周知と協力依頼は職員会議で行う。

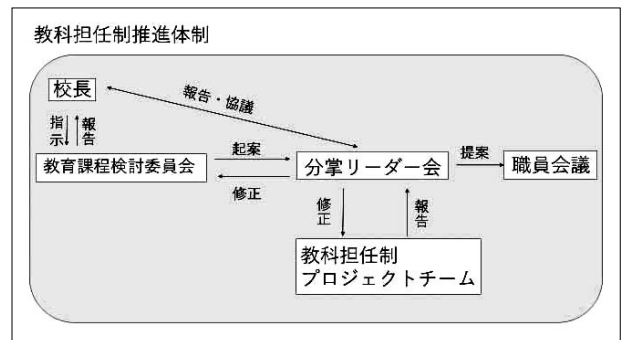


図2 教科担任制推進体制

② 実施推進体制

小学校における教科担任制は、併設型の小中一貫校等で取り組む小中一貫型、専科教員が担当する教科分担任制、担任が相互に教科を交換する授業交換型の3つの型に分けることができる。（図3）

本校のような小規模校では、授業交換型を中心として教科分担任制を一部加味して実施することとした。高学年が履修する12教科領域中、担任が授業を行うのは半分の6教科領域である。高学年の国語、社会を6年担任が指導し、算数、理科を5年担任が指導する授業交換を行った。また、非常勤講師（22h/w）と兼務の

英語専科教員等により、音楽、図工、家庭、外国語は専科指導を行った。また、学年団（低学年団・中学年団・高学年団）を組織し、教科指導と生徒指導を団全体で行うこととした。

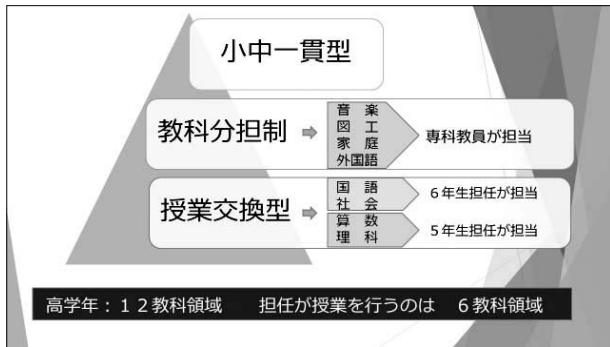


図3 教科担任制の実施分類

③ 研究の視点と検証方法

図1にある小学校における教科担任制の目的の達成状況を検証することから、次の3点を研究の視点とした。

ア) 担任の教科指導の負担が軽減されるか

授業交換により得意分野での指導が増えることで教科指導の負担が軽減されるのかを、担任への聞き取りや超過勤務時間の推移等から検証を図る。

イ) 担任の生徒指導上の負担が軽減されるか

授業交換や専科指導により従来よりも多くの教員の指導を児童が受けることで、担任の生徒指導上の負担が軽減されるかを、児童の意識調査であるi-checkの結果や児童アンケートから検証を図る。

ウ) 児童の授業へ向かう力は高められたか

教科担任制の目的は授業の質の向上であるが、その具体の成果として表れるのは、児童の授業へ向かう力が高まったかどうかである。全国・県学力・学習状況調査等の結果から検証を図る。

3 研究の内容と検証

令和2年度の教育課程編制に当たり高学年における教科担任制の実施とその成果と課題について検証を行うことを分掌リーダー会に提起し、教育課程検討委員会で原案を起案するよう指示した。年度当初の職員会議で校務の分掌を行い、教科担任制プロジェクトチームを始動させた。研究の視点に沿って検証を行う。

ア) 担任の教科指導の負担が軽減されるか

ミライムによる勤務時間管理集計から、5、6年担任の超過勤務時間を令和元年度と比較すると、4月～6月平均で月1時間減の改善が図れた。また、令和2

年度の全県費負担教職員5月～11月（7・8月除く）超過勤務時間は毎月減少となり、5月と11月比較では1日平均で-22分であった。（図4）年度比較では、平成30年度-10分、令和元年度-2分となった。

年度別超過勤務時間1日平均

年 度	H30	R1	R2
1日平均超過時間	2h30m	2h22m	2h20m

時短をもって負担の軽減が図られているとは言い切れないが、教材研究等の効率化により時間的余裕が生まれることは改善傾向である。また、高学年担任の授業時間数は、授業交換型では減少せず、兼務の英語専科の配置や非常勤講師の時数増により若干の減少が図られた。

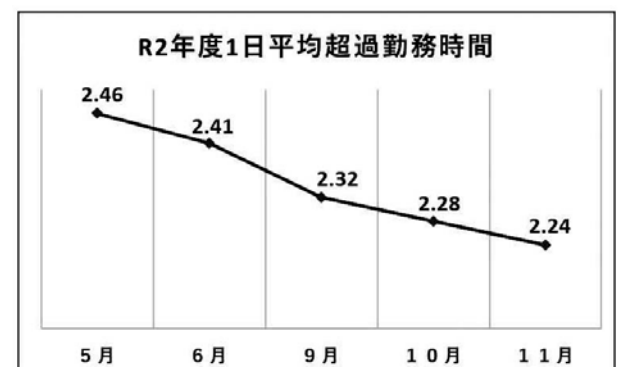


図4 江見小学校1日平均超過勤務時間グラフ

イ) 担任の生徒指導上の負担が軽減されるか

高学年団として児童を見守り、指導することが例年以上に増えた。担任からは「児童への指導を複数で行うことや、多くの目で児童を見守ることができ安心感がある」という声があった。9月に実施された運動会でも高学年団として指導を行うことができた。また、高学年においては、長欠児童や暴力行為、いじめの認知が令和2年度状況で0であった。

現6年生について、令和2年6月実施と令和3年6月実施のi-checkの結果から児童の意識の変容を比較する。（図5）

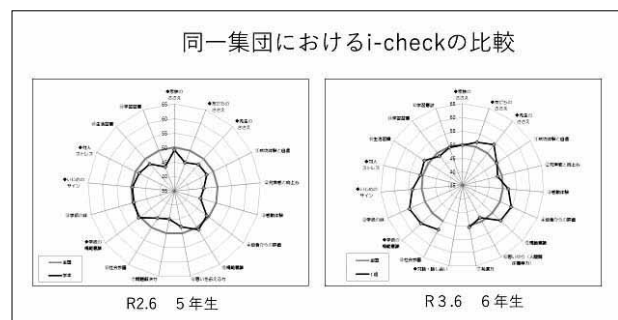


図5 同一集団のi-check結果の比較

自己肯定感や自己有用感に関する自己認識では〔先生のささえ〕〔他者からの評価〕が高まっている。社会性では〔規範意識〕〔社会参画〕が高まっている。学級環境では〔学級の絆〕〔対人ストレス〕が高まっており、学習意欲も改善傾向である。高学年団で高学年を見守ることが増えたことも一因として児童に肯定的な意識が高まったと分析している。

また、現6年生について令和2年7月実施の県学力・学習状況調査と令和3年5月実施の全国学力・学習状況調査の児童質問紙結果を比較すると、自己肯定感に改善が見られた。（R3国調査は結果が未返却のため自校でのデータ処理を行ったもの）

児童質問紙の肯定的結果 (%)

項目	R2 県調査	R3 国調査
自分には良いところがある	78.9	94.7
将来の夢や目標を持っている	84.2	100

児童の学校生活や自己認識が改善され、生徒指導上の指導や協議に費やす時間が減ったことは、担任の生徒指導上の負担が軽減されたと考える。

ウ) 児童の授業へ向かう力は高められたか

教科担任制について児童アンケートを4月、7月、12月に実施した。12月結果（図6）からは、「とても良い」・「よい」を合わせると94%であり、7月より4ポイント下げた。「あまり良くない」と児童が挙げた理由としては、「国語の問題がわからないとき、聞きに行きたいとき聞きにくいから」「聞きたいことがあったりしたとき、担任の先生が6年生授業でいないことが何回かあったから」と、教科担任制の本質的な課題に迫るもので、真剣に児童が考えていることが伺われ、ポイントは下げたが前向きに捉えることができる。「とても良い」・「よい」と児童が挙げた理由としては、「毎時間気持ちを切り替えて授業に取り組めるから」「1人1人の先生がていねいに教えてくれるので、最後まで問題を解くことができ、楽しいって前より思います」といったものがあった。

担任への聞き取りでは、「教科の系統性が分かりやすく、指導に生かすことができる」「教科の準備を2学年一緒にできる」「多くの教員が入ることで、児童は褒めてもらうことが増え、自信に繋がっている」という声が聞かれ、教科担任制のメリットを感じることができた。

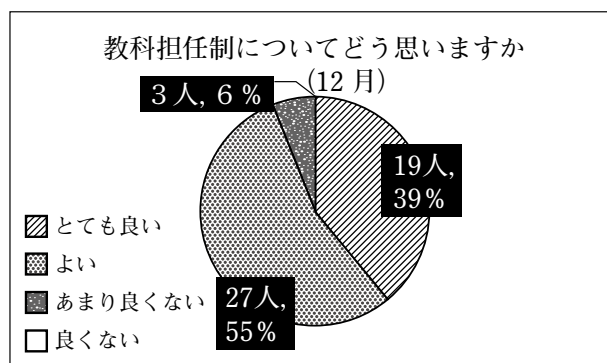


図6 児童アンケート (12月)

全国・県学力・学習状況調査児童質問紙結果から教科への関心意欲の項目を比較検討した。

児童質問紙の肯定的結果 (%)

項目	R2 県調査	R3 国調査
国語の勉強は好きだ	*	52.6
国語の授業は良く分かる	94.7	89.5
国語の書く問題を努力した	*	94.7
算数の勉強は好きだ	*	57.9
算数の授業は良く分かる	68.4	94.7
算数の書く問題を努力した	*	100

〔*空欄は質問項目が無い〕

〔国語の授業の内容はよく分かる〕県学力・学習状況調査児童質問紙の結果は94.7%、全国学力・学習状況調査の結果は、89.5%であった。〔算数の授業の内容はよく分かる〕県学力・学習状況調査児童質問紙の結果は68.4%、全国学力・学習状況調査の結果は94.7%であった。学校経営アクションプランに示す同設問への基準が85%以上であることから、国語、算数とも概ね良好である。〔○○の勉強は好きだ〕〔○○の書く問題を努力した〕もここ数年の結果より改善傾向である。

本校はここ数年の各種調査結果から、算数に苦手意識の強い児童が多い、という分析であったが、自校採点等からは算数の伸びが感じられる。D層児童への個別指導や美作大学との共同事業である放課後学習など、いくつか要因はあるが教科担任制も一つである。このようなことから、各教科の知識理解や関心意欲等の児童の授業へ向かう力は高められたと考える。

4 小学校における教科担任制の成果と課題

(1) 成果

ア) 担任の教科指導の負担が軽減されるか、イ) 担任の生徒指導上の負担が軽減されるか、ウ) 児童の授

業へ向かう力は高められたかの3つの研究の視点に沿って、その内容と検証を行った。どの視点の検証にも教科担任制の有効性がある。特に、閉鎖的になりがちな学級担任制から複数の教員が指導にあたる教科担任制は、児童の発達段階に適している。また、教員が得意分野を指導することにより、授業に工夫改善が加わり、児童の授業への関心意欲が高まったと感じる。さらに、2学年で共通する教材研究や授業準備を行うことで時間的なゆとりを生み出すことも場合によってはできた。

(2) 課題

ア) の視点に関わる課題

超過勤務時間は改善傾向ではあるが、学校平均月45時間を若干超えており依然長時間勤務である。授業交換型では、実験準備や片付けを伴う理科を受け持つ教員への負担が大きいことが分かった。宿題は誰がどのように点検するのかと言った基本的な教科担任制による役割分担の整理が必要であった。授業交換型では担任の授業数は減少しないことや、他学年での授業は児童との人間関係づくりに負担があることも課題である。

イ) の視点に関わる課題

教科担任制についての児童アンケートの意見欄に「授業が延びて休み時間が減っても代わりがない」「休み時間にトラブルが起こったとき、担任の先生にすぐ伝わらないのが少し不安」とあった。担任からも「担任として子供が見えにくいところがある」という意見があり、担任がほとんど教室にいた昨年度までとの違いに少し戸惑いがある。担任としての細かい声かけと高学年団が高学年の児童を見守り指導する体制を高めることが大切である。

ウ) の視点に関わる課題

前述の児童質問紙の結果にある「○○の勉強が好きだ」の肯定的な回答は50%台である。担任への聞き取りでは「教科の系統性が分かりやすく、指導に生かすことができる」「教科の準備を2学年一緒にできる」という声が聞かれた。この長所を生かし、児童に還元するには、より教員の力量を高めることが必要である。

エ) その他の課題

教員の得意分野を生かし授業の質の向上を図るには、教員の配置に工夫が必要である。必ずしも授業交換型にあった教員が高学年団となるとは限らない。特に小規模校では教員数が少なく、担任を含む校務分掌を如何に組むかが課題である。中教審の答申では、教

員の数や専門性を確保するため、小中学校両方で教えられるよう教員免許の取得要件の弾力化を提案している。

教員としては得意分野をより深めることができる反面、長年指導しない教科等ができる。小学校では全ての教科等を指導することにより、幅広い指導力を身に付けてきた。その人材育成の過程に課題が生じることが考えられる。

さらに、担任不在時の補教の組み方や時間割編成が複雑になること、特別支援学級の運営にも影響があることが分かった。

5 まとめ

令和2年度の小学校高学年における教科担任制の試行を通じ、その成果と課題を3つの視点から整理した。令和4年度からの本格導入を前に、1つの提言を行いまとめとしたい。

小学校高学年における教科担任制の導入に学校規模や自治体での差があってはならない。本校規模程度の小学校では専科教員の本務校配置は少なく、教科分担任制を中心とした教科担任制は実施が難しい。授業交換型も同一学年内での実施はできず、教員の負担増となることも考えられる。このことへの対応は、教育環境や教職員配置のさらなる改善が欠かせない。改正地方公務員法が成立し、令和5年度から段階的に定年が延長されることとなった。豊富な経験と知識を有するベテラン教員のモチベーションの維持と学校力の向上を図ることからも、ベテラン教員を専科教員として、教員定数枠を広げて積極的に配置されることを期待する。また、定年後は短時間再任教員としてスポット的な配置も考えられる。70歳までの雇用が検討される中で、教科担任制の円滑な実施にベテラン教員の担う役割は大きい。

今後の小学校教育は、児童の発達段階を考慮し学級担任制と教科担任制が併用されることが考えられる。各校は、それぞれの長所と短所を整理し、「トラブルが起こったとき、担任の先生にすぐ伝わらないのが少し不安」といった児童の心に寄り添う計画の立案が求められている。

本校においても令和2年度の高学年における教科担任制の試行を契機として、教員の働き方改革と児童の個別最適な学び・協働的な学びについての研修と実践を行い、成果と課題を再整理することで令和の時代にあった学校教育の推進を図りたいと考えている。



志を育む系統的なキャリアプログラムの編成と検証

—未来を拓く普通科高校生の育成を目指して—

岡山県立笠岡高等学校 校長 山崎 淑加

1 はじめに

本校は岡山県南西部に位置する全日制普通科高校で、令和3年度に創立120年目を迎えた定員560名の中規模校である。古くから「千鳥」の愛称で地域に親しまれ、地域の進学拠点校として、良き伝統を継承しつつICTの利活用等、先進的な教育活動にも取り組んでいる。

本校では平成30年度にカリキュラム・マネジメントにより、学校教育目標を「志高く自らの人生と社会の未来を拓く人を育てる」に改定した。あわせて、若手教員を中心としたワーキンググループを組織して中央教育審議会答申（2016年）に示されている「育てたい資質・能力」の3つの柱について研究し、本校が育てたい資質・能力を検討した。その結果、社会の中で役割を果たしながら自分らしい生き方を実現し、新しい知や価値を創造していくために必要な資質・能力として「教養力」「思考力」「表現力」「協働力」「省察力」「志力」を掲げ、これら6つの力を総称して「未来開拓力」と呼ぶこととした。「未来開拓力」は表1のように定義している。

表1 「未来開拓力」の6つの資質・能力

教養力	幅広い教養と課題発見・解決のための知識・技能
思考力	論理的に考え、批判的に掘り下げ、創造する力
表現力	思考・判断の結果や経過を分かりやすく伝える力
協働力	多様な他者とコミュニケーションをとり、協力する力
省察力	自らの行動を振り返り、改善し、前に踏み出す力
志力	志高く挑戦し、主体的に人生や社会の未来を拓く力

2 研究の背景と目的

本校では平成15年度から「総合的な学習の時間」を「ACT」と称し、知の総合化、進路観・勤労観の確立を目指して、「課題探究学習」「体験的学習」「進路探究学習」「情報活用能力・コミュニケーション能力・自己表現能力の育成」の4本柱からなるキャリアプログラムを実施してきた。「総合的な学習の時間」を「将来につながる総合的な学力（人間力）を育成する時間」と捉え、「各教科・科目」「特別活動」を有機的につなぐ軸と位置付けた体系的なACTプログラムは、「総合的な学習の時間」が進路学習に偏りがちだった当時の趨勢の中で、先進的な取組として全国から注目を集めた。ACTという

名称には、「一人ひとりが主体的に（Active）、じっくりと考え（Thinking）、自分らしく創造（Creative）する」時間という意味が込められている。

そして、「総合的な学習の時間」から「総合的な探究の時間」への移行を機に、生徒に未来開拓力を総合的に身に付けさせるプログラムづくりを目指してACTを軸としたキャリアプログラムの改定を行った（図1）。改定の指針となるキャリア教育目標を「社会に開かれたカリキュラムで、系統的なキャリアプログラムに基づいた進路指導を進め、自らの人生と社会の未来を考える活動をとおして、社会の中で役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくために必要となる資質・能力、未来開拓力を育む」と定めた。その目標を達成するため、社会と自らの生き方を関連づけて考え、主体的に自身の進路を拓く「キャリア探求」と、正解のない課題について探究し、解決へのアプローチを身に付ける「課題探究」を2本柱としたキャリアプログラムの編成を目指した。本研究では、プログラムの実施による成果と課題を検証する。

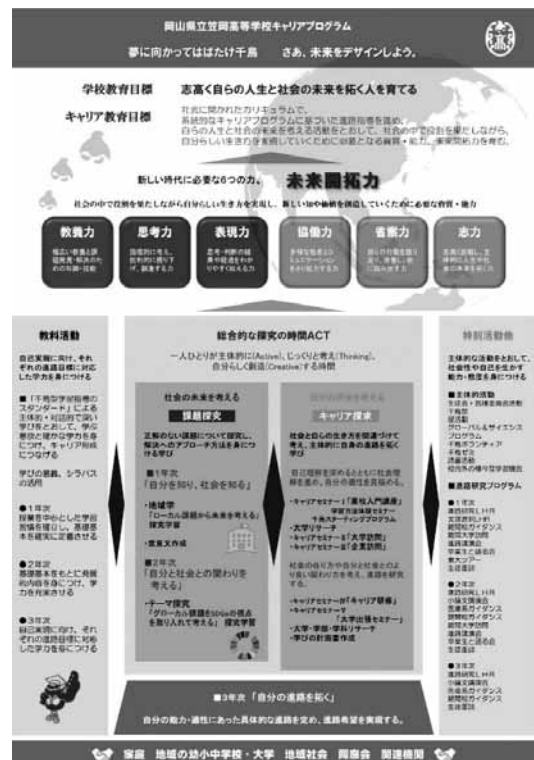


図1 岡山県立笠岡高等学校キャリアプログラム

3 新プログラムの内容

生徒の学習段階等に応じて各年次での重点目標を次のように定めた。

- 1年「自分を知り，社会を知る」
- 2年「自分と社会との関わりを考える」
- 3年「自分の進路を拓く」

重点目標に合わせて「課題探究」では，自らの人生と関連付けて考える「社会の未来」を2段階に分け，1年次ではローカル課題から未来を考える地域探究活動である「地域学」を，2年次にはグローバルな課題に対して問を立て，解決策を考える「テーマ探究」をそれぞれ半年間実施することとした。これは身近な地域課題についての探究から始めることで，社会の課題を自らの問題として捉えやすくなると考えたことによる。また，探究活動を進め，P D C Aサイクルにのっとり自己分析を繰り返すことで，生徒自身の力で「未来開拓力」を育むことができると考えた。

自治体や近隣の大学など，地域人材の活用にも積極的に取り組んだ。1年次に社会を身近に感じることや，自身が社会で果たす役割が考えられるように校外活動を増やした。生徒は地域関係者から継続的に指導を受けることで地域社会を身近に感じることができ，地域関係者は学校の活動を理解する機会を得ることができるなど相互にメリットがあった。

「キャリア探求」では，自己理解の深化が進路実現につながるよう，探究活動とも関連付けながらキャリアセミナー等を有機的に配列した。

なお，総合的な探究の時間は1年次に2単位，2年次に1単位を配当し，3年次は学校設定教科「探究」やL H R等でプログラムを実施することとした。

(1) 1年次のプログラム

ア 高校生入学講座（キャリア探求）

高校生としての学び方を学ぶ。スムーズな高校生活への接続のため，入学直後に学習方法を学び，約2週間7校時をL H Rとして，仲間作りやA C T，キャリア・パスポートのガイダンスを行う。4月に1日研修として実施する「千鳥スターティングプログラム」も本講座の内容として位置付けている。この期間で生徒たちは不安な様子から，明るい雰囲気になっていく。

イ 大学リサーチ（キャリア探求）

クラス内グループで国立総合大学について調べ，ポスターセッションを行う。教員が提示した「絶対

に調べること」とグループの興味・関心に合わせた「調べてみたいこと」を組み合わせたポスターを作成する。

今年度は一人一台端末として導入されたiPadでポスターの写真を撮り，そこに発表内容を書き込む形でセッションするなど，生徒の主体的なI C T活用場面が見られた。

ウ 地域学（課題探究）

地域学ではグループで地域課題について探究し，解決策をポスターセッション形式で発表する。



図2 ICTを活用したシンキング

笠岡市長の基調講演や市役所各課からの課題提示，各課の支援によるフィールドワークを経て，大学教員による探究方法講習会を受講する。これらの機会は生徒のみならず，教職員にとっても研修の好機となっている。A C Tプログラムでは，全てのプログラムの基調講演を外部講師に依頼し，取組の趣旨やファシリテートの方針を教員が共有できるよう工夫している。生徒はシンキングツールを活用して（今年度からiPadを活用 図2）大学教員から指導を受けながらテーマ設定を行い，探究活動を開始する。笠岡市のバックアップ体制は年々充実し，生徒の疑問に答えるため地域関係者とともに何度も学校を訪ねたり，生徒にイベント参加を促したりすることで，生徒が学びを深める機会が拡充している。

最後のポスターセッションは市長をはじめとした市の関係者，大学教員，地域関係者，前年度「地域学」



図3 市長の前で説明する生徒

を経験した2年次生などが参加して開催している（図3）。また，セッションの中では，参加者から生徒たちに厳しい質問が飛ぶが，その場で思考力や表現力を働かせて説明している姿は頼もしく感じる。このように，活動全般を通じて笠岡市役所，福山市立大学の教員から支援を受けることにより，生徒も地域の温かさを実感している。

エ 意見文作成（課題探究）

地域学のまとめとして、自分が探究した課題について意見文を作成する。探究の過程を文章化し、相互評価する。

オ 企業訪問（キャリア探求）

地域学での探究活動を通じて理解が深まった井笠周辺地域に拠点を置く地元の企業を訪問し、社会の発展に貢献する企業の活動を知ること、職業観や勤労観の確立を図る。また、グローバルに展開する地元企業の活動を知ること、2年次に行うテーマ探究につなげる役割も持つ。訪問先は業種の異なる複数のコースから生徒が選択する。地域で活躍する社会人が、仕事内容だけでなく、高校時代に身に付けておくこと等を熱く語ることにより、生徒たちの心にも響いたのではないかと思う。

(2) 2年次のプログラム

ア テーマ探究（課題探究）

地域や世界が抱える課題に対して、問や仮説を立て、SDGsの視点も取り入れて考察し、探究活動を通じて論文を作成する。地域学での探究経験をベースに、文系はノートルダム清心女子大学文学部現代社会学科、理系は岡山大学工学部と連携して探究活動を進める。大学教員には地域学同様、基調講演、中間発表、発表会でも指導を受けている。特に大学を訪問して実施する中間発表は、大学という研究の場で、研究の専門家である大学教員から探究の

方針についてアドバイスを得られる貴重な機会である。（令和2・3年度はオンライン実施）この縁で大学の研究施設で実験する機会を得た生徒もいる。

また、生徒は1年次の探究活動の経験を生かして、直接現地（学校や福祉施設、企業等）に赴いて、聞き取り調査を行ったり、Googleフォームを利用してアンケートの作成・分析を行ったりするなど、成長を感じる場面が多くある。さらに、探究過程のワークシートを作成するなど、短期間で論文を作成できる工夫をしている。

イ 大学・学部・学科リサーチ（キャリア探求）

志望学部・学科系統について複数大学の3つのポリシーを比較検討してレポートを作成し、三者懇談で担任や保護者にプレゼンテーションする。12月の三者懇談は担任が保護者と共に、生徒の思いを傾聴する時間となっている。

ウ 学びの計画書作成（キャリア探求）

2年間の高校生活を振り返り、進学先でどのような資質・能力を身に付け、将来どのように社会に貢献したいかをテーマとしてレポートを作成し、3年次の担任にプレゼンテーションする。この取組は、生徒の志望形成を強力に後押しすることとなる。教員もACTの最後の活動となる「学びの計画書作成」をイメージして2年間のキャリアプログラムをファシリテートしている。

表2 「未来開拓力」ルーブリック

資質・能力 ・態度	教養力			思考力			表現力			協働力			省察力			志力			
	幅広い教養と課題発見・解決のための知識・技能	論理的に考え、批判的に掘り下げ、創造する力	思考・判断の結果や経過をわかりやすく伝える力	多様な他者とコミュニケーションをとり協力する力	自らの行動を振り返り、改善し、前に踏み出す力	志高く挑戦し、主体的に人生や社会の未来を拓く力													
レベル 1	教科を横断する幅広い教養を身につけ、世界・社会の状況の変化やその課題を発見・解決するための知識・技能を獲得する。	物事を論理的に考え、批判的思考で掘り下げ、新しい価値を生み出すことができる。	思考・判断の結果や経過をわかりやすく伝えることができる。	多様な他者とコミュニケーションをとり、仲間と協力・協働しながら互いに高められる行動が取れる。	自分の行動を振り返り、常に改善しようとする意識を持ち、次の行動につなげることができる。	高い志を持って将来の生き方や地域・国内外の未来を真剣に考え、前向きに自分の将来を設計することができる。													
レベル 2	教科の学習等を通じて、地域や社会の成り立ちについての幅広い知識を得る。	獲得した情報を整理できる。	自分の意見や考えを、話したり書いたりすることができる。	集団の中で、決められたことや指示されたことに一人で行き届くことができる。	自分で目標を立てることができる。	物事を前向きに捉え、社会の一員としての自覚を持ち、将来の進路について考えることができる。													
レベル 3	興味を持って各教科等の知識をつなげ、地域の課題についての基礎的な知識を得る。	課題やその解決のための内容を論理的に考えることができる。	自分の意見や考えを、伝えたいことを明確にして、話したり書いたりすることができる。	集団の中で、自分の役割を見つけて、個性を活かしながら行動できる。	自分の目標と現実の差を見つめることができる。	さまざまな活動に挑戦し、社会の抱える問題に目を向け、自分の適性に対する理解をしようとすることができる。													
レベル 4	日々の学びの中で、持続可能な社会実現に向けた課題や、世界の状況・課題についての基礎的な知識を得る。	情報を収集し、分析・評価を活用しながら課題を発見したり設定したりできる。	自分の意見や考えを、主張を支えるための根拠を持って、話したり書いたりすることができる。	集団の中で、他者の良さに共感し、身近なメンバーの支援ができる。	自分の目標に近づく方策を考え自ら行動することができる。	目の前の課題に主体的に取り組み、社会と自分をより深く理解し、自分の適性を見極めることができる。													
レベル 5	社会の諸課題について主体的に獲得した知識を深め、知識を関連づけることができる。	課題やその解決のための内容について、現実を踏まえ批判的に掘り下げて考えることができる。	自分の意見や考えを、根拠と主張をつなぐ理由を明確にして、話したり書いたりすることができる。	集団の中で、共通の目標を立てて活動を進めることができる。	自分の目標達成のための行動を振り返り、分析・改善し、次の行動につなげることができる。	社会と自分とのよい関わり方を考え、社会に貢献しようとする高い志を持ち、将来の生き方や生活を考え、自分にあった具体的な進路を明確にできる。													
評価	年次	1年次	2年次	3年次	1年次	2年次	3年次	1年次	2年次	3年次	1年次	2年次	3年次	1年次	2年次	3年次	1年次	2年次	3年次
	前期																		
	後期																		
		1年 組 番	2年 組 番	3年 組 番				氏名									男	女	

(3) 3年次のプログラム

学校設定教科「探究」のほか、進路別のガイダンスなど、生徒が自らの能力・適性に応じた進路が実現できるようプログラムの充実を図っている。

(4) ルーブリックによる評価

ACTの振り返りツールの1つとしてルーブリック評価を実施している(表2)。図4は令和元年度入学生の1・2年次のルーブリック評価の平均値の推移である。全ての項目で一様に評価が向上している。

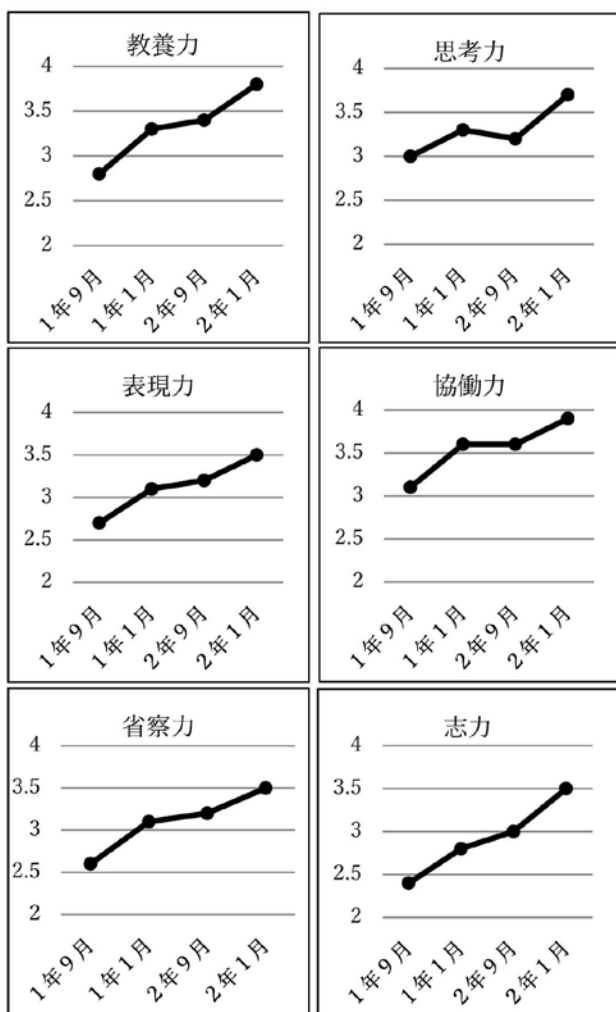


図4 ルーブリック評価の推移 (令和元年度入学生)
1年次 n=177 2年次 n=173

特に「教養力」と「志力」の伸びが大きくなっている。「教養力」は探究活動で日頃の学びを活用しながら、教科書には載っていない、新しい知識を得る機会が多くあったからと考えられる。「志力」は入学当初最も平均値が低いが、2年後期で大きく伸びている。キャリアプログラムを通じて地域や社会との関わりの中で自分の興味・関心のある事柄を見付け、キャリアプランニング能力を高めることができた成果である。

4 研究の成果と課題

未来開拓力の育成を目指して改定したプログラムは大きな成果を上げていることが分かった。それは、前述のルーブリック評価の数値からも明らかであるが、令和2年度の学校自己評価アンケートで「笠岡高校は、「総合的な探究の時間 (ACT)」などを利用して、将来の進路や生き方について、考えを深めさせるように、計画的に指導ができていますか」という質問に対して、コロナ禍の影響から充実した環境でプログラムを実施できなかったにもかかわらず、全校生徒の83パーセントが肯定的な回答をしていることから言える。生徒の振り返りの記述を見ると、地域学では「笠岡市がもっと好きになった」、「笠岡市職員のアドバイスで新たな視点に気付いた」などの意見もあり、笠岡市職員をはじめとした外部人材の熱意あふれる指導により、継続的な地域連携の成果が表れている。

このほか、キャリアプログラムでの生徒の主体的な活動の成果としては次のようなものがある。

- ・地域学における生徒の提案が実現し、駅前イルミネーションを行うこととなり、笠岡市の新たな魅力づくりに貢献できた。
- ・地域のワークショップや県内の探究成果発表会に参加する生徒が増加した。
- ・生徒が探究活動で学んだことをより深く大学で学びたいという志望が増加した。地域探究系学部志望者も増加した。

課題として、探究活動における教職員の指導力の向上や生徒の活動時間の工夫などが挙げられる。

5 まとめ

これまでの取組により、進学を主とする高等学校でのモデル的なキャリアプログラムの形がほぼ完成したと考えている。今後は、各教科・科目、特別活動他とのさらなる往還を目指して、PDCAサイクルにのっとり短いスパンで成果と課題を検証しつつ、より有効な取組としていきたい。また、新ACTプログラムで生まれた地域連携の更なる強化を図り、学校の魅力化・特色化につなげていきたい。

6 参考文献

- 高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編 文部科学省
- 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(平成28年)



命の大切さを実感し、自ら命を守ることでできる 子どもを目指して

—ユニバーサルデザインの視点を取り入れたコロナ禍における命の教育—

総社市立池田幼稚園 園長 横山 木実

I はじめに

令和元年から日本に入ってきた新型コロナウイルス感染症は、瞬く間に全国へと広がりを見せた。不安だけが私達を取り巻き、本園でも休園になった時期がある。幼稚園を再開した際には、徹底して「3密を避け、うがい、手洗い、消毒、マスクの着用」に取り組んだ。しかし、幼い子ども達にマスクを付けさせることや肩を寄せ合って遊ぶ子ども達に距離を取らせることは簡単なことではない。3年前からカイコやアカハライモリの飼育を通して、命の教育に取り組んではいるが、コロナ禍で何が起こるか分からない今、一人一人の子どもが自分の命は自分で守るという強い思いを抱いてほしいと願っている。そのためには、全ての子どもにとって分かりやすい命の教育を行い、命の大切さを自分のこととして捉えることができるようにしていきたい。そこで、ユニバーサルデザインの考えを取り入れ、焦点化や共有化、視覚化などの視点で、命の教育を見直すことにした。本研究は、ユニバーサルデザインの視点を取り入れてカイコやメダカの飼育などに取り組み、子ども達一人一人が自らの命を守ることを目指した昨年度から本年度にかけての実践である。

II 研究の概要

1 自らの命を守ることに繋がる研究仮説

(1) 研究仮説

「焦点化」「共有化」「視覚化」「環境構成」など、ユニバーサルデザインの視点を取り入れて命の教育を行えば、子ども達一人一人が、命の大切さを知り、自ら命を守ろうとするだろう。

(2) 研究仮説の設定理由

①焦点化について

ねらいや活動がシンプルであればあるほど、子ども達は何をすべきかを理解し、熱中して活動することができる。子ども達一人一人にカイコやメダカの世話をしたいという思いをもたせることで、しっかりと生き物に関わらせ、命の大切さの実感につなげたい。

②共有化について

幼稚園児だからこそ伝わる言葉がある。それを見極め、本園児に合った言葉を使うことで園児の思いを共有する。また、保護者と情報共有をすることで、家庭と幼稚園が同じ考えで、命を守る行動を取ることができると考える。

③視覚化について

言葉だけよりもビジュアル化することで、子ども達の理解は深まる。また、何をどこで、どのように見せるかを工夫することで、命の大切さに気付き、命を守る行動につながると考える。

④環境構成について

適切な環境は、興味を抱ききっかけとなり、継続して取り組むエネルギーになる。命を守ることに繋がるような環境を構成することは、子ども達が命の大切さを実感し、主体的に命を守ることに繋がると考える。

2 研究の実際

(1) 焦点化の視点を取り入れた実践

①カイコの飼育におけるキーワードによる焦点化

命の大切さを実感するためには、子ども達が主体的に生き物と関わる体験が必要だ。子ども達が自分からカイコを飼ってみたいという思いにさせる必要がある。そこで、カイコの卵と生まれたばかりのケゴの状態のカイコを見せた。カイコを初めて見た年少児も「小さい。」「かわいい。」と言って興味を示した。しかし、それだけでは、最初は世話をしているも段々と興味が薄れていく。そこで、「カイコのお父さん、お母さんになってくれないかな。」と呼びかけた。喜んで賛成する子ども達に「お父さん、お母さんならどんなことをするかな。」と尋ねた。口々に「毎日ごはんをやるよ。」「カイコのおうちもきれいにしてあげる。」「カイコが



写真1 自分のカイコを選ぶ園児 写真は昨年も育てた経験が

大きくなるまできちんと世話をしてあげるよ。」と言い、これから何をすればよいか、見通しをもたせることができた。年長

あるので、「かわいいよ。この後、白い芋虫になって、白い蝶になるよ。」「手乗り蝶になるよ。」と嬉しそうに教えていた。それを聞いた年少児も、ますますやる気になった。この日から園庭の桑の木から葉を採ってきてカイコに食べさせるのが朝の日課となった。カイコが蝶になると自慢気に自分のカイコを手に乗せて見せ合う姿も見られた。自分はお父さん、お母さんだという気持ちが、自分のカイコが卵を産むまで大切に育てたいという気持ちを強くし、最後まで世話をすることにつながっていった。

②メダカの飼育におけるキーワードによる焦点化

地域のAさんが、大切に育てているメダカをたくさん持って来てくださった。園でもメダカは飼っているが、餌をやって可愛がっているのは特定の子だけである。どの子にもメダカに関心をもたせるために「メダ



写真2 メダカすくいをする園児

カすくいをしよう。」と呼びかけた。大喜びで、ポイを手にした子ども達はメダカすくいを始めた。自分ですくったメダカは

特別らしく、じっと眺めたり、「大丈夫？」と話しかけたりしていた。さらにメダカを命ある大切な生き物としてもっと可愛がるために、「メダカを家に持って帰る？メダカのお父さん、お母さんになる？」と聞いた。子ども達は大喜びで「今度はメダカのお父さんだ。毎日エサをあげるよ。」「メダカのおうちもきれいにするよ。」「大きくなるまで世話するよ。」と答えた。

後日「家で、ずっと可愛いと言って見えています。」「自分のメダカだから、毎日餌をあげています。」などと教えてくれる保護者もいて、大切に育てていることが分かった。園でも、今までメダカに興味が無かった子どもが、「うちのと色が一緒じゃ。」「この子にもエサをあげていい？」と園のメダカも命あるものとして大切にするようになった。このように、子ども達は、メダカすくい、お父さん、お母さんというキーワードにより、命の大切さに気付いていった。

(2) 共有化の視点を取り入れた実践

①みんなの思いを共有させた「伝わる言葉」

テレビなどで「3密を避ける」ということが言われ始めた頃、B児が「密になったら、コロナになるって言うよったよ。だから、ぼくが、みんなが近づきすぎたら教えてあげるよ。」と言ってきた。B児は、みんな

が集まって遊んだり、話をしたりする度に「密です！密です！」と呼びかけた。教師もその言葉を使い、お互いに離れて距離を取るよう促した。最初は、あまり意味が分からなかった子どもも、何回も「密です！密です！」と言う場面を経験することで、意味を理解して友達と距離を取るようになった。そして、B児以外の子ども達も、「密です！密です！」と言って、ソーシャルディスタンスを意識するようになった。このように、「密です」という言葉が子ども達の思いを一つにつなげていった。

②園便りを通して保護者との共有

降園時には、その日の出来事を担任が保護者に報告しているが、百聞は一見にしかず。子ども達の笑顔や夢中で活動している姿など、その時の様子がよく分かる園便りを週1回程度発行している。避難訓練や子



写真3 園便りNo.9 地震の避難訓練

どもだけの交通教室の記事を載せた時には、家でもその時学んだことが話題になったようだ。保護者から、

「地震の時には、ダンゴムシになって机の下に潜ると言って家でもして見せてくれました。」「傘を開いたり閉じたりするのが難しかったみたいで、家で一緒に何回も練習しました。」などの返事をいただいた。このように、園便りが幼稚園と家庭を結び付け、命を守る活動につながっていった。

(3) 視覚化の視点を取り入れた実践

①感染症の正しい理解につながった電子紙芝居

新型コロナウイルス感染症については、各家庭で「怖い病気」ということは教えられており、子ども達はマスクもしなければならないということは知っていた。しかし、言われるからするだけで、なぜしなければならないかはよく分かっていなかった。中には、マスクを嫌がってしない子もいた。そこで、新型コロナウイルス感染症についての理解を深めるために「コロナウイルスに負けないぞ」という電子紙芝居を見せた。視聴の後、多くの子ども達が「コロナは、目には見えなほど小さくて、人から人へとうつる。」「自分を守るためにマスクをしなければいけない。」「たくさんご飯を食べて、たくさん寝るとウイルスから自分を守るバリアができる。」と言っていた。また、「大好きなおじ



写真4 電子紙芝居を見る園児
 いちゃんにうつしたらだめだ。ほくは、ちゃんとマスクをしてコロナにならないようにする。」という声も聞かれた。この日を境にそれまでマスクはベタベ

②体調管理につながった健康調べカード

健康調べカード	熱	咳	嘔吐	下痢	頭痛	その他
月日(曜日)	熱	咳	嘔吐	下痢	頭痛	その他
例:	36.7	咳あり	嘔吐なし	下痢なし	頭痛なし	なし
6/21 (月)	36.8	咳あり	嘔吐なし	下痢なし	頭痛なし	なし
6/22 (火)	36.5	咳あり	嘔吐なし	下痢なし	頭痛なし	なし

写真5 毎日の健康調べカード
 登園が始まっ
 健康調べカード
 温、体調異常の
 あるなし、送迎者の体温などを記入してもらい、健康状態をチェックしている。朝、このカードを見るだけで、子どもの体調を知ることができる。また、保護者も、カードへの記入を通して、今まで以上に、子どもの様子をよく見るようになった。子ども自身も「今日は36.5だよ。」とあいさつと共に体調を気にかけるようになった。

③自分でマスクをつけることにつながった「バキューンの手」

年少児にとって、マスクを付けることは難しい。片方は付けられるが、もう片方が中々できない。耳をひもの中に入れて掛けるということができないのだ。「手伝って。」と言っていたが、できない自分にイライラして、「もうマスクしない。」と言うこともあった。そこで、「バキューンの手をしてごらん」と言って手の形を見せた。その手を見ながらバキューンの手を作っ



写真6 バキューンの手

た子どもに、親指と人差し指の間にひもを通して耳に掛ける練習をさせた。すると、自然にひもを広げることができスムーズに耳に掛けることができるよう

になった。自分でマスクを付けることができるようになった子は、「ほら、もう自分でできるよ。」と自慢げに目の前でマスクを付けて見せてくれた。このように、「バキューンの手」を見て練習したことが、自分でマスクをすることにつながっていった。

(4) 環境構成の取組

①さっと手をきれいにすることができる環境づくり



写真7 ペーパータオルと消毒液を使う園児
 外から室内に入る時には、必ず石けんで手を洗い、消毒をするこ
 とにしている。ただ、手洗い場はどうしても密になりやすい。そこで、すぐに水気を切ってアルコール消毒できるように、ペーパータオルを使うことにした。半分に切ったペーパータオルを蓋の中央に穴を開けたプラスチックケースに入れ、ブックスタンドに固定して立たせて、次々にペーパータオルが取り出せるようにした。これによって、子ども達は外遊び後に、石けんで手を洗った後、簡単に手を拭くことができ、密にならず、さっさと消毒をして室内に入れるようになった。

②マスクとミニタオルを自分で管理する環境づくり



写真8 自分のマーク
 園でおやつや弁当を食べる時や園庭で遊ぶ時には、マスクを外す。また、室内においても何回も手洗い、うがいをするので、ハンカチとは別にミニタオルを使用している。そのマスクとミニタオルを保管するために万能スタンドを用意した。そこに、それぞれ子どもの名前とマーク、イラストを付けたので、子ども達は自分のマスクやミニタオルをいつも同じ場所に掛けてきちんと保管することができている。

③ いつもきれいな空気に保つ環境づくり

寒い日にも、暑い日にも換気は欠かせない。冬、「寒いから窓を開けないで。」と言う子ども達に「きれいな空気にしないとコロナになるから。」と言って換気をしていた。閉め切った部屋でコロナになり、命をなくした人もいることを伝えると子ども達は「分かったよ。きれいにしないとだめなんですよ。」と嫌そうに言いながらも、窓開けを手伝ってくれるようになった。



写真9 空気清浄機と
大型扇風機

空気清浄機と大型扇風機を導入してからは、更に換気が早くできるようになった。空気清浄機に赤いランプがともった時には、「空気が汚れてるから窓を開けよう。」と子ども達はきれいな空気にするために、進んで行動するようになっていった。

3 幼稚園評価の結果

保護者アンケートの「幼稚園は子どもに生き物を大切にす心や社会のルールを守る態度を育てようとしている」「子どもは幼稚園に行くのを楽しみにしている」「子どもは生き生きと活動している」の項目では、どれも100%、「当てはまる」と評価された。さらに、「外に行く時には、自分からマスクを付けるようになりました。」「ダンゴムシやカタツムリもつかまえて家で大事に飼っています。」という意見もいただいた。また、「家でも、家族が集まっていると『密です！密です！』と言ってくるんですよ。」と教えてくれる保護者もいた。

学校評議員会では、「新型コロナウイルス感染症対策は小さい子ほど大変だろうが、よくしている。先生方が疲れを出さないように元気でがんばってください。」「手伝いが必要なら、いつでも手伝います。」という言葉もいただいた。このように保護者も地域も幼稚園の取組を肯定的に評価してくださっている。

Ⅲ 研究の成果と課題

取組の有効性については、幼稚園や家庭での子ども達の発言や行動、幼稚園評価の結果で判断した。

○カイコやメダカは、今までも幼稚園で飼っており、生き物が好きな子どもが中心に世話をしていた。しかし、「自分たちがお父さんお母さんになる」というねらいのはっきりしたためあてを持たせたことで、全ての子どもがカイコやメダカの飼育に積極的に関わることができるようになった。子ども達は、自分の子どものように生き物の世話をすることで、命の大切さを実感していった。【焦点化】

○「密です！密です！」のように子どもが使った言葉の意味をみんなで共有することや保護者と情報を共有することで、どの子も命を守る行動をとることが

できた。また、家庭と幼稚園が同じ考えで取り組んだ時は、さらに効果的だと実感した。これからも子どもの様子を伝えたり、幼稚園の取組を伝えたりして保護者や地域とともに教育を行っていききたい。【共有化】

○電子紙芝居は、コロナに対する理解や自分の日頃の行動を見直すよいきっかけとなった。健康調べカードは、一目で子どもの体調を知ることができ、指導に役立てることができた。また、家庭での健康への意識を高める効果もあった。「バキューンの手」を見てまねることで、子ども達は、全員がマスクを付けることができるようになった。このように、視覚化の視点を取り入れた支援は命の大切さへの気付きや命を守る行動につながっていった。【視覚化】

○手作りペーパータオル入れ、アルコール消毒液、自分のマークやイラスト付きスタンド、空気清浄機や大型扇風機などの環境構成は、一人一人が自分の命を自分で守る行動につながっていった。幼児教育は環境からと言われる。今後も子ども達を取り巻く環境づくりに力を入れたい。【環境構成】

Ⅳ 終わりに

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた取組で、子ども達の姿が変わってきた。みんなで集まる時や室内に入ると、子ども達は自然と「マスクをしなきゃ。」と自分からマスクを取りに行くようになっていた。自ら、命を守る行動がとれるようになった子ども達が少しまぶしい。大変な時期ではあるが、これからも、命の大切さを実感し、その大切な命をしっかりと守ってほしいと願っている。

参考資料「コロナウイルスにまけないぞ」

きっずちゅーぶ（株） イースマイリー



主体的に学び 伝え高め合う子どもの育成

—子どもたちの思いや願いが実現していく授業づくり—

笠岡市立神内小学校 校長 三島博子

1 はじめに

神内小学校は、全校児童112名で、カブトガニ生息地として有名な笠岡湾干拓地の東端に位置する神島に立地している。カブトガニ博物館や神島霊場八十八カ所など、自然や歴史、文化資源が豊富である。また、神島天神祭や盆踊りなどの伝統行事も盛んで、子どもたちも積極的に参加している。

本校は、昨年度より『主体的に学び 伝え高め合う子どもの育成』というテーマで研究を進めてきた。豊かな地域資源を題材に、「こんなふるさとにしたい。」という強い思いや願いをもって主体的に課題に関わり、対話を通して思考を深め、課題解決を図る児童の育成に努めている。

2 主題設定の理由

科学技術が進歩し、社会構造の急速な変化が進み、これから先の時代の見通しが持ちにくくなっている。子どもたちがそのような状況の中を生き抜くためには、これまで以上に、自ら考え、判断し、行動していくことが必要になってくる。

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」により、子どもたちが様々な社会の変化に主体的に関わり、他者と協働して課題をよりよく解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現したり、情報を再構成したりして、新たな価値につなげていくことのできる資質・能力を育成することを求めている。

本校の児童は明るく活気があり、与えられた課題を解決していこうと一生懸命取り組むことができる。地域との関わりが深く、令和2年6月実施アンケートによると、ほとんどの児童が、自分の住んでいる地域のことが好きだと回答している。一方で、自分の思いや考えを友達に伝えることや、一つの意見や考えから広がりが持てず、自分たちの力で何かを新しく作り出そうとすることを苦手としている児童が多いことが分かった。

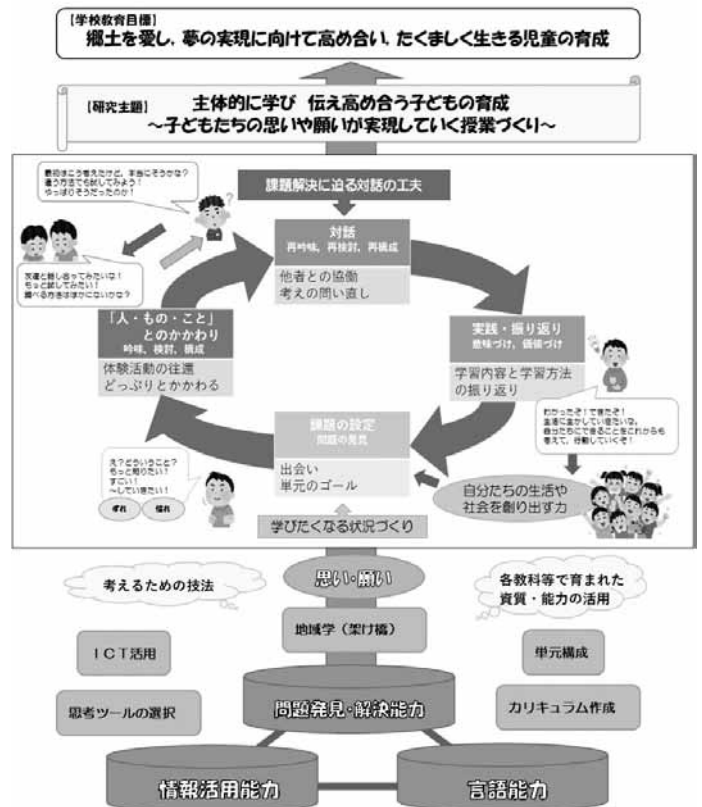
これらのことから、自分たちを取り巻く社会の中か

ら課題を見出し、その解決に向け、主体的に向き合っ
て関わり合い、自らの可能性を發揮し、多様な他者と
協働しながらよりよい社会の未来を切り開くことを目
指していくため、「主体的に学び、伝え高め合う子ど
もの育成」を研究の柱として位置付けた。

3 研究の仮説

子どもたちが学びたくなる状況を作り出すことで、
子ども自らが課題を見出し、自分の思いや願いの実現
に向けて、「人・もの・こと」と関わり合いながら粘
り強く探究し続けたことが、地域や社会のために生か
される単元構成、授業づくりを進めていけば、主体的
に学び、伝え高め合う子どもの育成へとつながる。

4 研究構想図



5 目指す子ども像

- 自分と身近な人々、社会、自然と関わりながら、自ら課題を見出し、実生活や実社会における課題を自分事として受け止め、様々な見方・考え方を働かせ、粘り強く探究し続ける子ども。
- 子どもたち同士の「対話」の中で、自ら課題を生み出したり、「人・もの・こと」と関わり合いながら吟味、検討、構成をしたりしていく子ども。
- 「人・もの・こと」へ働きかけながら、自分と友達の気付きや考え方を比べたり、関連付けたりしながら課題を解決し、思いや願いを実生活・実社会に生かしていこうとする子ども。

6 研究の概要

(1) 単元構成の見直し

主体的に伝え高め合うためには、子どもたち自らが思いや願いをもって、問い続けていくことが大切である。そのためには、自ら問いや疑問を見出し、課題を立て、見通しをもって、粘り強く取り組むこと、解決に向けて、意欲をもって自ら対象（人・もの・こと）に働きかけ、収集した情報を比較・分類・関係付けるなどの活動を発展的に繰り返し探究していくことが必要と考えた。

そこで、子どもたちが問いを見出しやすい題材を、身近で、自然や伝統や文化の教材が豊富な「地域」とし、生活科、総合的な学習の時間の単元構成を見直し、新たに単元計画を作成した。また、他教科の学習内容との関連を明確にして授業実践を行った。

学びのゴールについては、子どもたちの学習・探究プロセスを経て、学びが実生活・実社会につながることで、学びに向かう力が育まれると考えた。そこで、子どもたちの身近な実生活・実社会の中に、子どもたちの思いや願いがつながるよう、校内では、異学年児童や保護者に向けて発表、さらに地域に発信し、地域の方と一緒に活動していくことを設定した。

(2) 思考ツール・ICT機器の活用

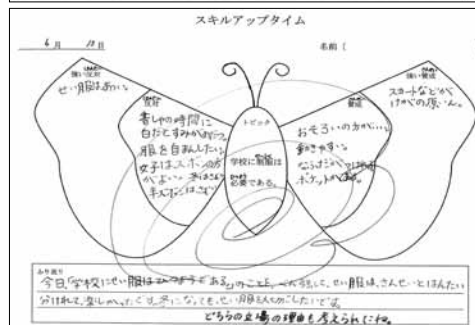
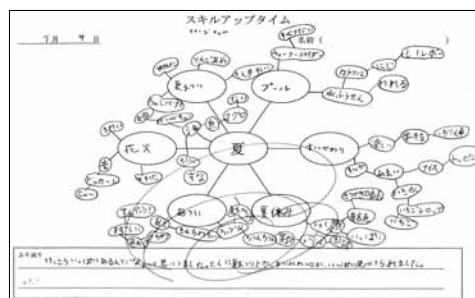
子どもたちが課題解決に向けて主体的に学び伝え合っていくために重要となるのが、子どもたち同士の「対話」である。そのためには、自分の考えをつくり出していくことが大切であると考えた。そこで、多様な情報を整理・分析したり、自分の考えをまとめ、構成したりすることなどを助けることができる「思考ツール」を活用することにした。対話を通して比較・

分類・関係付けを行い、「自分たちにできることをやってみよう！」「そのためにはどうしていったらいいのだろう？」と吟味・検討・構成したり、考えたことを問い直し、自分の考えを再吟味・再検討・再構成したりしながら、学びを深めていくことができると考えた。

また、課題解決に向けて多様な情報を収集したり、学びを交流して整理・分析をしたり発信したりするために、ICT機器の活用を積極的に行っていくことにした。

本校では、登校後、朝の学習の時間を設定し、曜日を決めて様々な学習に取り組んでいる。その2回を『スキルアップタイム』として、思考ツールとICT機器活用のための学習に取り組んだ。中学年の実践例として、「ウェビング」を用いて夏のイメージを広げる、「バタフライチャート」を用いて制服の賛否を考える、「くま手チャート」を用いて6月の様子を多面的に捉えるなどがある。問題を見出す力、必要な情報の整理・分析、さまざまな情報の比較・関連付けなど、自分の考えに見える化する活動を計画的に行ってきた。

「思考ツール」とICT機器の活用については、すべての教科や特別活動など、話し合い活動を行う場面で積極的に活用した。



スキルアップタイム

7 研究の実際

実践事例1 【第4学年 『共に生きるために！～やさしさあふれる住みやすい町を目指して～』】

第4学年は、地域の福祉を題材にして学習を行った。学校の近くの「重度障害支援センター」に声を掛けていただいたことをきっかけに、交流を行うことにした。まずは交流を行い、その体験から、どんな知識や技能を身に付けていったらよいか、どんな地域になってほしいか、自分たちには何ができるかを子どもたち自身が問い続けていく単元構成とした。

交流に先立ち、目標を設定した。コロナ禍のため、第1回の交流はリモートで自己紹介、宝（子どもたちが作ったプレゼント）探しを行い、心温まる交流ができた。

第1回の交流の反省を付箋に書き、「ピラミッドチャート」を用いて次の交流に向けての活動をグループで考えた。「相手のことをもっと知りたい」、「仲良くなりたい」という当初の目標に立ち返り、生活の様子や障害についてインタビューをし、一緒にできるゲームを考えた。交流の中で施設の方から車椅子の操作方法や介助方法を教えていただき、身に付けることができた。



リモート交流



グループ活動
(これからの活動について)

ここからの単元計画は次のとおりである。

学習活動	育成を目指す資質・能力
【体験活動】 ・課題解決に向けて取り組む。 (インタビュー・情報収集・交流活動など)  自分ができること	・課題の解決に向けて、自分たちにできる探究活動について考えている。(C 主体性) ・地域と自分との関わりが分かる。(A 知識の獲得)
【情報収集】 ・情報収集を繰り返し行い、環境の工夫や介助の工夫を探る。	・手段を選択し、適切に情報を収集する。(B 情報の収集)
【整理・分析】 ・交流を通して気付いたことや分かったことを整理する。	・課題を明らかにするために、事象を比較したり因果関係を推測したりして考える。(B 整理・分析) ・異なる意見や他者の考えを受け入れ、尊重する。(C 協働 他者理解) ・相手に応じて、わかりやすくまとめ、表現する (B まとめ・表現)
【まとめ・表現】 ・内容や目的に合った方法で表現する。 (プレゼンテーション、ポスター、HP 等)	・地域と自分の関わりが分かる。(A 知識の獲得)
	学習発表会 『やさしさあふれる住みやすい町』ってこんな町 ～神内をこんな町にしたい～
【振り返り】 ・やさしさあふれる住みやすい町にするためには、環境を整えるだけでなく、人と人とのつながりや支え合いが大切である。自分たちにできることをこれからも実践していきたい。	・学習の仕方を振り返る。(B 振り返り) ・情報収集に地域の活動に参画しようとする。(C 社会参画)
	A: 知識及び理解 B: 思考力、判断力、表現力等 C: 学びに向かう力、人間性等

『交流の後に、施設の方から、「学校の帰りに手を振ってください。」と言われたので、早速手を振ったら、手を振り返してくれてうれしかった。』という話を聞き、子どもたちが社会との架け橋になっていることを実感した。子どもたちは、地域が誰にとっても優しい社会になることを願い、行動することの大切さと素晴らしさを学ぶことができた。

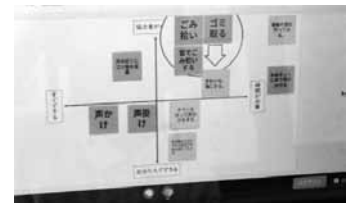
実践事例2 【5年生 環境保護隊！～カブトガニやアマモの命を未来へつなごう！】

5年生は、地域の自然や環境をテーマに学習を進めた。初めは、昔と今の干拓地を比較し、笠岡湾干拓地と私たちの暮らしがどう関わっているかを調べた。そして自分たちの地域には、豊かな自然や、農作物などの特産品があり、生活や観光と結びついていることを学んだ。



実地調査

さらに発見を求めて近くの海岸を歩いて実地調査を行ったところ、たくさんのごみや生き物を持ち帰ってきた。その調査結果をもとに、これからの活動について考えた。この話し合いは、「座標軸」を用いて、自分たちでできることと自分たち



グループ活動
(これからの活動について)

の力だけではできないこと、すぐできることと時間が必要なことの視点で考えた。Google WorkspaceのJamboardを用いて、自分の考えを出し合い、グループで話し合い、他のグループの考えを参考にしながらクラスで活動内容と方法を考えていった。

早速、1回目の清掃活動に行き、環境についてもっと詳しく知るために、次週にはカブトガニ博物館でカブトガニを観察し、館長さんから生態や環境との関係について話を聞いた。その中で、カブトガニやアマモが減少していることに関心をもった。

とてもすばらしいと思っていた笠岡湾干拓地ができてから、カブトガニもアマモも海の生き物たちも減ってきてしまったことを知り、子どもたちは、人々のく

らしと自然とが共存していくことはできないかと考え、自分たちに何ができるかを問い続け、アマモの保護活動につなげていった。ここからの単元計画は次のとおりである。

学習活動	育成を目指す資質・能力
【課題の設定】 ・人々のくらしと自然とが共存していくためにはどうしたらよいか調べたり話し合ったりする。 【情報の収集】 ・神島以外で環境保護を行っている地域があるか調べる。 ・アマモの環境に詳しい方をGTとして招く。 【体験活動】 ・アマモの保護活動に参加する。 【振り返り】 ・環境を守るために、いろいろな場所で保護活動が行われていたな。神島の海も守っていききたい！	・自分の関心から課題を設定し、解決方法を考える。(B 課題の設定) ・教師の支援を受けて、手段を選択し、適切に情報を収集する。(B 情報の収集) ・課題の解決に向けて、探究活動に取り組もうとしている。(C 主体性) ・地域と自分との関わりがわかる。(A 知識の獲得) ・積極的に地域の活動に参画しようとする。(C 社会参加) ・課題の解決に向けて、自分のできる探究活動について考えている。(C 主体性)
【情報の収集】 ◆クリーンキャンペーン ◆神島アビール隊 ◆チラシやポスター製作 ・それぞれの活動に必要な情報を収集する。 【整理・分析】 ・取り組む内容について意見交換をしたり、内容を整理したり、見直したりする。 【まとめ・表現】 ・これまで調べたことから、人と自然とが共存していく方法をまとめる。	・活動に応じて必要な情報を収集する。(B 情報の収集) ・自分のよさやできることに気付き、課題解決に向けて取り組む。(C 自己理解) ・異なる意見や他者の考えを受け入れ尊重する。(C 協働・他者理解) ・相手に応じて、分かりやすくまとめ、表現する。(B まとめ・表現)
【振り返り】 ・これからも自分たちができる取組を進んで行っていききたいな。	・積極的に地域の活動に参画しようとする。(C 社会参加)

自分たちできること…

学習発表会
ふるさとの自然を守るう
～カブトガニやアマモが生息する海～

発言!

(A: 知識及び理解 B: 思考力、判断力、表現力等 C: 学びに向かう力、人間性等)

学習発表会で他学年や保護者に伝えるだけでなく、地域の方と一緒にアマモを種から育て定植したり、保護活動に参加したりすることによって、ふるさとの自然を大切にしたいという気持ちを育成することができた。

8 研究の成果と課題

【成果】

単元構成を見直し、課題との出会いを工夫することで、子どもたちの中から問いが生まれるようになってきた。アンケート結果からも、「こんなことをしてみたい！」という思いが数多く芽生えるようになったと

アンケート項目	令和2年度		令和3年度
	7月	1月	7月
課題に対して、「なぜだろう」、「やってみたい」と思っており取り組む。	68%	76%	98%
自分の思いや考えを話すことができる	70%	80%	89%
今まで学習してきたことを手がかりに、自分の考えをつくっている	58%	82%	95%

(生活科・総合的な学習の時間 授業アンケートより)

また、課題を探究していく中で、「思考ツール」やICT機器を使いながら、自分の思いや考えを整理したり、まとめたりする力が高まった。グループで話し合うときにも活用することで、自分の考えを練り上げていこうとする姿が見られるようになった。

自分たちの思いや願いの実現に向けて、自分たちには何かを考え、計画・実践・振り返りを繰り返しながら、よりよいゴールを目指している姿が見られるようになった。「自分たちの思いや願いを現実させていく活動ができています」と回答した児童は全体の92%で、成果が得られたと考える。

「児童の意識の流れ」や「地域とのつながり」を大切に単元構成や、年間指導計画を検討していく中で、疑問や興味をもつ場面などを、子どもを主体として考えられるようになってきた。また、子どもが思いや願いをもって繰り返し活動できるよう、様々な学習・探究プロセスを考え、必要な情報を得られるように、常に地域に向けてアンテナを張るようになった。

【課題】

ICT機器や思考ツールなどを活用し、自分の思いや考えを整理したりまとめたりしながらグループで話し合うことができるようになってきたが、さらに学びを深めていくためには、どのように全体で交流すると有効であるか研究をしていく必要がある。

9 おわりに

昨年度から新型コロナウイルス感染症対策のため、子どもたちは例年通りの活動が思うようにできない日々が続いている。しかしながら、できないと諦めるのではなく、今できることを自分たちで考え、実践していこうとする子どもたちの姿が見られた。試行錯誤を繰り返しながら、自分の思いや願いを現実させようと取り組む子どもたちの姿は、まさにこれからの予測不能な社会の中で生き抜いていくために目指す姿であると感じた。よりよい未来を切り開いていくためには、自らが問い続け、人と協働して取り組み、行動に移していくことが重要であることを再確認した。

なお、本研究の生活科、総合的な学習の時間のそれぞれの学年の実践例、単元計画、年間指導計画との相関図については、本校のHPで紹介する。



1人1台端末を毎時間使う英語の授業実践と成果検証 —Google Workspaceで授業パッケージ化／手書きvsタイピング学習成果検証—

岡山県立津山中学校 指導教諭 井尾佳弘

1 研究目的

1人1台端末として生徒全員分のクロームブックが配備され、その効果的な活用が求められている。本研究では、端末のイベント的な使い方ではなく、日々の授業で「文房具のように」使える活用方法の開発を目指す。また、その活用方法が英語力の向上にもつながることを検証する。

2 研究の経緯

研究の前段階として、令和2年度の3学期にGoogle Workspaceの様々な機能を授業で活用した。この試行錯誤の中で、授業で日常的に活用するのには不向きな機能がわかってきた。例えば、Google Slidesで共有スライドの自分のページに調べたことをまとめてプレゼンテーションを行う活動などは時間を要し、年に何回かのイベント的な授業での使用に向いている。

この過程を経て、日々の授業に使える機能と、これまでの課題を解決できる機能として、次の研究仮説に挙げる3つに絞り、これらについて令和3年度1学期の授業で実践し、成果検証を行った。

3 研究仮説

- 1) Google Spreadsheet上で単語集の学習と小テストを行えば、効率的に語彙と例文の習得が進み、手書きの場合と同等以上の成果が得られる。
- 2) Google Spreadsheet上で授業の目標として示した項目の創作英作文を行えば、共有機能によって動機付け・理解が進んで定着につながる。
- 3) スピーキングテストをクロームブックで録音してGoogle Classroomの課題として提出すれば、テストと採点の効率が上がり、パフォーマンステスト実施の頻度が上がる。その結果、生徒の英語4技能のレベルアップにつながる。

4 研究方法（授業実践）

【授業実践の内容】

上記3の1)～3)の授業実践の内容は次のとおり。

- 1) Google Spreadsheet上で単語集の学習と小テストを行う

⇒if関数を用いた自動採点（資料1）により、採点や紙の配付回収が不要になる。1回あたりに解く問題数が、紙のテストでは9問で行っていたものが、タイピングでは同じ時間で18問に倍増している（制限時間内の平均完了数は約14問）。また、タイピング練習にもなるため動機付けに有効である。音声リンクも利用できるので、トレーニングの際には音声を聞いて打ち込むよう指導している。

資料1 Spreadsheetを用いた小テスト

スレ	目録	意味	「ここに入力」	OK判定
1	1	去年は東京へ行きましたか？	Did he go to Tokyo last year?	○
4	1	ここに座ってください。	Come here, please.	○
5	1	彼は速いのが速い（速訳：彼は速い速者だ）。	He is a fast runner.	○

- 2) Google Spreadsheet上で授業の目標として示した項目の創作英作文を共有し、即時フィードバックする
⇒「授業シェアノート」（資料2）と名付けたSpreadsheet上に、授業の目標として「現在完了で経験を語る文を作ろう」などのようなGoal Questionを示しておき、授業のまとめで創作英作文を入力して共有する。友達が一齐に入力する英文を参考にすることができ、また、互いの作品を読み味わうことができる。作成途中の英文をスクリーン上で教師が実況解説し、楽しくフィードバックを行うこともできる。

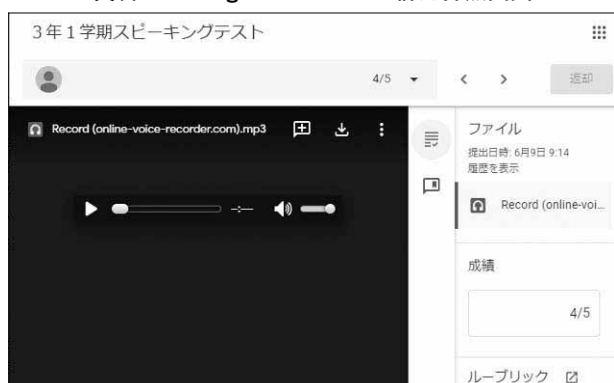
資料2 Spreadsheet上での英作文共有

	a	b	c
1	Unit 4-1 Goal Question		
2	GQ: ○○は△△しなければならぬ、という文を書いてください。	GQ: ◆◆は◇◇しなくてよい、という文を書いてください。	VQ: You (d)(h)(t)(e)
38	I have to see the Milky Way.	The rain doesn't have to rain.	
46	You have to clean your room.	You don't have to stay here.	
41	They have to answer my questions.	You don't have to have dinner.	
42	You have to listen to music.	You don't have to eat udon.	You don't have to say you

- 3) スピーキングテストをクロームブックで効率的に実施する

⇒全員同時にクロームブックで録音し、Google Classroomの課題として提出する。採点と成績返却(資料3)についても、クロームブック上で生徒の音声聞き、提示しておいたループリックに基づいて点数を入力して、返却ボタンを押せば完了する。これにより、1クラス1時間以上を要していたテストが最短5分程度で終わる。採点と成績返却も時間短縮が可能で、ある音読テストでは80人分の採点が約30分で完了した。

資料3 Google Classroomの課題採点画面



【授業実践上の留意点】

クロームブックの使用に慣れてくると、今度はそのよりよい活用が課題となる。

クロームブックを授業で使うことについて、生徒からは肯定的な反応が多くある(資料4)一方、デメリット(資料5)もある。

資料4 クロームブック使用のメリット

英語の授業で毎時間クロームブックを活用することで、どのようなメリットがあると感じますか。当てはまるものすべてを選んでください。	% 複数回答可 (130人中)
刺激があり、英語学習のやる気につながる	42.9
英語力の向上に役立つと感じる	50.0
コンピュータを扱うスキルが向上すると感じる	81.7
メリットは何も感じない	3.2

資料5 クロームブック使用のデメリット

クロームブックを使った学習のデメリットとして、当てはまると思うものすべてを選択してください。	% 複数回答可 (130人中)
<u>机の上が整理できない</u>	<u>53.3</u>
<u>紙教材とクロームブックを行き来するのが大変</u>	<u>63.3</u>
目が疲れる	43.3
タイピングが遅く、入力に苦勞する	38.3
音声CDの配布がなくなった	11.7

資料5のデメリット(上2つの下線部分)からもわかるとおり、生徒の机上のスペースは限られており、クロームブックを常に広げたままにはできない。また、

紙の教材とクロームブックを行き来するには時間がかかるため、その回数をできるだけ少なくしたい。さらに、授業で使う機能が定まっていないと、説明や取りかかりに時間がかかる。これらのことから、次の2点に留意して授業を構成した。

1) 授業で使う教材群を「授業セット」として Classroom上にパッケージ化して置く

⇒頻繁に使う「オンライン辞書」「授業シェアノート」「ペアQ&Aシート」「授業プリント」「授業動画」とともに、必要に応じて使う「教科書pdf」「リスニングスクリプト」「教科書音声」を「授業セット」のトピック(資料6)にまとめて置き、それらを開くことをルーチン化することで取りかかりまでの時間短縮につなげた。

資料6 授業セットの中身

R3_3年 英語 (5期生)		ストリーム	検索	メンバー	採点
3年 授業セット					
アンケート	ベアQ&Aシート				投稿日: 6月22日
【簡単】タイピング	授業シェアノート				投稿日: 4月11日
スピーキングテスト	授業プリント				最終編集: 5月20日
【中級】タイピング	教科書音声データ				最終編集: 4月11日
	リスニングスクリプト				最終編集: 5月1日
	オンライン辞書				投稿日: 4月11日
	教科書範囲PDFデータ				投稿日: 4月11日

2) クロームブックを開く時間帯を授業の冒頭5分と終盤5分に集中させる

⇒単語集の学習を毎回行い、表現活動を多く盛り込んだ45分授業にクロームブックの使用を組み込むのは、時間的に困難である。そこで、授業冒頭5分の単語集学習(授業実践1)と、授業終盤5分の英作文共有(授業実践2)に絞ることで、クロームブックと紙教材の行き来による時間のロスを減らし、授業の最大効率化を目指した。

5 研究結果 (検証実験・調査とその結果)

クロームブックを活用したことで英語力がどのように伸びたかを検証することは、短期間の実践では難しい面もある。また、紙ベース・ベアワークの活動も重視しており、家庭学習では主に紙の教材を使用している。

そこで、仮説の検証のために、ある一部の英語学習に限定して、紙(=手書き)とクロームブック(=タイピング)を交互に用いて成果の比較検証を行った。また、仮説の検証を補うため、クロームブックを使用した英語学習の手応えをアンケート調査し、分析した。

1) 効率的な英語学習という視点から、タイピングによる学習と手書きによる学習を比較検証する
 ⇒タイピングと手書きを比較した先行研究を見ると、タイピングよりもフリーハンドで文字を写した子どもの脳の方が活性化していたり (Karin James 2012)、タイピングよりも手書きの方が作文の着想が豊かであったり (Virginia Berninger 2006)、タイピングよりも手書きでノートを取る方が理解が深まり、記憶が強くなる (Daniel Oppenheimer 2014) など、手書きの方が優れているとするものが一般的である。

しかしこれらは、すでに文字を習得した中学生が英単語や表現をどんどん身に付けていくという本校生徒の学習の状況には当てはまらな思考え、次のような実験を行った。

【実験方法】

- ・ 考査範囲の単語と表現の学習を、タイピングと手書きで行った。1学期中間考査前と1学期末考査前の2回実施した。考査対策のため、集中力は全員高かった。
- ・ 生徒を2グループ (25人×2=50人) に分け、タイピング (資料7) と手書きの学習を交互に行った。
- ・ 単語学習の後に単語テスト、表現学習の後に表現テストを行った。
- ・ テストは学習の事前と事後に行い、正答率の上昇幅を調べ、タイピング学習後と手書き学習後で比較した。
- ・ テストは質をそろえたAとBの2種類をGoogle Forms (資料8) で行い、2種類にすることで、2グループともタイピングと手書きの両方の学習をした。

【実験結果 (資料9)】

- ・ 単語テストは手書きの方が伸び率が0.3 (= 3%) 高かったが、大きな差はない。単語のスペリング学習は手書きがやや優位と考えられる。
- ・ 表現テストはタイピングの方が伸び率が0.6 (= 6%) 高かった。表現はそ中で使われる単語が比較的易しいものなのでタイピングでも身に付きやすいようだ。
- ・ 実験後のアンケート調査 (資料10) では、単語を覚えやすいのは手書き、表現を覚えやすいのはほぼどちらも同じという結果となり、全体では大きな差は見られなかった。

資料7 学習用Spreadsheetの画面



資料8 「表現」テストのForms画面



資料9 実験結果

数値は事後テストー事前テストの10点満点換算のスコア平均

テストの種類 (50人の平均値)	単語テスト				表現テスト			
	中間考査前		期末考査前		中間考査前		期末考査前	
	テストA	テストB	テストA	テストB	テストA	テストB	テストA	テストB
(a)手書き学習後の得点率の伸び	5.6	5.1	5.4	4.2	5.2	4.5	5.5	5.5
(b)タイピング学習後の得点率の伸び	5.5	4.8	4.9	4.0	5.8	5.5	5.7	6.0
(a)-(b)	0.1	0.3	0.5	0.2	▲0.6	▲1.0	▲0.2	▲0.5
平均 (▲はマイナス)	0.3				▲0.6			

資料10 アンケート：覚えやすいのはタイピングか手書きか

(人/50人中)	単語を覚えるのに適しているのは	表現を覚えるのに適しているのは
手書き	<u>21</u>	19
タイピング	16	<u>20</u>
同じくらい	13	11

2) クロームブックを使用した英語学習の手応えをアンケート調査 (資料11, 12, 13) し、分析する

資料11 役に立つと思うクロームブック学習

クロームブックを使った英語学習の方法で、役に立つと思うものをすべて選択してください。	% 複数回答可 (130人中)
1) 単語集のタイピングトレーニング	75.4
2) 単語集のタイピングテスト	69.2
3) 教科書紙面がPDFで見られること	40.8
4) 教科書音声 Google Workspace 上で聞けること	56.9
5) 授業プリント (解説や解答例書き込み済み) が画面上で見られること	67.7
6) スプレッドシートで友達と英作文を共有できること (授業シェアノートなど)	52.3

7) スプレッドシートでその日の授業で習う英文法を使った英文を作ること (授業シェアノート)	43.8
8) YouTube を使って英語学習ができること (授業シェアノートの Video Question)	30.8
9) 表現活動で友達に画面上でスライドや写真を見せられること	37.7
10) オンライン辞書がいつでも使えること	76.9
11) 自分の音読を録音して聞くこと	27.7
12) スピーキングテストをクロームブックで受けること	40.8
13) スライドを使って英語のプレゼンテーションを作成・発表すること	25.4

・単語集のタイピング学習が役に立つと考えている生徒は70%前後。Spreadsheetで英作文を共有することは50%前後、クロームブックによるスピーキングテストは約40%の生徒が役立つと感じている。

資料12 単語集のタイピング学習の効果

単語集のタイピングトレーニングやテストをクロームブックで行うことについて、紙の小テストで学習することと比べて、英語力の向上にどれくらい効果があると感じますか。	% (130人中)
4 紙と比べて、効果が高いと感じる	12.7
3 紙と比べて、効果がやや高いと感じる	34.9
2 紙と比べて、効果がやや劣ると感じる	46.8
1 紙と比べて、効果が劣ると感じる	5.6

・単語集の学習はタイピングで行う方が効果があると感じる生徒（4と3）は約50%。

資料13 Spreadsheetで英作文を共有することの効果

「授業シェアノート」で、その日の授業で習った文法を使った英文を書いて共有することは、英文法の習得や英作文能力の向上に役立つと思いますか。 (紙のノートに書いたり、口頭や板書で発表することと比べてください)	% (130人中)
4 役立つと思う	48.5
3 少しは役立つと思う	44.6
2 どちらかといえば役立つと思う	6.9
1 役立つと思う	0.0

・Spreadsheetで英作文を共有することの効果을認める生徒（4と3）は90%を超えている。

6 結論

1) Google Spreadsheet上での単語集の学習と小テストは、①7割の生徒が役立つと感じていること、②紙のテストより多く問題をこなせること、③手書きに劣らない成果が検証できたことから、十分効果があると考えられる。

2) Google Spreadsheet上で授業の目標として示した項目の創作英作文を共有して行うことについては、アンケート結果から約90%の生徒が肯定的に受け止めており、動機付けや定着につながると期待できる。
3) クロームブックによるスピーキングテストの成果については、生徒側の肯定的な受け止めは約40%だったが、教員側には効率化によるテスト回数増加という明らかなメリットがある。昨年は1回のテストしか実施できなかったが、今年は1学期の間に4回実施することができた。スピーキングテストの頻度が増すことで、生徒の英語4技能習得への動機付けになると思われる。

7 最後に

1人1台端末の導入は、英語科教員にとって大きなチャンスである。コミュニケーションの方法を広げ、本物の情報に触れさせるためのツールを得た。学習の個別最適化も容易になり、主体的、協働的で深い学びと4技能の統合が同時に実現可能になった。この大きな可能性を、生徒の英語力向上に役立てるべく、実践を積み重ねていきたい。

8 備考

【資料の調査対象について】

- ・50人を対象とした実験・アンケートの結果分析には、津山中学校3年生のデータを用いている。
- ・130人を対象としたアンケートは、津山中学校2・3年生を対象に行った。

【参考ウェブサイト】

- ・Karin James 2012
<https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S2211949312000038>
- ・Virginia Berninger 2006
<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/16390289/>
- ・Daniel Oppenheimer 2014
<https://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1177/0956797614524581>
- ・New York Times June 2, 2014 (上記論文の紹介記事)
<https://www.nytimes.com/2014/06/03/science/whats-lost-as-handwriting-fades.html>



漢字指導における合理的配慮

—インクルーシブ教育の観点から「書く・読む・使う」の力を伸ばす—

総社市立総社中央小学校 教諭 矢吹 由子

0. はじめに

漢字を覚えるには反復練習が必要だと信じられている。そのため教師はできるだけ多く書くように促す。しかし、中にはどんなに努力しても漢字を覚えられない児童がいる。そういう児童に対し、教師は更に書く機会を増やすよう働きかける。

インクルーシブ教育の観点に立つと、こうした闇雲な反復練習は、児童の実態を把握せず、誰にも一律に同じ学習方法を強要している点に問題がある。本来は漢字指導にも合理的配慮を取り入れるべきである。

では、漢字指導のどこに合理的配慮を取り入れればよいのか。明らかにするには、個々の特性とそれによって生じる児童の“困り感”を特定する必要がある。

漢字学習の際、なぜ児童はつまずくのか。論者は児童の観察から3つの仮説を立てた。

1. 漢字を書く経験の不足
2. 漢字を読む経験の不足
3. 漢字を日常的に使うという経験の不足

以上から、漢字を習得できない原因は経験不足であり、やはり反復練習は必要だと推察される。そこで「書く・読む・使う」の3観点それぞれにおいて、合理的配慮を取り入れた反復練習の手立てを考え、実践した。

実践に際しては主に宿題を利用した。その理由は、特別な時間を設ける必要がない、個に応じた支援を行いやすい、毎日継続して取り組める等である。使用した教材は、市販の漢字ドリルと一般的な漢字ノート(80～90字程度)である。

対象児は3名で、A児、B児、C児とする。各児は異学年であり、特別支援学級に在籍している児童も含まれている。どの児童も既習漢字の習得が不十分で、反復練習への忌避感情が顕著であった。

実践の結果、どの児童も漢字学習に意欲的に取り組み始め、漢字の習得数が増えた。また、自分に合った学習方法を提案してくるようになった。日常生活の中でも漢字を自然に使うようになる等の成果が得られた。

本論では、実践の方法とその効果を報告する。

1. 書く(視写)

漢字を書いた経験がなぜ少ないのか。書かないからだ。ではなぜ書かないのか。書けないからだ。

こうした児童はワーキングメモリーに困難がある場合が多い。短期に記憶する力が弱いため、字形をとらえて脳内に保持することが難しい。ドリルを見てノートに漢字を書けと言われても、視線を移す間に字形があやふやになり、正確に再現できなくなるのである。

ワーキングメモリーを強化するには、記憶を保持できる時間を延ばす訓練が必要となる。漢字学習の場合に当てはめれば、視線の移動距離を徐々に伸ばすことがそれに当たる。漢字を書く時、まずは視線を動かさなくてもよい距離から始め、教科書をノートに視写し、板書を写せるようにし、最終的には手本のない状態で思い出して書けるようにする。ここまでできれば漢字を習得したと言える。

この訓練を行うための手立てとして、漢字ノートに設けられている読み仮名のための細かい欄(以下読み欄)を利用する方法を考え、以下の3ステップで進めた。

1-① 漢字交じりの例文を写す

教師はドリルの例文を漢字交じりで読み欄に書く。児童はそれを隣のマスに写す【写真1】。同じ例文を使い、これを数日繰り返す。

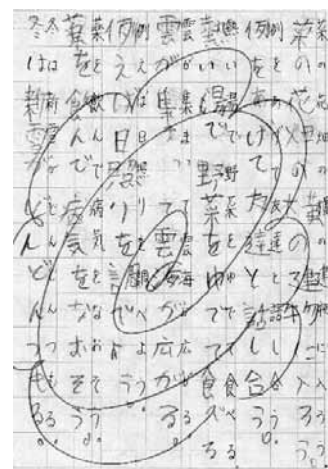


写真1 ノート例

この時、児童の視線は読み欄から隣のマスまで移動する。字形の記憶保持が難しい児童にとっては、すぐ

隣の文字を書き写す作業でも十分学習効果がある。マス内に書いた手本をなぞらせるという方法も考えたが、これだと児童は何も考えずに線をなぞってしまう。字形を脳内に保持する時間をゼロにしないために、隣の文字を横に写す活動を採用した。

読み欄に書かれた手本を写すことに抵抗感が無くなったら、次のステップに移る。

1-② 平仮名の例文を漢字に直す

このステップでは見開きの左側ページを利用する。右側ページには昨日の宿題が書かれている必要がある。

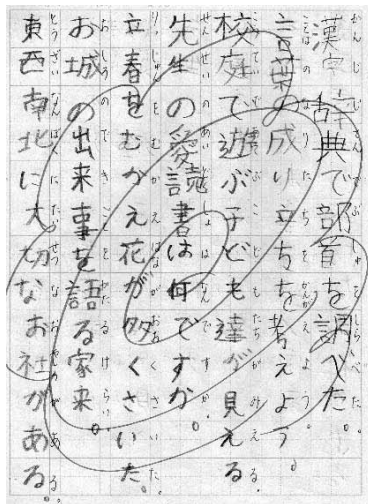


写真2 ノート例

教師は読み欄に例文を平仮名で提示する【写真2】。児童は昨日までと同じ文を書くのだが、今度は読み欄に平仮名しか書かれていない。そこで、右側ページの昨日書いた宿題を参考にして書くことになる。

この時、児童の視線はノートの右ページから左ページまで移動する。児童にとって1-①よりも難易度が上がるが、書いた経験のある文なので抵抗感は少ない。

1-③ ヒント無しで書く

このステップでは見開きの右側ページを利用する。教師は【写真2】と同様に例文を平仮名で提示する。児童が参考にできる手本は裏側のページにある。

この時、ノートをめくる手間が掛かるため、児童はなるべく漢字を思い出して書こうとする。思い出せない時にはノートをめくってヒントを見ることができるが、児童の視線はノートの裏から表まで移動する上に、書く時には目の前に手本が無い。何度も思い出そうとする経験とノートをめくる時間がワーキングメモリーの強化につながるのである。こうして鍛えていけば、最終的には手本無しで漢字を書けるようになる。

この手立ては日々の積み重ねが重要である。しかし、

毎日手本を書いてやるのは時間の確保が難しい。教師側の負担を軽減するための工夫として、ノートを2冊用意して交互に使用した。また、時間のない日には「昨日と同じ」と指示することで、児童自ら読み欄に平仮名を書いて漢字を書いてくるようにさせた。

この方法を取り入れた結果、A児は漢字学習に積極的に取り組むようになった。書く回数が増えたと字形が少しずつ整い始めたほか、新出漢字を既習漢字の字形と関連づけて覚えられるようになった。B児はドリルの例文を参考に自分で短文を作って練習してくるようになり、漢字テストの得点に顕著な向上が見られた。

一つの漢字を数多く書くことだけが反復練習ではない。単純作業になれば飽きやすく、忌避感情が生じる。短文を書く活動にすれば児童の負担感は軽減され、文意を考えながら書くという経験にもなる。

ただし、同じ例文を繰り返し書かせているとやはり児童が飽きてくる。飽きさせない工夫として、他教科の学習内容や児童が興味を持っている事柄を例文に取り入れる方法を取り入れた【写真3】。例えば、社会科で扱った県名や理科で扱った用語等である。

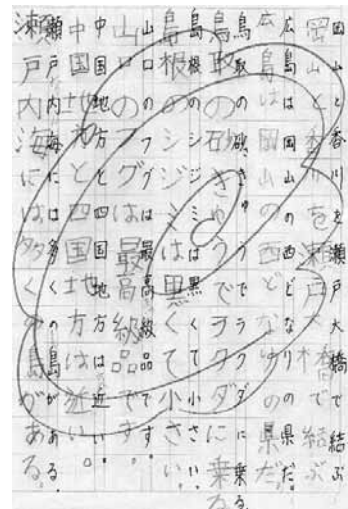


写真3 ノート例

県名を学習する時期に各県の特徴に触れた例文を書かせた結果、C児は県の名産品や観光名所に興味を持つようになり、例文の内容を提案し始めた。歴史上の人物名や出来事も取り入れたところ、同様の効果を得た。他教科の学習内容を取り入れ、漢字の宿題という形で復習させたことが、延いては既習事項の定着にもつながった。

2. 読む（音読）

漢字を書けるのに読めない児童がいる。ある程度字

形を正しくとらえて書くことができるし、思い出すこともできる。しかし、テスト等では正答を書くことができない。まるっきり違う字を書いていることさえある。なぜこのようなことが起きるのだろうか。

原因の一つとして、彼らが視覚優位だということが考えられる。漢字は図形としてとらえることができるが、発音は音声であるため目で見ることができない。よって読みだけが分からなくなる。一つの漢字に対して複数の読みが出てくる3年生以上になると、読めない字が急速に増える。当然教科書の文章を読むことも難しくなる。「家来」を「いえき」と読んでいたら、あらすじを理解することもできないだろう。

そこで、視覚優位の特性を生かして、漢字と読みを同時に視野に入れ、セットで覚えさせる方法を考えた。具体的には、1-②・③で書かせた宿題を利用しつつ、以下の3つのステップで進めた。なお、読みに困難のない児童に関してはこの章で述べる指導は省いた。

2-① 漢字交じり文を音読する

隣に書かれた平仮名を参考に、自分が書いてきた文を声に出して読ませる。平仮名だけを読む逐次読みに陥るときには、教師が読んで復唱させることで単語の区切れを意識させる。読み仮名付きの音読は、視覚と聴覚から発音を習得できる効果的な方法なのである。

2-② 漢字のみを音読する

漢字交じり文が読めるようになったら、主要な漢字のみを順不同で選んで読ませる。文脈があれば読めても、熟語だけ示されると読めないことが多い。難しければ文全体を読ませて、読みを確認させる。

2-③ ヒント無しで漢字を音読する

ある程度読めるようになったら、平仮名の添えられていない漢字のみを読ませる。教科書から漢字を選んだり、読みの難しい漢字をフラッシュカードにして読ませたりするのが効果的であった。

読み仮名を添えるとそれに頼るせいで漢字を読む力が伸びないと考えられがちである。しかし、漢字と発音を同時に示した結果、どの児童の実践でも明らかな読み間違いが減った。同時に、滑らかに音読できるようになってきた。また、派生効果として、テストの問題文の意味をつかめる、国語の教材文の読解ができる等の成果が現れた。

3. 使う（日記）

1. 書く、2. 読むはできるのに、生活の中で漢字

を使えない児童は多い。漢字は覚えているが、文字を書く場面で平仮名ばかり用いてしまう。

彼らは、思考を言語化して文章に落とし込むことが苦手である。文を作るだけで手一杯になってしまう彼らにとって、作文しながら瞬時に適切な漢字を思い出して書くという作業はひどく困難なのである。

そこで、文を作る段階を無くし、漢字を使う経験だけを積ませる手立てを考えた。用意したのは、前述のものと同様の漢字ノート（80～90字程度）である。

児童はノートに毎日日記を書く。ただし、児童が作文するのではない。その日児童が体験したことを、できるだけ漢字を多く使用した文を作って教師が読み欄に書くのである。【写真1】と方法は同じである。児童はそれを隣のマスに写す。日々出来事が違うので、毎日違う文を書くことになる。分量は児童の負担を考えて1日1ページとした。

実際には以下のような文を使用した。

【文例1】

火曜日の三時間目、図工の時間に色画用紙を切って箱を作りました。友達は黄色と緑色の紙を使いました。ぼくは赤色と茶色の紙を使いました。直線を引いて切るのがむずかしかったです。先生が「細かい所をていねいに切ったね。」と言ってくれたのでうれしいと思いました。次の時間は絵をかくので何の絵にしようか考えています。来週が楽しみです。

【文例2】

木曜日の五時間目の体育の時間にリレーの練習をしました。バトンを右手から左手に持ちかえて前の友達に「はいっ。」と言って渡しました。何度も練習したら上手になりました。赤組が一人多かったので白組で二回走る人を決めました。本番は力いっぱい走りました。友達を大声で応援しました。少しの差で負けたのが残念だったけれど楽しかったです。次は勝ちたいです。

この宿題を通して、児童は漢字を使って自分の体験を書くという作業を繰り返す。漢字を使いながら思考を言語化することに慣れていく。教師が作文するので、児童は漢字を使うことに集中できるのである。

ここで重要なのは、書く内容が児童自身の体験だと

いう点である。教科書や名文と呼ばれる文章を視写する方が優れた文章表現を覚えられるという考え方もあるだろう。しかし、児童の生活においてより高い頻度で求められるのは、自分の経験や考えを書くことである。生活に根ざした文例を使い、その中で自然に漢字を使用する経験を積む方が合理的である。

更に、日記なら自分の体験なので内容をイメージしやすい。その時の状況や気持ちを思い出しつつ書くこともできる。教師が作った文を写しながら、自分が作文しているような臨場感が味わえる。自力で作文をするという疑似体験ができるのである。

つまり、この活動には作文指導としての機能もあるのである。そこで、作文指導としても効果的な学習になるように、以下の点に配慮した。

- ・ 5W1Hを明確にするために、冒頭部分に「曜日・時間・教科名」を入れた。
- ・ 話し言葉を入れ、「」を使用する場を設けた。
- ・ 片仮名や助詞の用法も練習できるような構成にした。
- ・ 視覚や聴覚を用いて観察した内容（黄色と緑色の紙、大声で応えんしました等）を入れた。
- ・ 気持ちを表す文（来週が楽しみです、残念だったけれど楽しかったです等）を入れた。

この方法を続けた結果、C児は「今日は〇〇の話」と自分から内容を指定してくるようになった。やがて、冒頭の二文ほどを書いておけば、続きを自力で書いてくるようになり、作文力の向上も認められた。これは、適切な文章構成や修飾語等の使い方、感情表現の方法を手本から覚えたことが影響していると思われる。また、ノートに文字を書く場面で、日記で使用した漢字を自然に使う姿も見られるようになった。

派生的効果として、体験したことやそのときの心情を詳しく説明させたことが言葉で伝える練習になり、説明能力の伸びも見られた。教師側にも、児童との会話が増え、児童理解が深まるという利点があった。

加えて、この方法は理科の観察記録にも応用できた。教師が聞き取って作文するという手順を踏んだところ、最終的には自力で適切な記録が書けるようになった。

3. 日記は、1. 視写、2. 音読と並行して行った。視写と音読では漢字を覚える経験を重ねさせ、日記では漢字を使って作文するという経験を積ませた。両者が相互に作用した結果、漢字を「書く・読む・使う」力が総合的に伸びたのだと考えられる。

4. おわりに

以上のように、「書く・読む・使う」の3観点から漢字指導における合理的配慮を考察し実践した。「書く」では特性上の弱点を克服する手立てを、「読む」では特性を生かす手立てを、「使う」では特性上の困難を踏まえた上で効率よく経験を積ませる手立てを考案した。

今回実践した3つの手立ては、他教科の学習にも幅広く応用できるものとなった。1, 2は社会科・理科・外国語等の用語を記憶する学習に、3は作文や観察記録等を書く学習に生きた。どれも経験の蓄積によって知識や技能が定着する学習である。漢字指導における合理的配慮を探ろうと始めた実践だったが、今後は様々な反復練習への展開が望めそうである。

従来、反復練習は単純作業の押しつけになっていた。反復練習では取り組んだ量が数字となって現れるため、数字がそのまま定着の度合いだと錯覚されてしまう。「多いほど良い」という発想は「少ないと駄目だ」に代わり、「支援したら練習にならない」という結論にたどり着く。なぜなら、支援すれば取り組む量が減ってしまう、ヒントを与えたら成長できないと勘違いされるからである。

しかし、支援は甘やかしてではない。甘やかしとは、児童の代わりに書いてやったり「書かなくてもいいよ」と声掛けをしたりして、学習する機会を奪うことである。逆に適切な支援とは、児童自らが学習に取り組める環境を整えることである。「必ず3ページ書きなさい」「分からなくても答えを見てはいけません」等という不要な条件や負荷を排除し、ノイズを取り去って学習する機会を守ること。これこそが教育に求められている合理的配慮なのである。

合理的配慮を行うには、学習の本質を見極め、学びのためには何が必要で何が不要かを精査することが重要となる。同時に、個々の児童の現状を把握し、ニーズを明らかにする必要がある。学習を阻害しているものは何か、児童は何につまずき何を求めているかが分かって初めて必要な支援を考えることができるのである。そして、これを成せるのは教師しかない。

児童ができないと嘆く前に、教師として何ができるのか、自分の手立てに間違いはないかを振り返ろう。子どもは必ず伸びる。インクルーシブ教育はそう信じるところから始まる。

“漢字を覚えられない子”とは、漢字の覚え方をまだ教えてもらっていない子なのである。



当事者意識を育む対話型授業の場のマネジメント

— 「何ができるようになるか」のために「どのように学ぶか」 —

岡山県立瀬戸南高等学校 指導教諭 佐々木 正 剛

1. はじめに

平成28年12月の中央教育審議会答申において、加速度的に変化し複雑で将来を予測することが困難となることが予想されるこれからの社会を生きるために必要な力として、「生きる力」を捉え直すことが必要であると指摘された。そして、新学習指導要領では「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱に整理し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を進めることが示された。本県では、授業で身につけた力を確かなものにするために、学習指導のポイントをまとめた「岡山型学習指導スタンダード」が示され、主体的・対話的で深い学びの3つの視点を重ね合わせた授業改善を進めている状況にある。

2. 主題設定の理由と研究の仮説

コロナ禍の臨時休校中において、本校では動画や課題の配信を中心とした一方向型のオンライン授業を行った。その結果、アクティブ・ラーニングの名のもとに生徒の主体的な学びを期待して、基本となる知識を教えずに「考えさせるだけ」、従来から指摘されている教師が一方向的に知識を教える「教えるだけ」の授業スタイルの問題について、改めて考えさせられる契機となった。また、本校には勉強が得意でない生徒が少なからず存在し、登校日の調査では「個」で学習を進めることが困難な場面が多く、学校という場で「協働」で学習することの重要性が明らかとなった。加えて、本校では“自律”した生徒を育てることを学校教育目標としており、換言するならば「当事者意識を高めて様々な事象を他人事ではなく自分事として捉えさせることを意識した教育活動」を進めていかなければならない状況にある。

本研究では、「何ができるようになるか」のために「どのように学ぶか」といった視点で授業改善を試みることに出発点を置く。そこで、これらを解決する一つの

方法として、市川¹⁾の認知心理学の理論を背景を持った授業設計論「教えて考えさせる授業」をベースとして、それに対話型授業を組み込むことにより学習内容の理解を深め、当事者意識が高揚するものと考えた。さらに、教師は授業という場のプロセスをマネジメントすることによって、深い学びを補完できるという仮説を立てた(図1)。そして、「当事者意識を育む問い」について対話を通して課題解決を図る活動を中心的な活動に位置づけた。

3. 研究の視点

(1) 教えて考えさせる授業

「教えて考えさせる授業」とは、外からの情報を理解して取り組むという「受容学習」をした後、その知識を生かして「問題解決学習」に取り組む授業設計論であり、次の4つの段階からなる²⁾。まず、教師が意味理解を重視し、その授業で習得が目指される基本的な内容を教材や教具を工夫しながら教師が分かりやすく説明する(教師からの説明)。次に、生徒が本当に教師の説明内容を理解したかを確かめるため、学んだことを生徒自身が説明し合うなどの活動を行う(理解確認)。そして、生徒が誤解しそうな課題や知識の活用を求める課題に対して協働で解決する(理解深化)。最後に、授業で学んだことを振り返る(自己評価)。

(2) 対話型授業

対話をはじめとする、いわゆる言語活動がすべての授業科目で重視されている中、様々な価値観や考え方をぶつけ合うことは、深い思考を生起させる。対話型授業とは、異なる多様な他者との対話や自己内対話

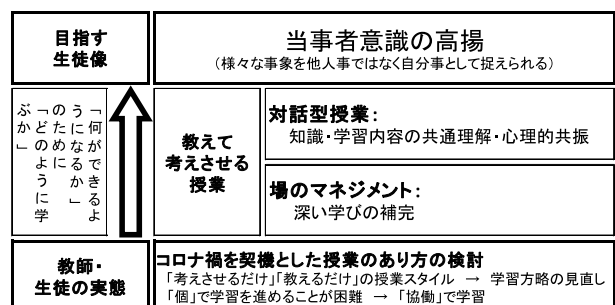


図1 研究構想図

を通じて、考えを広めたり深めたりする学びである。多田³⁾は対話型授業を「他者・対象との対話の往還により、差異を尊重し、思考を深め、視野を広げ、新しい智慧や価値、解決策を創り上げていき、その過程を通して、参加者相互が、協創的な関係を構築していく協同・探究的な学習活動」としている。

(3) 場のマネジメント

場とは、人々が参加し、意識・無意識のうちに相互に観察し、コミュニケーションを行い、相互に理解し、相互に働きかけ合い、共通の体験をする、その状況の枠組みのことである。伊丹⁴⁾は場を、「人々の間の情報の相互作用の容れもの」と定義し、場のプロセスのマネジメントのかじ取りの重要性を指摘している。そして、①かき回す（あるいはゆらぎを与える）、②切れ端を拾いあげる、③道をつける、④流れをつくる、⑤留めを打つ（あるいは仮留めを打つ）とし、場の中の情報的相互作用を進行させるものとしている。

4. 実践内容

本研究では、教科「農業」の科目「農業経営」で、園芸科学科3年（32名）を対象として2020年9～11月に実施した。そして、3つの単元の中でそれぞれ当事者意識を育む問いを意図したテーマを設定して実践（プラン作成の演習）を行った。また、生徒が集中力を継続できるように、7つのステージで1単位時間の授業を構成した（表1）。

(1) 導入

まず、前時の振り返りを行い、本時の学習とのつながりを理解させ、生徒の学習意欲を喚起する（導入Ⅰ）。そして、本時の目標と流れ、ゴール地点（身につけさせたい力）を示し、本時の見通しを持たせる。次に、教科書やこれまでのノート・ワークシートを用いて既習内容のポイントを焦点化し、習得した内容を活用して学習課題の解決につなげる状態にし、学力の定着を図る（導入Ⅱ）（教師からの説明）。

(2) 展開

プランのペア・グループワーク（展開Ⅰ）では、生

表1 農業（農業経営）の1単位時間の授業の構成

単元とテーマ	農業の動向と農業経営 農業経営の組織と運営 農業経営と情報 「環境保全型農業の実現に向けて」 「これからの農業経営の展開方法」 「商品開発（農産物のマーケティング）」				
目標	○課題の設定に関心を持ち、プランの設計を意欲的・主体的に取り組むことができる。（関心・意欲・態度） ○身近な例やこれまでの学習経験を基に、自分や他者のアイデアを適切に表現したり、異なる意見から新たな気づきを認識したりすることができる。（思考・判断・表現）				
ステージ	学習活動	指導・支援上の配慮事項など	教えて考えさせる授業	対話型授業・場のマネジメント	
1	導入Ⅰ	1 前時の授業を振り返る 2 本時の目標を知り、見通しを立てる	○前時の学習を振り返り、復習を行うことで本時の学習とのつながりを理解させる。 ○本時の学習の内容と目標を知らせる。 学習の流れと時間を板書して、「見える化」することでタイムマネジメントを意識させる。	教師の説明	
	導入Ⅱ	3 既習内容を活用することを理解する			
3	展開Ⅰ	4 プランのペア・グループワーク (1)アイデアを付箋に書きアウトプットする (2)ペア・グループワークで商品プランを話し合う	○アイデアの出ない生徒には、これまでの事例や身近な事例を書くように指示をし、意見の創出をさせる。 ○代表生徒（各類型）を選出し、教師とのやりとりの中から、アイデアとその根拠を提示させる。 ○個人やペアーワークで気がつかなかったアイデアに注目させ、メモを取らせる。	理解確認 理解深化	自己内対話 他者との対話 かき回す 切れ端を拾いあげる 道をつける 流れをつける 留めを打つ 自己内対話
		5 ディスカッションタイム (1)グループの代表生徒と教師のやり取りを聞く (2)ディスカッションの内容を整理して理解する			
5	展開Ⅲ	6 ワークシートの作成 (1)評価規準（ルーブリック）を確認する (2)個人で考えを再度見直す	○他の科目の学習内容ともリンクさせ、教科横断的な取り組みであることを理解させる。 ○これまでの学習内容を踏まえて意見を集約し、ポイントを復唱することで理解を深めさせる。 ○個人でアイデアを再度まとめさせ、考えの深まりに気づかせる。		
6	終末Ⅰ	7 ワークシートにまとめ・評価を記入する	○ノートのメモや教員との対話のやり取りを思い出させ、本時のまとめ、授業の振り返りをさせる。	自己評価	自己内対話
7	終末Ⅱ	8 振り返りを行う			

徒に付箋を配布して既習の知識や資料等をもとに自分のアイデアを表出させる。そして、ペアやグループでお互いの意見を発表・説明し合う活動によって、これまでの学びや教師の説明事項、教科の内容を理解できているかを確認する（理解確認）。

ディスカッションタイム（展開Ⅱ）では、4名の代表生徒（毎回交代）と対話形式で意見を紡いでいく（写真1）。他者との対話を通じて、様々な気づきや発見を見出し、また、それらを整理して黒板に書いて可視的な工夫を行う。ある程度方向性を見据えながらも、一定の結論を終着点とせずに探究心を高める（理解深化）。場のマネジメントに関しては、表出した意見に異なった視点で質問をぶつけ【かき回す】、きらりとひかるコメントに補足を加えながら【切れ端を拾いあげる】、適切な言葉で明示的にまとめへと誘う【道をつける】。そして、クラスの生徒全体がある程度同じ方向へ動くように生徒の様々な意見を総括して【流れをつくる】、生徒に確認を求める【留めを打つ】。

ワークシートの作成（展開Ⅲ）では、シートに記載してある学習目標の達成度の評価ツールであるルーブリック表を参考にしながら、表出した意見と教師の解説・補足、既習事項とを有機的に紐づけできるようにした。そして、個人で最初の考えを再度見直す機会とした。

(3) 終末

ワークシートにまとめ、分かったこと・気づいたこと・分からなかったことを記入させる。また、自己との対話を行う（終末Ⅰ）（自己評価）。そして最後に、振り返りを行う（終末Ⅱ）。

5. 結果と考察

(1) 授業の構成と展開

前出の表1に基づき、7つのステージで授業を構成し、ディスカッションタイム（展開Ⅱ）で対話型授業の場のマネジメントを行った。その結果、以下の2点を指摘することができる。

第1に、7つのステージで授業を構成し、学習の流れと時間を板書して「見える化」することで、生徒の学びのベクトルを一致させることが可能となり、各ステージに必要な時間配分を意識して授業を完結できることである。ワークシートの記述には「考えることが楽しかった」「短時間だが集中して取り組めた」「いろいろな切り口があることに感動した」「ゴールを意識



写真1 対話型授業の様子

して考えることができた」とのコメントが目立ち、授業デザインとしてストーリーがぶれることなく、かつ生徒に何をどのように学ばせるかが時系列的に明確となった。つまり、7つのステップに沿うことにより、教える側にとっても汎用的に授業展開が可能であることが指摘できる。しかし、限られた時間内のため、ある程度焦点化して展開できるような工夫が求められる。

第2に、対話型授業にしたことにより、一方向的な「伝達」形式とは異なり、生徒が能動的に参画する協働という場で心理的共振がなされ、思考訓練が進む状況にあることがあげられる。代表生徒の意見や考えを既習事項にリンクさせたり誘導したりすることや、身近な例や他の授業での取組によって、既存知識の習得レベルを確認しつつ、知識を起点として思考を展開させることが可能となった。しかし、生徒が自律性をもって発言が活発化すればするほど、その場のプロセスの巧みなかじ取りが教師に求められる。生徒の情報処理能力を勘案しながら行うかじ取りの成否が、今後の授業の成熟に大きな影響を与えることは否定できない。また、展開次第によっては意見が出ずに闊達なディスカッションとならない可能性もあり、事前に課題を準備して動機づけを喚起しておく必要もある。

(2) アンケート調査結果より

生徒全員を対象として、生徒の意識を測定するためのアンケート調査を行った（有効回答率100%）。分析方法はアンケートの回答「とてもあてはまる」を4点、「あてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点とし、数値化して分析を行った（4件法）。

表2は、「教えて考えさせる授業」「対話型授業・場のマネジメント」の授業評価の視点から、3つの授業実践後にアンケート調査を行った結果である。その結果、①教師の説明と②③理解確認のスコアは総じて高

く、生徒の理解度は満たされている結果となった。ポイントが焦点化されたことに加え、ペア・グループワークがそれを強化し、代表生徒との質疑応答をフォローを加えながら解説したことで理解が促進されたものと考えられる。④理解深化と⑤自己評価のスコアでは、創造的な意見を紡ぎだすことが苦手な生徒の存在や、対話形式部分での発言の内容や要点をメモ・整理できない生徒もおり、一部の生徒がわかったこと・わからなかったことが十分認識できていないことが明らかとなった。そのため、それらの生徒へのフォローが次の授業までに必要であることが明らかとなった。⑥⑦のスコアは特に高く、対話型授業が主体的な学びを誘発し、深い学びの駆動力として生徒の動機づけを高めていることがうかがえる。⑧のスコアは他と比較して低いことから、机間指導も含めて個々の生徒の状況把握とフォローが必要であることが明らかとなった。⑨のスコアから、場のマネジメントによる授業への興味・関心が喚起され、思考のプロセスに大きな影響を与えたことが類推できる。

表3は、生徒の当事者意識の変容を探るために、授業実践の前後にアンケート調査を行った結果である。結果は、事後のスコアがすべての項目で高くなり、さらに、平均値の差についてt検定を試みた結果も、すべての項目において1%の有意水準で統計的有意差が認められたことから、当事者意識の高揚について本実践が一定の成果をあげたことがうかがえる。他者の考えを参考にして自分の考えを深めて自ら問いかけ悩み、自ら課題を見出すことや、課題と自分との関係性を意識して取り組もうとしており、また、真剣に自分に向き合おうとしており、深い学びへとつながっていることがうかがえる。しかし、「学びが成長にどのようにつながるかを考えるようにしている」「目標を達成するために自分に何ができるかを考えることができる」の項目のスコアが他と比較して低かったことから、単元全体を通してキャリア教育の視座から動機づけを高めるような授業展開の工夫が求められると考えられる。

6. おわりに

本研究は、生徒の当事者意識を高揚させるため、「何ができるようになるか」のために「どのように学ぶか」という視点で授業改善を試みたものである。そして、対話型授業の場のマネジメントで一方向的な知識の伝

表2 自己評価アンケート調査結果

質問項目		平均値
教 え て 考 え る 授 業	①先生の説明はわかりやすく、授業の重要なポイントが理解できた。(教師の説明)	3.69
	②友達との意見のやり取りから、授業の重要なポイントが理解できた。(理解確認)	3.59
	③代表生徒と教員の対話形式のやり取りの中で“気づき”があった。(理解確認)	3.63
	④教員の説明や友達の見解を参考に、自らのプランを作成できた。(理解深化)	3.34
	⑤わかったこと・わからなかったことをきちんと認識できた。(自己評価)	3.28
場 の 対 話 型 授 業 ・ マ ネ ジ メ ン ト	⑥対話形式の授業で、自分の考えを広げたり、深めたりすることができた。	3.81
	⑦対話形式の授業で、積極的に授業に参画し、演習に取り組むことができた。	3.75
	⑧対話形式の授業で、聞く力・伝える力を身につけることができた。	3.31
	⑨対話形式の授業で、先生の進行から新たな結論が出ることに面白さを感じた。	3.66

表3 当事者意識の評価アンケート調査結果

質問項目	平均値		平均値の差 (B-A)	
	事前(A)	事後(B)		
当 事 者 意 識	目の前の課題を自分と関係があると思っ て取り組むことができる。	2.63	3.47	0.84*
	課題は与えられるものではなく、自 分で見つけてくるものである。	2.56	3.38	0.82*
	他者の考えを知り、自分の考えを 深めることができる。	2.88	3.66	0.78*
	学びが成長にどのようにつながるか かを考えるようにしている。	2.53	2.97	0.44*
	目標を達成するために自分に何 ができるかを考えることができる。	2.72	3.13	0.41*

*p<0.01

達・付与ではなく、質疑やコメントと応答という形を取り入れて授業を展開した。その結果、生徒の学習内容の理解が深まり、さらに、生徒の意識の変容が確認できたことから、授業デザインとしては成果があったものと考えられる。

唯一の正解があるわけではない現実の社会や日常生活の中で、いかに当事者意識を持って自分事として捉えて対応できるかが「生きる力」ではないだろうか。今後も、生徒が熟考できる環境を整え、他教科とも横断的に当事者意識を育む投げかけを続けることが、「個」「協働」の学びに活かされるものと考えられる。

【参考文献】

- 1) 2) 市川伸一 (2012) 『「教えて考えさせる授業」を創る』 図書文化
- 3) 多田孝志 (2018) 『対話型授業の理論と実践』 教育出版
- 4) 伊丹敬之 (2003) 『場のマネジメント』 NTT出版



深い学びを促す道徳科の授業づくり

—中心発問の組織化を用いて—

倉敷市立第三福田小学校 教諭 福吉 知宏

1 はじめに

令和2年度から小学校新学習指導要領が完全実施され、「特別の教科 道徳」もスタートして3年目に入った。道徳教育を抜本的に改善・充実させるために、道徳科の授業において多様で効果的な指導法の工夫を図ることや、発達段階に応じ、答えが一つでない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題として向き合うような授業が学校現場には求められている。

本県の「令和3年度教育施策の概要」においても、子どもたちの規範意識や自尊感情、人間関係構築力を高め、豊かな情操を育むため、「特別の教科 道徳」を要として、学校の教育活動全体を通じて様々な体験活動等を交えながら、学校・家庭・地域が一体となった取り組みをすることや、道徳科において、指導方法や指導体制等に関する実践的な研究を通して授業改善を進め、その成果の普及に努めることが主な方向性として示されている（岡山県教育委員会，2021）。

本校は令和元年度より、「特別の教科 道徳」の校内研究を進めている。授業実践を進めていく中で、板書や授業の型はある程度定着したものの、評価を確実にを行うために必要な、ねらいとする道徳的価値へ向かって思考が深まっていくような児童の姿を引き出すことの難しさを感じる教職員は少なくない。こうした実情から、心情を追う読解レベルの授業から価値理解レベルの授業へと質的転換を図っていくことが必要であると考え、本研究テーマを「深い学びを促す道徳科の授業づくり」とした。

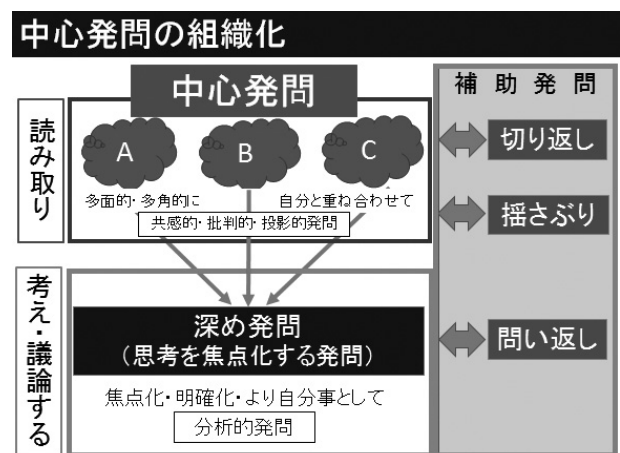
2 研究仮説

中心発問の組織化を行うことで、児童はねらいに向けて道徳的価値の理解を深めていくことができるであろう。

上記の仮説について、授業での発言、振り返りの記述、意識調査の分析によって、その効果を検証していく。

3 中心発問の組織化について

中心発問の組織化（図1）とは、中心発問を議論のスタート地点とする「開かれた発問」から始めて、補助発問で子どもの意見を吟味し、思考を揺さぶることでさらに道徳的価値の理解を広く深くし、「深め発問」で子どもが納得解を得るという発問構成である（伊住，2021）。



【図1：中心発問の組織化・本校校内研修会資料より】

4 指導の実際

(1) 5年生での実践

- ① 教材名「転校生がやってきた」
- ② 主題名 だれに対しても公平に
- ③ 本時のねらい

いじめについての自分の考えを話している勇馬の気持ちを考えることを通して、誰に対しても公正公平にすることは、いじめをなくしていくことにつながることを理解し、どんな時も正義の実現に努めようとする態度を育てる。

④ 中心発問の組織化について

(ア) 中心発問

本時のねらい「いじめについての自分の考えを話している勇馬の気持ち」を多様な視点から考えることができるように、「いじめについて自分の考えを話している勇馬はどんなことを考えているでしょう」と共感的に問うことにした。

(イ) 補助発問

中心発問によって広がった児童の考えに対して、「次は勇馬がいじめられてしまうのではないかと揺さぶりをかけることで、児童の本音を引き出すとともに、捉えさせたい道徳的価値へ向けて児童の意識を導くようにした。

(ウ) 深め発問

「なぜ、勇馬は勇気を出していじめはだめと言うことができたのか」と分析的に問うことで、本時のねらいに向けて道徳的価値の理解を自分との関わりで深く考えることができるようにした。

⑤ 中心発問における全体交流の様子

展開の前半において、いじめを受けている「ほく」に話しかける勇馬を見た時のクラスみんなの思いを考えさせることで、だめなことをだめと言えない空気が学級にあることに気付くことができるようにした。その上で、中心発問「いじめについて自分の考えを話している勇馬はどんなことを考えているでしょう」を児童に投げかけ、話し合いを行った。以下は、その時の授業記録である。

T : いじめについて自分の考えを話している勇馬はどんなことを考えているでしょう。(ア)

C 1 : 弱い者いじめはひきょうだ。

C 2 : これ以上悲しませたくない。

C 3 : 今の状況を変えたい。

C 4 : いじめは絶対にだめだ。

T : 勇馬ってすごいね。でも、「ほく」の味方は勇馬一人だし、次は勇馬がいじめられてしまうのではないと思うんだけど…。(イ)

C 5 : 一人でも、味方にならないといけない。

C 6 : 何があっても「ほく」を守らないといけない。

T : なぜ、勇馬は勇気を出していじめはだめと言うことができたのでしょうか。(ウ)

C 7 : いじめは許さないという強い心があったから。

C 8 : 自分も前の学校で同じ経験をしていて、友達の力でいじめから救われたから。

C 9 : 友達が味方になることが、何よりも大切だと思っていたから。

A児 : だめなことはだめだと言うことで、いじめはなくなっていくと信じているから。

C 10 : いじめをなくしていくには、正しいことが正しいと言えるクラスの空気が大切だと思っているから。

上記授業記録のように、(ア) 中心発問によって、

C 1 「弱い者いじめはひきょうだ」(善悪の判断)、C

2 「これ以上悲しませたくない」(友情・信頼)などの考えが引き出された。また、(イ) 補助発問によって、公正公平、社会正義へと児童の意識が移っていったことが分かる。その上で、(ウ) 深め発問によって、友達の力が大切 (C 8)、同調圧力に屈しないこと (A児) など、ねらいに迫る発言を引き出すことができた。

自分もいじめは絶対にしてはいけないと思ったし、勇馬さんのようにだめなことはだめ、正しいことは正しいと言える人になりたい。

【終末におけるA児の振り返り】

A児は、授業の始まるの時点では、いじめをなくすために大切なことは、「友達に対する優しさ」であると考えていた。しかし、本時の学習を通して、いじめは絶対にだめなものであることを再認識するとともに、いじめをなくしていくために、だめなことはだめと伝えられる人になりたいという実践意欲の高まりが記述には表れていた。

以上の事から、A児は、本時のねらいに向けて道徳的価値の理解を深めていると判断でき、仮説の有効性が確認できたと考えられる。

(2) 6年生での実践

① 教材名「星野君の2塁打」

② 主題名 きまりを守るために

③ 本時のねらい

チームのメンバーの立場に立って、きまりを守ることについて考えることを通して、自分や周囲の人々が気持ちよく生活を送るためにきまりが存在していることを理解し、きまりを進んで守ろうとする意欲を育てる。

④ 中心発問の組織化について

(ア) 中心発問

本時のねらい「チームのメンバーの立場に立ってきまりを守ること」について多様な視点から考えることができるように「チームのメンバーのあなたは、きまりを守ることについてどう考えるか」と批判的に問うことにした。

(イ) 補助発問

中心発問によって広がった児童の考えに対して、「きまりを守ったら、チームは負けるかもしれないよ」と揺さぶりをかけることで、児童の本音を引き出すとともに、捉えさせたい道徳的価値へ向けて児童の意識を

導くようにした。

(ウ) 深め発問

「きまりを守ることは、なぜ大切なのか」と分析的に問うことで、本時のねらいに向けて道徳的価値の理解を自分との関わりで深く考えることができるようにした。

⑤ 中心発問における全体交流の様子

展開の前半において、監督からのサインを無視した星野君に自我関与させ、その時の思いを考えさせることで、集団のきまりよりも自分の思いを優先させてしまう考え方に気付くことができるようにした。また、サインを出した監督にも自我関与させ、思いを考えさせることできまりを守ることの大切さについても考えることができるようにした。

その上で、中心発問「チームのメンバーのあなたは、きまりを守ることについてどう考えるか」を児童に投げかけ、話し合いを行った。以下は、その時の授業記録である。

T : チームのメンバーのあなたは、きまりを守ることについてどう考えますか。(ア)
C1 : きまりを守らないのは、間違っただけだ。
C2 : 監督から出される指示は守ってほしい。
B児 : チームのみんなに迷惑をかけるかもしれない。
C3 : チームがバラバラになってしまう。
C4 : まとまるためには、きまりを守ることが大切。
T : でも、きまりを守ったら、チームは負けるかもしれないよ。(イ)
C5 : それでも守ることは大切。
C6 : 勝ち負けよりも、チームの一員として守る方が大切だと思う。
C7 : きまりを守って勝ったら、全体が勝ったことになる。
C8 : 達成感が大きい。
C9 : チームのみんながうれしい。
C10 : きまりを守らずに勝つと、もやもや感が残る。
C11 : きまりを守って勝つと、みんなが気持ちいい。
T : きまりを守ることは、なぜ大切なのでしょう
か。(ウ)
C12 : チームをレベルアップさせるため。
C13 : きまりを守ることは、自分のためだけでなく、みんなのためになる。
C14 : みんながうれしくなる。
B児 : みんなが気持ちよくなる。

上記授業記録のように、(ア) 中心発問によって、C1「きまりを守らないのは、間違っただけだ」(善悪の判断)、C3「チームがバラバラになってしまう」(集団生活の充実)などの考えが引き出された。また、(イ) 補助発問によって、規則の尊重へと児童の意識が移っていったことが分かる。その上で、(ウ) 深め発問によって、きまりを守ることは、自分のためだけでなくみんなのためになる(C13)、みんなが気持ちいい(B児)など、ねらいに迫る発言を引き出すことができた。

今日の授業で、きまりを守ることは、みんなも気持ちよくなることにつながると分かりました。友達の意見を聞いて、周りの人のためにという考えをもちながらきまりを守って生活したいと思いました。

これからは、きまりを守るの意味が分かったので、それを意識して生活したいです。

【終末におけるB児の振り返り】

B児は、授業の始まる時点では、きまりを守ることは、「怪我がないようにするため」、「快適に過ごすことができるようにするため」「みんなに迷惑をかけるため」に大切だと考えていた。

しかし、本時の学習を通してきまりを守ることはみんなも気持ちよくなるから大切であると考えようになった。また、「みんなも」という考えは、中心発問における話し合いの中で、友達の意見を聞いて気付いた視点であることが分かり、他者理解も深まっていることが確認できる。さらに、「きまりを意識して生活したい」という最後の記述からは、ねらいとする道徳的価値への実践意欲の高まりが見られる。

以上の事から、B児は本時のねらいに向けて道徳的価値の理解を深めていると判断でき、仮説の有効性が確認できたと考えられる。

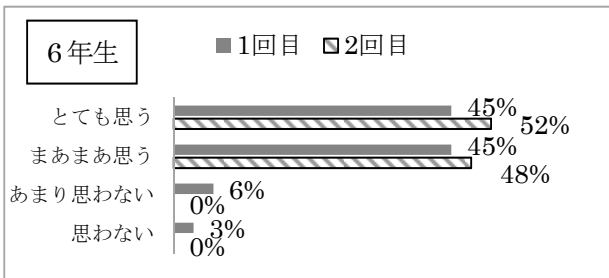
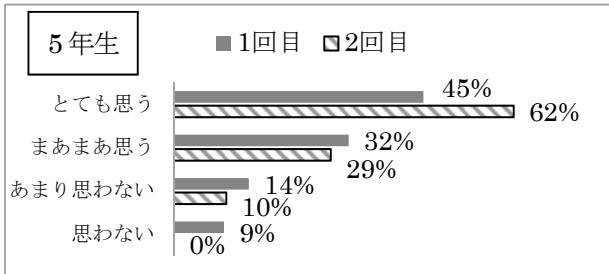
5 結果と考察

中心発問の組織化を取り入れ、深い学びを促す道徳科の授業実践に取り組んだことで、児童の意識がどのように変化したかを調べるために、令和2年度(6年生34名)は、5月と12月の2回、令和3年度(5年生22名)は、4月と7月の2回に分けてアンケートを行った。回答は「とても思う」「まあまあ思う」「あまり思

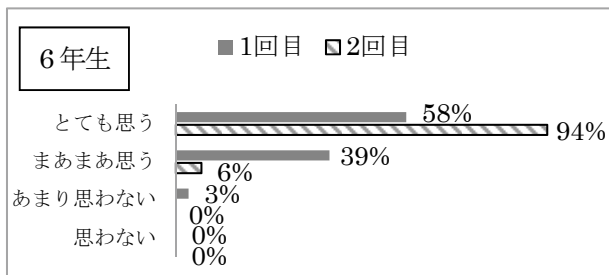
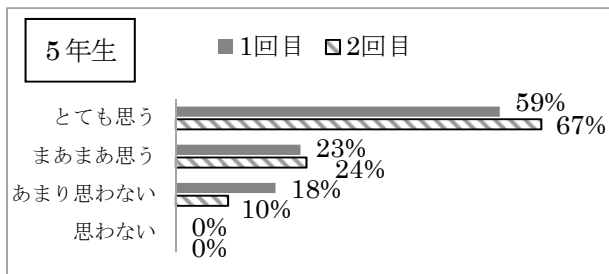
わない」「思わない」の4件法で行った。

アンケート項目
 ① 道徳の時間が好きだ。
 ② 友達とお互いの考えを伝え合っている。

① 道徳の時間が好きだ



② 友達とお互いの考えを伝え合っている。



どちらの学年の児童も、アンケート①②それぞれの項目において、肯定的な意識をもっている児童の割合が増加していることが分かる。

その理由として、中心発問の組織化によって、児童が道徳的価値を自分事として多面的・多角的に考えることができたことが関係していると考えられる。学びの深まりと肯定的な感情や学習意欲との関連性について、北尾（2020）は、知識の精緻化は学びを深める心

的メカニズムであり、その深い学びを続けると課題関与型意欲（知的好奇心など）が強くなり、主体的態度が身に付くという関連性を想定することができると述べている。今回の実践によって、教師自身が道徳科の授業において、児童にどのようなことを考えさせ、どのようなことに気付かせたいのかといった明確な指導観をもち、ねらいに向けて発問構成を工夫することができた。その結果、児童は、道徳的価値についてより深く考え、道徳的価値に関する知識の精緻化が生じたと考えられる。中心発問の組織化を通して児童は既存の価値観を見直し、新たな価値に気付くことが重なり、道徳科の授業の楽しさを実感するとともに、「発言したい」「聞きたい」という意欲を高めることにつながったのではないかと考えられる。

6 終わりに

令和6年度の教科書改訂では、教材が多様化し問題解決的な学習や体験的な学習など、多様な指導法を意識した授業作りが求められるであろう。そうした中でも、中心発問の組織化は教師が明確な意図をもって指導をしていくために必要な手立てになるのではないかと考える。今後、さらに児童の実態や教材の特性、ねらいに応じた授業を実践していくことで、深い学びを実現し、児童の道徳性を高める一助を担うことができればと思う。

〈参考文献〉

伊住継行（2021）『『深い学び』を促す発問構成に関する研究—発問の『立ち位置』の組み合わせに注目して—』、日本道徳教育学会第97回発表資料集令。
 岡山県教育委員会（2021）『令和3年度教育施策の概要』。
 北尾倫彦（2020）『『深い学び』の科学—精緻化・メタ認知・主体的な学び—』、図書文化社。
 倉敷市立第三福田小学校（2020）『令和2年度倉敷市立第三福田小学校研究集録』。



英語入門初期における、調べることを踏まえた思考型課題の実践

—英語学習への内発的動機付けを高める手立てとして—

岡山市立福浜中学校 教諭 新谷 彰 男

I はじめに

中学校1年生（以下、中1）を担当する英語教師の大きな悩みの1つに、入門期での家庭学習の内容がある。ベネッセ教育総合研究所（2021）が公表した新型コロナウイルスによる臨時休業（以下、臨時休業）中に中学校で出された課題の種類としては、83.7%が習得型（ドリルなど）であり、16.3%が探究型（調べ学習など）であった（p.5）。学年別の家庭学習のタイプは紹介されていなかったが、中1の4～5月の入門期において習得型の課題を設定するのは難しい。

その理由は2つある。1つ目に、課題として出すことができる内容に限界があることである。小学校において英語が教科化されたとはいえ、アルファベットなどを「書く」ことが十分に定着していない生徒は少なくない。このため、漢字ドリルや計算のドリルの感覚で習得型の課題を出すことには限界がある。仮に出すことができたとしても、小学校で慣れ親しんだ単語を書くだけになりがちな内容になってしまうため、結果的に書くことが目的となった作業的な取組に終始してしまう可能性がある。

2つ目に、一般的に中1の4月の授業時数がかなり少ないため、生徒が英語についての基礎的な項目などについて学ぶ機会が限られていることである。4月は家庭訪問や健康診断をはじめ、中学校生活に慣れるためのオリエンテーション等の行事が多くある時期である。時間割に沿って授業が行われるのは、中旬以降となる。加えて、英語の勉強方法に慣れていない多くの生徒の心情を考えると、授業進度を上げることができない実情がある。

2020年4月～5月の臨時休業は、上記の問題に加えて、英語学習への意欲の維持という新たな問題に授業者を直面させるものであった。

II 生徒の実態と研究のねらい

本研究の対象となった岡山県立大安寺中等教育学校の生徒は、適性検査を経て入学してきている生徒たちである。多くの生徒については「英語は入試に大事だ

から勉強しないといけない」といった、いわゆる同一化的動機づけ（外発的動機づけの一種）がなされていると推測できる。その反面、臨時休業により学校生活がほぼ断絶された状態において英語学習に対して高い動機づけを維持することができるかということは、大きな懸念材料であった。

この状況を改善するために、小学校で慣れ親しんだ調べ学習などの要素を取り入れた課題を活かすことで、臨時休業前にあった英語学習への関心が学校再開後も維持または高める手立てとすることができるのではないかと考えた。本研究は、こうした着眼点からの実践についての成果と課題について考察するものである。

III 研究の内容

1 （調べることを踏まえた）思考型課題

課題は習得型と探究型に大別される。前者は問題集・授業の復習・計算や漢字などの反復的な練習・教科書の問題といったものであり、後者は作文・レポート・調べ学習といったものである。本研究では、探究型学習の一環として、与えられたテーマや課題について調べることを踏まえた思考型の課題（以下、思考型課題）を取り上げている。

2 動機に関する先行研究

これまでの研究で、動機づけは「外発的動機づけ」と「内発的動機づけ」の2つに大別されていた。前者は、報酬を得たり罪を逃れたりするなど、学習活動そのものが手段となる動機を指す。これに対して、後者は精神的な楽しみなどを得るために学習活動を行う動機を指す。例えば、教育の現場では、一般的な傾向として、学習者の中に内発的な動機が生まれ、進んで英語を学習することが期待されている。金子（2018）は中学生を対象にした学習動機に関するレポートの中で、「英語が好き」という心理的な要因（内発的動機）が高い学習頻度を生み出すことを示唆している。

その後、自己決定理論（Ryan & Deci, 2020）が提

唱されてからは、内発的動機づけと外発的動機づけを連続体の両端に位置するものとして捉えられるようになった(吉田, 2009; 伊達, 2017)。すなわち、全く動機づけられていない状態(無動機)から内発的に動機づけられている状態(内発的調整)まではつながっており、その途中段階に「外的調整」「取り入的調整」「同一視的調整」という3つの異なる外発的動機づけの段階があるとされる。(図1)。

無動機	外発的			内発的
非調整	外的調整	取り入的調整	同一視的調整	内発的調整
低	←自己決定の度合い→			高

図1 動機づけ内在化の過程と自己決定度(吉田, 2009, p.109)

図1に示される最初の「非調整」の段階では、生徒は何も自己決定しておらずまったく動機づけがなされていない。「英語が嫌いでやりたくない」という生徒がこれに該当する。2つ目の「外的調整」の段階では、出発点が「勉強することは義務だから」「不安だからとにかく勉強する」などといった消極的なものであるが、自己決定の要素も若干あるとされている。3つ目の「取り入的調整」の段階では、「中学校卒業時には、英検3級ぐらいを持っていないと恥ずかしいから学習

する」という、学習の理由が自己の内部に存在する状態を指す。4つ目の「同一視的動機づけ」とは、「英語で良い成績をとることは入学試験で大事である」などの価値観の上に成り立っている状態を指し、自らの価値観から行動を起こす段階である。そして、最後の「内発的動機づけ」は、「英語の勉強そのものが楽しい、面白い、好きだから」が出发点となっている段階である。

IV 課題の内容

先行研究に自らの視点を加えて作成した課題は、次のとおりである。

1 言語文化的な側面に関する思考型課題(課題1)

1つ目の課題は、英語の文法や日本語との言語文化の違い等について調べる課題であった(図2)。この課題を提示したねらいは2つあり、1つは英語の言語文化的な側面に触れることで英語への関心を高め、英語学習への内発的動機を高めることであった。もう1つは、英語について疑問に思いながらも「英語とは、そういうものだ」という認識になりがちなことを調べることで、「疑問に思ったことは、自分で調べて解決する」という同一視的動機づけを高めることをねらいとした。テーマの選定については、関(2017)等を参考にした。

2 仕事で英語を使っている人について書かれた記事の感想(課題2)

もう1つの課題は、英語を仕事で使っている人の記事を読んでその感想を書くことであった。国際線のパイロットである天野(2012)の記事を題材として取り上げた。目的は、英語を実際に使っている人たちの体験や考え方に触れることで、「英語をきちんと勉強しておくことは大切なことである」という同一視的動機づけを高めることであった。生徒は記事の中で印象深かった箇所に線を引き、その感想を書いた。

V 臨時休業前後での英語学習への関心の比較

80名の中1の生徒を対象に、臨時休業前後の授業の中で英語学習に関するアンケートを行った。英語学習の関心の高さについては、4点(4とても高まった、3高まった、2あまり高まらなかった、1高まらなかった)から1つを選ぶ質問を行った。結果について統計的な分析を行ったところ、英語学習への関心への高ま

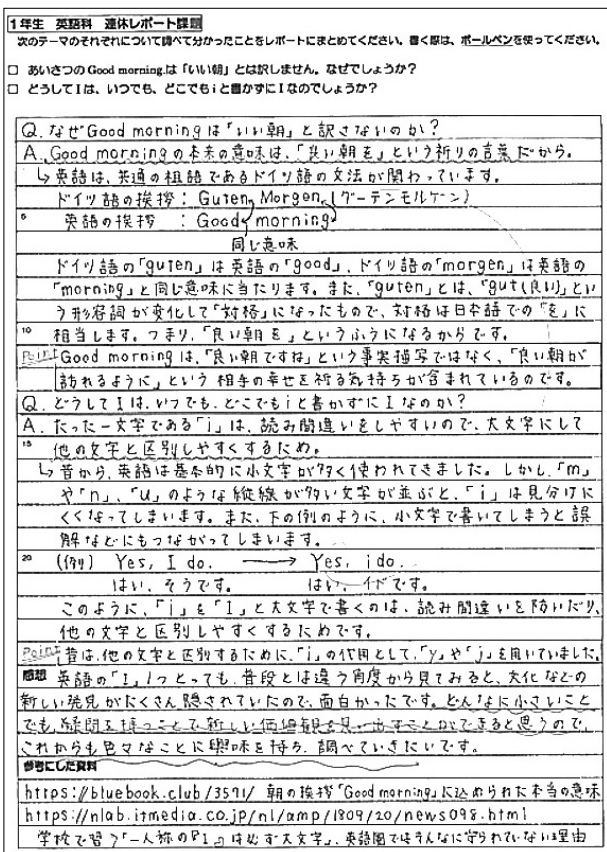


図2 生徒のレポートより

りに有意差が見られた ($F(1, 79) = 35.91, p < .01$)。よって、思考型課題は、入門初期であっても英語学習への関心の向上に一定の効果があったことが示唆された(図3)。

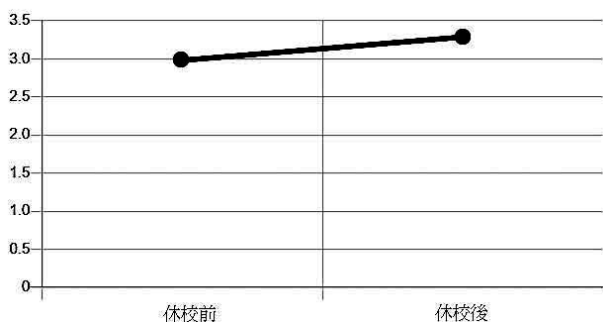


図3 臨時休業前後の英語学習への関心の変化

VI 成果と課題

1 成果

成果としては、臨時休業前に比べ英語学習への関心が高まりを見せたことであった。また、感想から思考型の課題が、英語学習への同一視的動機づけと内発的動機づけの高まりに一定の効果があったことが示唆されたことであった。さらに、生徒の感想の下線部からもこれら2つの動機づけがなされたと考えられる。

【課題1の感想】

- ・ Good morningが祈願表現だということにびっくりした。Iが文の中で紛らわしくなくするためにIIにするのだということに納得した。直訳したら和訳と一致しないものを調べたいと思った。
- ・ 今まで疑問に思っていたものの、はっきりと答えを出す機会がなかったので、レポートをしてよかった。これからも何か疑問に思ったことがあれば、すぐに調べたい。そうすれば、より英語を覚えることができるようになると思う。
- ・ 暗記に頼って英語を学んでいくのではなく、今回のように本来の意味を調べたり、小さな疑問を自ら調べたりすると、英語に対しての考えが広がっていく気がしました。

【課題2の感想】

以下は、生徒の関心が高かった記事の文とそれについての感想の一部である。

「毎回100%相手の言っていることが聞き取れるわけではなく、時には『???』という時もあります。ただ、その場合は、聞き返せばいいのです。」

・ 正直に分からないことを伝えたり、自分の気持ちや自分自身のことを伝える・積極的に話したりすることの大切さを改めて感じた。

・ 私は日本語でも同じように、『分からない時に分からない』と言える勇氣は必要だと思いました。なぜなら、そうすることで自分の知識が増えると思ったからです。

・ 授業中でも分からないと思うことがあると思う。それでも、恥ずかしがらずに質問し、英語力を高めていきたいです。

「正しい文法を使用することで、間違いなくより一層信頼できるcommunicationが図れる。」

・ 危機的状況にある時に、間違った表現でお互いが意図とは違う受け方をしてしまうと考えると、やはり正しい文を使ってコミュニケーションをとることが大切だと感じました。

・ 英会話の場合、少々間違った文法を使用しても通用していましたが、しかし、英検の練習を始めると、正しい文法が必要となっていく、自然と正しい英語を使うようになりました。そうすることで、自分が伝えたいことを確実に相手に伝えることができました。こうした経験から、この意見に共感しました。

2 成果についての考察

英語学習への関心が高まったり英語学習に対して前向きな感想が数多く見られたりした背景には、3つの要因があったと考える。1つ目は、取組の容易さである。思考型課題の利点として、英語についての背景知識(文法や語彙など)が十分ではなくても取り組むことができることがある。例えば、本研究の場合、臨時休業前にできた授業というのは、授業オリエンテー

ション, アルファベット (特に小文字) の書き方, 曜日や月を題材にした発音とつづりの一致など, 小学校英語の復習を中心とした数時間程度であった。英語に関しては, 入学後に本格的に始める生徒も少なくなく, 英語の学習方法そのものを知らない生徒が一定数いたということは否めない。こうした点で, 小学校で馴染みのある思考型課題は, どの生徒にとっても取組が容易であったと考えられる。

2つ目は, 本課題を通して同一視的動機づけ(「英語は大事だから勉強しないといけない」など)が高まり, 英語学習についての内発的動機(「英語は楽しいから勉強する」など)に繋がる機会となったと推測する。

例えば, 課題1は今回の課題が生徒の英語への知的好奇心を育てることを目的としたものであった。小学校段階の音声を中心とした学習だけでは気づきにくい綴りの不思議さ(常にIが大文字である理由)や英語の背景にある歴史や文化(Good morningの意味)に触れ, 自らが調べることで得た知見は, 異文化の言葉を学ぶことへの関心を高めたと考える。

課題2については, 生徒は記事を読んだことで英語を正しく使えるようになることの大切さに気づき, それが「英語をきちんと勉強しないといけない」という同一視的動機づけにつながったと考える。本研究の対象となった生徒は, 小学校時代に成績が良かった生徒も多く, それだけに失敗したり間違ったりすることに抵抗感を持つ生徒は少なくない。そうした生徒が, 間違いについて肯定的な解釈を持てるようになることを期待したい。

3 課題

本研究の課題は2つある。1つは, 思考型課題と習得型の課題との比較がないために, 前者がどれくらいの割合で生徒の関心に影響を及ぼしたのかを明らかにできてないことである。もう1つは, 質問内容が「あなたは英語の勉強に興味がありますか」という漠然としたものであったことである。内発的動機づけを最善とする, 無動機の状態からの4段階の心理状態を正確に把握できなかった可能性があり, 筆者の推測の域を出ない。

VII 今後に向けて

今後は, 内発的動機づけにつながるメカニズムについてさらに研究し, 生徒が「英語って楽しい。もっと勉強したい。」という気持を高める手立てを考え, 実践に繋げていきたい。

引用文献

- 天野具宏. (2012). 「明確な意思疎通の重要性」. 『英語教育』, 2012年8月号, 11.
- 金子義隆. (2018). 「英語好きを育むための教育的示唆—足立区生徒意識レポートの分析を通して—」. 『明海大学教職課程センター研究紀要』, 1, 1-15.
- 関正生. (2017). 『子どもの英語力は家で伸ばす—本物の英語が身につく最強の家庭学習法—』. かんき出版.
- 伊藤崇達. (2017). 「学習の自己調整, 共調整, 社会的に共有された調整と自律的動機づけの連続体との関係」. 『教育実践研究紀要=Journal of educational research』, (17), pp.169-177.
- ベネッセ教育総合研究所. (2021). 「小中学校の学習指導に関するレポート2020~コロナ禍の中の学校~」. 参照日: 2021年8月5日, 参照先: 「小中学校の学習指導に関するレポート2020」ダイジェスト版:
<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=5558>
- 吉田国子. (2009). 「語学学習における動機づけに関する一考察」. 『武蔵野工業大学環境情報学部紀要』, 10, pp.108-113.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2020). Intrinsic and extrinsic motivation from a self-determination theory perspective: Definitions, theory, practices, and future directions. *Contemporary Educational Psychology*, 61.
doi:<https://doi.org/10.1016/j.cedpsych.2020.101860>



中学校技術・家庭科（家庭分野）から発信する SDGs 5・ジェンダー平等の取り組み —持続可能な社会の構築を目指す生徒の育成をめざして—

岡山大学教育学部附属中学校 教諭 川上祥子

1 研究の背景

(1) Sustainable Development Report 2021

2021年6月の報告書『サステナブル・ディベロップメント・レポート(Sustainable Development Report)』により、日本のSDGs達成度は世界第18位であった。しかし、それぞれのゴール別に日本の達成度を見ると、「最大の課題」とされるものは前年と変わらず、SDGs 13, 14, 15の環境系に加え、5ジェンダー平等, 17パートナーシップである。実際に、日本のジェンダーギャップは度々話題となり、ジェンダーギャップ指数（WEF）の順位は156か国中120位である。「男女共同参画社会基本法」では、男女共同参画社会の実現を21世紀の我が国社会を決定する最重要課題と位置付けられている。

また、SDGs 5のターゲット4は、家庭内における無報酬の育児・介護、家事労働を認識・評価するという内容であり、家庭科との関りが強い。

(2) 家庭科の見方・考え方

学習指導要領には、『家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象において、「協力・協働」、「健康・快適・安全」、「生活文化の継承・創造」、「持続可能な社会の構築」等の視点から解決すべき問題を捉え、よりよい生活を営むために工夫すること。』とされている。学びの深まりの鍵となる「見方・考え方」を、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげる。その中の「協力・協働」の視点が、今回の研究とのつながりが深い部分である。

一方で、家庭科で実施した事前アンケートによると、考え方を問う質問において、夫婦別姓・結婚の有無・子どもの有無・同性婚など、多様なライフスタイルをやや受け入れる傾向がある反面、家事・育児分担など

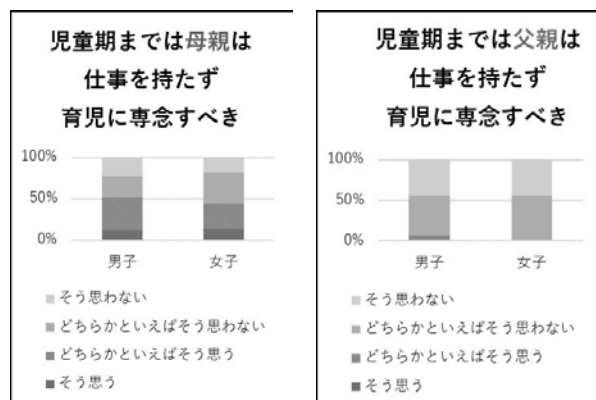


図1. 事前アンケート結果の一部

ジェンダー意識への偏りが見られた。保護者アンケートでも同様の結果が得られた。

(3) 本校の取り組み

本校は、ジェンダーに関する意識が比較的高く、生徒の呼び方に関しては、男女ともに「〇〇さん」が定着している。また、一昨年度より、生徒名簿は男女混合である。さらに、昨年度より女子のスラックスも許可され、学年で1~2人が着用している状況である。

岡山大学では、SDGsの取り組みが先進的に行われており、附属中学校においてもそれを意識した教科や総合的な学習の時間等の学びが盛んである。また、「学びの意義を理解し自ら学び続ける生徒を育成するカリキュラム・マネジメント」との研究主題で、教科連携にも努めている。

家庭科のカリキュラムでは、入学後の早い時期に持続可能な社会の実現のための三つの側面として、「環境」「社会」「経済」を理解させた上で、その後の学習を進めている。

2 研究の目的と仮説

(1) 目的

本研究は、SDGsを意識し持続可能な社会の構築を目指して生きる生徒が達成度の低い、SDGs 5に注目することで、ジェンダー平等を考えながら、より



図2. 本校家庭科研究室作成SDGsイメージ

よい意思決定ができることを目指した。また、協力・協働の見方・考え方を働かせた家庭科の学びが、本教科の目標「よりよい生活の実現」だけにとどまらず、学校生活の各場面につながり、男女共同参画社会の実現へとつながることを目的とした。

(2) 仮説と手だて

以下の仮説を立てた。

家庭科で「SDGs 5を意識した学び」を工夫して行うことで、ジェンダー意識が高まり、他教科の学びや実生活で活かされるのではないかと。そして、持続可能な社会の構築を目指すための実践的な態度を育成できるのではないかと。

手だてとして、以下の二つを考えた。

- 1 生活と繋がる実践的な態度を育成するため、身近な大人である「モデル」を通して、学びを深めるためのパフォーマンス課題に取り組ませる。
- 2 多様なライフスタイルを認め、ジェンダー意識の「あたりまえ」を疑うことができるよう、複数の「モデル」家族を通して、授業を展開する。

大人モデルとして、本校英語教諭のB先生、本校関係者の社会人3名（医師）にもご協力をいただいた。

なお、岡山大学の李教授の調査研究を参考に、ひとり親家庭等に配慮し、自分の過去を振り返る場面より、未来を考えることを取り入れた。このことから、「モデル」を通して学びを深めるためのパフォーマンス課題で学習を進めることは有効であると考えた。

3 研究の内容

(1) 1年生前期・家庭科・パフォーマンス課題Ⅰ

中学校の英語教師であるB先生（30代・女性）は、小学校教師の夫と1歳と5歳の息子の4人家族です。いつも、仕事と家事・育児で忙しい日々を過ごしています。B先生のどんな苦勞をどのように工夫して解決できるのか。B先生が今より楽になるような素敵なアイデアをレポートにまとめよう。図や表で示してもかまいません。

【時期】	【家庭科の授業での習得や活用】	【家庭科の授業以外での探究の様子】
1年生前期	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭の働き ・家庭の仕事を支える社会 ・わたしたちの家庭生活と地域 ・パフォーマンス課題Ⅰ 	
2年生後期	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の生活と遊び（幼児の心身の発達と家族の役割、子どもの成長と地域、幼児の遊びと発達など） ・パフォーマンス課題Ⅱ 	<ul style="list-style-type: none"> ●英語の期末考査（働く女性のためにできることを記述する。）
3年生前期		<ul style="list-style-type: none"> ●生活ノート（男女平等の捉え方、育児の問題、母親への感謝） ●性教育学習（男女の相互理解、異性への思いやり、他者への配慮、LGBTへの疑問）
3年生後期	<ul style="list-style-type: none"> 「生活の課題と実践」の発表 ・パフォーマンス課題Ⅲ 	

図3. 学びの流れ

ガイダンスの後、環境の学習を通してSDGsを理解した1年生に、学びとSDGsのそれぞれのゴールの関りを意識させるよう提案した。

このパフォーマンス課題では、「家庭の働き」「家庭の仕事を支える社会」などの既習内容を活かして取り組むことで学びを深めた。授業では、家族は複数の形態を示したり、「家族」を「世帯」として国勢調査を紹介したりした。1999年施行の「男女共同参画社会基本法」にもふれ、日本の現代社会の課題についても興味を持てるよう工夫した。

多様なライフスタイルをジェンダー平等によって理解させることは有効で、そのために、SDGs 5とのつながりを意識させつつ進めた。生徒が考えた工夫には、次のようなものがあった。

家族だけでなく、職場や社会の取り組みに関する意見もあった。協力・協働の視点でほとんどの生徒

が提案を出せたが、一方で「B先生が休日にまとめて家事を終わらせる」「B先生が朝に夕食も作っていく」等、この視点まで発展できていないレポートもあった。B先生がゲストとして来てくださった授業で

- ・夫や子供たちの家事分担
- ・祖父母の協力
- ・ママ友との協力
- ・便利な調理器具や家事ロボット
- ・食材宅配や料理の宅配
- ・附属学園の中に保育所設置
- ・子育て中の教師のための特別時間割
- ・岡山市のファミリーサポート利用
- ・病児保育に登録

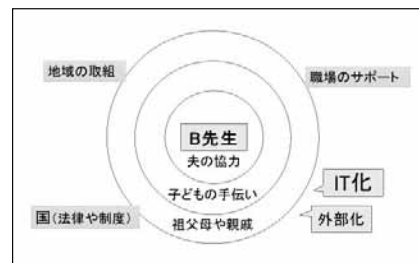


図4. 協力・協働の視点の広がり

は、「夫は『手伝う』のではない。一緒に行うのだ。」というコメントがあり、生徒の心に印象に残った様子であった。

(2) 2年生後期・家庭科・パフォーマンス課題Ⅱ

現代社会における家族・家庭生活の課題を解決するための家族ドラマシナリオをつくろう。

- テーマを設定する。(何が解決できるか?)
- 家族構成3か4人(中学生を含む。), 班で3分程度演じる。
- シナリオはGoogleスライドで作成し、個人の提出。→3枚以内(タイトル別)

各授業で、学びを深めるための問いを与えた。

問) 日本社会の夫婦の分担意識は不十分なのか?

この発問の前、導入で「B先生の発見1~3」を紹介した。昨年の学習をふり返り、つながりを意識させた。

1. うどん屋の貼り紙「たまには母さんもラクがしたい」
2. 住宅会社の看板「働くお母さんを応援する家」
3. 本校ホームページの掲載「交通安全母の会」

この3つのスライドをみて、すぐに疑問に感じない生徒が半数以上であった。挙手した生徒の説明によって気づく生徒が過半数であった。

この発問により現代社会の課題として、夫婦の家事分担は十分ではなく、ジェンダー平等に対する自分たちの意識の低さに気づいた。SDGs 5を改めて示すことで、持続可能な社会の構築のためにジェンダー平等の達成は大きく関わっていると確認した。

ここで子育て中の40代医師3名のライフスタイルを紹介した。同じ職種で比較することで、それぞれの生きがいや悩みなどを多様な視点で受け入れることができた。親世代の社会人の一日のスケジュールを知り、夫婦の家事分担のみならず、新たな課題(家族のふれ合い不足・高齢者の生活・地域のふれあい不足等)が見えた。そして、このような課題はすべてSDGs 5と関わっていた。

シナリオとスライドは、個人で作成したものを班で共有した。班の代表者のシナリオでロールプレイングをすることとし、全体での発表後、クラスメイトの感想コメントを参考に、各自のスライドを改善して提出した。テーマは、夫婦の家事分担に関するものが多いが、家族の会話不足や嫁姑問題・LGBT・ステップファミリーなどのテーマもあった。

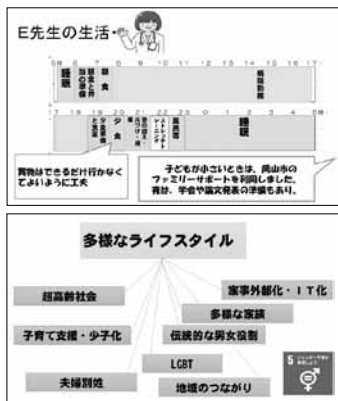


図5. 授業スライド



図6. 生徒作品

問) 2030年にSDGs 5は達成できるか。

スライド作成後に、2年生にフォームでのアンケートを行ったところ、否定的意見が約7割、その理由として、「まだまだ女性が家事をするという偏見が残っている」、「男女平等の課題の中には、給料のように国や企業などの常識を変えなければいけないのもあり、すぐに解決できない」、「日本の国会の男性と女性の比率がとても差があり、世界的に見ても日本のランキングは下の方…」などがあつた。「自分をとりまく社会の状況がこのようなから、無理だ。自分たちでは変えられない」と感じており、「私たち一人一人の意思決定で未来は変えられる」と感じることができるようになることが、次への課題になった。しかし、共有の場面で肯定的意見を聞く中で、「私たちの努力次第で実現できるかもしれない。」という気持ち生まれ、提出されたシナリオ原稿にも表れていた。まとめの授業では、日本の法令や改正を確認する中で、さらに希望が持てるよう配慮した。

表1. アンケート結果①

2021.2月実施 GoogleForms 回答数131名	
そう思う	7.8%
どちらかというと思う	22.7%
どちらかというと思わない	49.2%
そう思わない	20.3%

4 研究の成果

(1) 校内英語科との連携

2年生後期の期末考査の英語の長文問題(図7)において、教科連携しているB先生が「働く女性のために、できることは？」との問いを作った。生徒の解答には、「職場のサポート」や「地域社会や国の取り組み」以外にも、「学校教育での子ども世代の『意識』の変革」などがみられた。

・(1) 下線部①が指す内容を具体的に日本語で書きなさい。
 ・(2) 下線部②の内容を具体的に日本語で説明しなさい。
 ・(3) 下線部③について、あなたのアイデアを日本語で1つ書きなさい。
 ・(4) 本文の内容に合っているものを2つ選び、記号で答えなさい。

ア Lots of men like math and science more than Japanese and social studies.
 イ Women working outside are getting less and less in Japan.
 ウ Mrs. Bond thinks that parents should take care of their children together.
 エ More Japanese men think that men should work and women should take care of the home than Swedish men.
 オ Everyone lives with their mother, so they should be nice to women.

図7. 英語問題用紙

【意識】

- ・働く女性のために何をすればよいかを考える授業を小中高通して行う。
- ・必ずしも男と女の役割が決まっているわけではない、ということを学校で教育する。
- ・まず私たちが、男女が全てにおいて平等であるという考えをもつ。
- ・ジェンダー平等の教育を小学校でも行うようにする。
- ・男性に女性が働く意義を伝える会を開く。
- ・男性にも育児の知識を学ぶ機会を作る。

【職場】

- ・女性が優先的に入れる会社を作る。
- ・育児や仕事の相談ができる女性用の施設を職場に作る。
- ・女性の仕事を早めに終わらせる。
- ・会社が独自のこども園を作れるようにする。

【地域社会や国等】

- ・幼稚園、保育園の数を増やす。
- ・国はもっと夜遅くまで子どもを見てくれる施設を増やせばよい。
- ・地域に小さなこどもをお世話する店を作る。
- ・保育園のように、親が働いている間子供を預かってくれる機関の受け入れ数を増やす。
- ・女性が育休を取るからといって、不当に給料を下げる会社を取り締まる。
- ・男性の育児休暇をもっとアピールする。
- ・育休手当を出す(増額)。
- ・法律を作って、女性の社会進出をはかる。
- ・男女平等の日と言う国の祝日を作る。

解答する中で、家庭科の学びが他教科で活用されることを実感した。さらに、現代社会とのつながりを確認可能なものにする中で、「家庭科の学びの意義」の理解にもなった。つながった内容を『もっと知りたい・調べたい』と思うことが、学びに向かう力・人間性の伸長になったと考える。

(2) SDGs達成に向けての意識向上

3年生に「日本の社会において2030年にSDGsは達成できるか」と質問したところ、83.9%は否定的意見であり、その理由として「一部は達成できているが全体としては無理だ」という意見が多かった。具体的には、環境系の目標13, 14, 15や目標5が挙げられ、次のような記述もあった。

表2. アンケート結果②

2021.6月実施 GoogleForms	回答数167名
そう思う	2.3%
どちらかというと思う	13.8%
どちらかというと思わない	61.1%
そう思わない	22.8%

日本はジェンダー平等への取り組みが遅れている。それは昔から根付いている男尊女卑の考え方が身に染みているということが理由の一つ。(中略)昔から根付いた考え方、伝統的な文化、を極端に言えば「なくす」、または「変え」ないと解決できない。しかし、伝統的な文化の継承を保護することも重視しなければならないため、根付いた文化を変えることは難しい。

(3) 普段の学校生活における意識向上

本校では、毎日の帰りの会で3分程度の時間を設け、「生活ノート」に一日のふり返りなど自由に記入している。一日の授業の感想や友だち関係の内容が多いが、3年生の記述に、家族の協力・協働の視点やジェンダー平等を意識したものがしばしばみられた。

・今日は父の誕生日だ。そこで思ったけど、父の日・母の日でもそうだけど、父親よりも母親の方がよく祝われているなと思った。「ジェンダー平等」を目指すのもいいけど、逆に女性の立場の方が強くなりすぎているのも良くないのか、と思った。

・今日帰りの会で配られていた児童虐待のチラシについて、児童虐待の通報で、「児童虐待みたいなんですけど…」と報告しても、全く取り合ってもらえないそうです。というのも、逆にこういう風潮が逆なでして、虐待でないもので、過剰に通報されるような件が増えているからだそうです。こういうジレンマって難しいですね。

・5月ももう10日が終わってしまいました。月日が経つのはとても早いです。有意義な時間を送るために、一瞬一瞬を大切に過ごしたいです。そして、昨日は母の日でした。感謝して夜ご飯を作り、自分で作ったカーネーションのイラストの手紙とマカロンを渡しました。

7月の学活の授業中には、次のような発言があった。

教師「校外研修の工場見学のグループ分けをしよう。」
 男子1「男女別でいいのでは？」
 男子2「この会社のHPでは、SDGs 5も目標に挙げているから、その分け方はやめよう。」
 ……
 教師「Chrombookを片付けよう、密になるから女子からどうぞ先に移動してください。」
 男子「先生、それはジェンダー平等？」
 女子「レディファーストでしょう。」

また、夏休み前の学活で性教育講演会を実施した。産婦人科医の講師の話をお聴き中、ほとんどの生徒が健康や安全の視点でとらえることができたが、男女の協力やパートナーシップの重要性を感じている生徒の

様子も、ワークシートより見られた。

・女性の体だからといって「男には関係ない」のではなく、将来、一生一緒に生きていくパートナーや社会に出た ときのために理解をし合うことで、楽しくそして安全に人生を歩むことができると思いました。

・今まで受け継がれてきた命をつないでいく必要がある、しかしその中で健康で幸せな生活をしていくためには、男性と女性がどちらもお互いのことを考えていかなければならない。正しい知識を持ち後で悔やむことがないようにしなければならない。

・自分のことだけでなく、相手の気持ちを考えることが、社会で貢献する上で大切なことだと思った。

・性の知識をつけることで防げることが多くあると思う。結局のところ、全てにおいて他者への配慮が大切だとわかったし、僕もそう思う。こういったことを心に留めておき今後を過ごしていきたい。

・同性だと子供はできないが、ジェンダー的には同性婚もいいと思います。先生はどう考えていますか。

(1)(2)(3)から、ジェンダー平等の意識は次第に高まっていることがわかった。それが、男女共同参画社会の実現へ向けての一歩であり、持続可能な社会の基礎が築かれつつあるといえる。

5 今後の課題

- ① 他教科と連携した評価、かつ「Education for Sustainable Development Goals - Learning Objectives」を活用した目標と評価。理科や社会科学との連携も模索中である。
- ② ジェンダー意識は高まったが、偏った意見や過剰な反応があり、根拠を元に正しく理解させること。意識のさらなる発展として、
- SDGs 5には記載がないが、同性婚や教科書にも掲載があるLGBT(LGBTQ)について、ジェンダー平等における位置付け。

以上の点をふまえ、今後の家庭科教育に努め、その評価を学校生活全体で見とりたい。2030年までにSDGsの達成を目指す中で、性別に関わらず、自分の役割を果たすことができる社会の実現は必須であると考える。

参考・引用文献

- 1) 李環媛 (2019)「配偶者との離死別とこどもの生活状況」『季刊・社会保障研究』vol.4 No.1
- 2) 文部科学省 (2017)「中学校学習指導要領解説 技術・家庭編」
- 3) 国立教育政策研究所 (2015)「持続可能な開発のための教育(ESD)」はこれからの世界の合い言葉 みんなで取り組むESD!
- 4) 岡山大学教育学部附属中学校 (2020)『研究紀要 第55号』



パンデミックの中、GIGAスクール構想 (一人一台端末の活用) を加速させる学校経営 — 個別最適な学びをキーワードに「光南の夢育」を推進するPBLと地域探究学習—

岡山県立玉野光南高等学校 校長 三澤 宏之

1 はじめに

避けて通れない大きな改革の波を目の前にした時、その改革を確実に実行し、スムーズな学校運営を行うため校長が取り組むことは何であろうか。私は教職員の皆さんとその改革の必要性や、それにより得ることのできる生徒の学びの価値を共有し、「共感を生む」ことだと信じている。なぜなら、物事が腑に落ち、「そうか。そうだったんだ。」と感じる時、何より強い学校の一体感をもって教育活動が前に進むからである。

本校は、昭和59年「普通科・情報電子科・情報処理科・体育科」からなる学科総合型の新しいタイプの高等学校として設置された。平成15年「情報科」が新設され三つの学科となり、それぞれ独自性を発揮し、魅力ある高等学校として発展してきた。現在、「Agency・エージェンシー」という言葉がよく使われている。「自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく力」という意味の言葉で、OECDが推進するEducation2030ラーニングフレームの鍵である。令和2年度はこのエージェンシー育成を学校経営ビジョンに掲げコロナ禍の生徒の変容に繋がる研究開発を行った。「自走する生徒、伴走する教員」の価値を感じた教員が「新しい学び」に邁進する年度となった。

令和3年度、予測不能な正解のない時代を生き抜くため、GIGAスクール構想（一人一台端末の活用）の実現が急がれる中、ビジョンの策定を明確にし、喫緊の大きな変革に対峙するべく研究開発を行った。



写真1 【光南のICT活用・2020県政ハイライトより】

2 研究の目的と仮説

校長の学校経営に求められるものの一つが「決断」

である。GIGAスクール構想実現への最適なルートとしてスピード感をもって対応する学校体制の構築に資する数々の取組の是非を研究目的とし、以下の5つの仮説に基づき具体的な研究開発を実施した。

【仮説1】明確なビジョンの策定・説明により、教育課題に向け教員集団は一体となって前進する

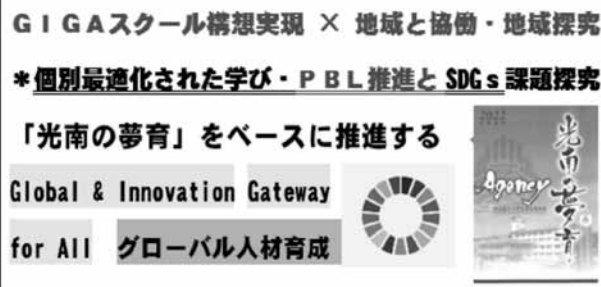


図1 【令和3年度学校経営ビジョン・職員会議より】

令和3年度「学校経営ビジョン」は令和2年度12月職員会議で早くも策定を終えた。言うまでもなくGIGAスクール構想の実現は「個別最適な学び」がポイントである。9月中旬の令和時代の地域をつくるシンポジウム「地域学のススム」に参加した際、基調講演講師の浦崎太郎氏が「次世代の育成は地元のチーム化から」また「個別最適化された学びで生徒はどんどん地域での学びを深めていく」と説明された。この瞬間、本校のGIGAスクール構想の実現は「地域と協働・地域探究」と共に進めることに決めた。キーワードは、ずばり「個別最適化された学び」である。またPBLの推進も急がれる中、本校が独自のネットワークで進めているSDGs課題探究ともマッチアップさせ進めることとした。それは本来の「GIGA」はGlobal & Innovation Gateway for Allであり、グローバル人材育成の視点が必要であること、また本校のSDGs推進はありがたいことに県内外の世界を舞台に国際的に活躍する講師の方々との連携が構築できており、内向き志向を打破し「国際的に活躍できる人材育成」に十分対応できるプログラムになっていることにも起因する。

コロナ禍でもあり、これらの取組を進めると授業以

外での一人一台端末の活用が確実に加速する。そう考
えてビジョンの中に盛り込むこととした。

また、もう一つのポイントが「光南の夢育をベース
に推進する」ということである。本校で生徒一人一人
に夢を尋ねると、全く違った答えが返ってくる。確か
に約800人の生徒がいれば800通りの夢が存在する。夢
に向かって自走する生徒とそれを支え伴走する教員、
まさに個別最適な学びがそこにもあると考えた。

【仮説2】 ターゲットを絞りシンプルでわかりやす
い校内体制を構築、縦と横の取組推進でICT活用は
大きく加速する

教員の指導力向上には「ICTクロムブック活用推進
3本の矢」と銘打ち取組を前進させた。1・導入委員
会「テラ☆光南」による各研修（ジャムボード・ロイロ
ノート・スタディサプリ他）2・指導教諭、主幹教諭や
先進校経験者による公開授業（授業前・授業中・授業
後の活用を必須）3・若手教員活用PJチーム（校長特任・
年間15回以上の授業観察と振り返り）の3つである。

1・導入委員会「テラ☆光南」による各研修

昨年8月GIGA構想に対応したChromebook導入
準備委員会を立ち上げた、委員会の愛称は「テラ光南」。
この組織では機種選定、業者対応、ガイドライン・ル
ール作成、広報、コンテンツ選定などを行うとともに、「光
南授業のスタンダード・オンライン版」作成など推進
してきた。今年度は実践研修会を複数回企画運営して
いる。5月の研修会では数学科のスタディサプリの効
果的な使い方、英語科のフォームを使った単語テスト
作成の仕方、理科のジャムボードを使った課題配信、
また国語科のロイロノート、地歴公民科のGoogleマッ
プ・Googleアースを使用した実践報告が行われた。

同じ教科はもちろん、他教科の実践も参考になり新
学習指導要領で求められる教科横断的なカリキュラム
マネジメントの視点からも大変有意義な研修となった。

2・指導教諭、主幹教諭や先進校経験者の公開授業

3・若手教員による活用PJチーム

5月の英語の授業では「時や条件を表す副詞節の見
分け方」に関する小テストを「フォーム」で実施。こ
のクラスは少人数指導の実践で2講座での同時展開で
ある。主幹教諭が先にテストを終え、A講座で結果分
析をしていたその瞬間、若手教員担当のB講座の結果
が集計に加わり、正解率で勝ったことに歓声があがっ

た。この手法で週末単語テストや構文テスト、クラス
間競争にも拍車がかかる。この時期の1年生には少し
難解な文法項目も「電子黒板機能」で詳しく説明し、
再テストして100%に近い結果を示せば自信もつき基
礎学力の定着にも繋がる。



写真2【同時展開の英語2講座・本校HPより】

【仮説3】「強み」に注目し学校の特長を活かす工夫
を導入、活用は一層進み大きな発信材料にもなる

本校の大きな「強み」の一つが県内公立高校唯一の
情報科の存在である。クロムブック活用には数時間の
研修受講と試験を受けて取得した「グーグルエデュケー
ター認定証」の有資格者も複数名おり、代替機の充実
には精力的に動いてもらった。その結果2年生、3年生に
も使えるクロムブックが60台近く整備されている。

6月の2年生「生物」の授業では生物第2教室の後
方に「テラ☆光南」貸出機が生徒人数分+a用意され
ていた。授業者は新採用の若手教諭である。クロムブッ
クで参考動画を見せ意見を集約、個々の想いをアウト
プットさせる流れのある内容の濃い授業であった。



写真3【2年生への活用・高校教育課FBより】

この取組が高校教育課フェイスブックで発信される
タイミングで本校に進学者の多い岡山市内・玉野市内
の中学校の校長先生方に連絡をとり本校の取組を説明
した。「受信と発信」の大切さを実感した瞬間であった。

【仮説4】PBLの推進により非認知能力は大きく向上する。コロナ禍でもあり多様な人々との連携で一人一台端末の活用はさらに前進する

4月末、「シトラスリボンプロジェクト」のキックオフ。愛媛県で始まった、患者や医療従事者への差別をなくすための呼びかけ運動である。感染者や医療従事者に対し「ただいま」「おかえり」といえる街づくりを目指し、感染拡大を防ごうという運動でもある。

リボンを作成することから始めたが、医療従事者への感謝、ワクチン接種の問題、ソーシャルワーカーの方々の課題、ひいては介護の現状、ヤングケアラーの深刻な状況へとPBLに向き合い、解決の方策を模索する学習へ個々の学びを広げていく狙いがある。

6月、普通科2年次生を対象に外務省「高校講座」を実施した。在ニカラグア日本大使館の鈴木康久特命全権大使より「ニカラグアの紹介と大使館の仕事」との演題で話をしていただき、各ホームルームと、ニカラグアの大使、そして外務省の3か所がオンラインでつながった。日本との関係やニカラグアの文化について聞き、遠い異国の地を身近に感じ、これから進路選択をしていく2年生にとってよい刺激になったようだ。

講演会后、希望者を対象に座談会を実施し、3年生や2年生の情報科、体育科の生徒も参加した。このように学びを広げることも光南の工夫の一つである。

7月、SDGs啓発イベント「光南の夢育×世界の夢」を実施した。岡山大学上席副学長・横井篤文先生のご紹介を受け、じっくり準備してきた企画である。

講師の市川太一氏は世界の若者の夢を一冊の本にまとめた「WE HAVE A DREAM」の著者。World Road代表・One Young Worldアンバサダー。同じく講師のHiraharaさんはW Road Co-Founder & CEO。世界をステージに活躍するお二人とのセッション実現は光南の誇る人的ネットワークの賜である。以下Q&Aの抜粋を記す。

Q「夢を追いかけ進むとき、周りの人に夢の押し売りをしていると感じ、遠慮がちになるのですが？」

A「ジレンマは誰も感じます。追いかける夢の価値を信じ、夢を広げ進んでください。私もそうでした。」

Q「夢は地元玉野市を自然と融合した都市にすることです。世界の都市を参考にグローバルに活動する必要がありますか？」

A「世界に行って見えてきたことは日本の良さです。またその国の良さも感じました。お互いを認め人としての価値を尊重し世界を良くする視点が大切です。」

Q「今、学校をあげて取り組んでいる『シトラスリボンプロジェクト』参画の輪を効果的に広げるには？」

A「とっても素敵なPJですね。これまでの活動の様子、感心して見えています。発信の仕方を工夫したり、社会をより良くするため自分の想いを加えてください。」



写真4【夢育セッション・NHKHP、本校HPより】

仮説1～4については、これまでの教員の取組姿勢や生徒の反応・変容を見るにあたり十分な成果が上がっていると考えられる。検証のデータ分析は後述する。

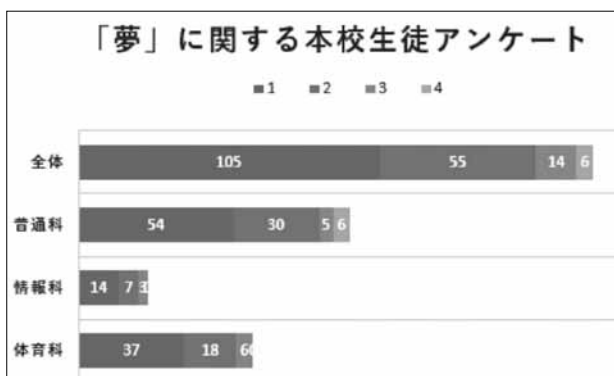
【仮説5】一人一台端末の活用は個別最適な学びを大きく推進し、それにより高校生の個々の夢もさらに広がり、やがて他者の夢実現の伴走者となりうる

県教育委員会が考える「夢育」とは夢を育み、その実現に挑戦することで、「自分を高める力」を育てる教育のことである。「夢」とは「今はできないけれど、実現したいこと」と定義している。義務教育段階の夢の芽生えと高校での学びを「夢育」でつなぎ小中高の連携を図ることが肝要だと考えた。狙いは、ずばり高校生が小中生徒の夢育の伴走者となること、光南の夢育ではそれが可能だと考えた。本校では近年地域での小高連携が進んでいる。

体育科は毎年6月に八浜小学校と大崎小学校を訪問しミニ運動会やスポーツフェスティバルを開催している。運動に親しみ楽しんでもらうことを目的に高校生が小学生に技術を教え、タイムが簡単に縮まったと驚く姿に高校生の自己肯定感も高まる取組である。

情報科は毎年数回に及ぶ小学生対象プログラミング教室の企画運営を行っている。今年は七区小学校へ出

前講座を行うなど活動範囲も広げている。夢に関する3年次生徒アンケート（単位：人数）を実施した。質問は「自分は将来の夢や目標を持っている」である。



- 1 あてはまる 2 どちらかと言えばあてはまる
3 どちらかと言えばあてはまらない 4 あてはまらない

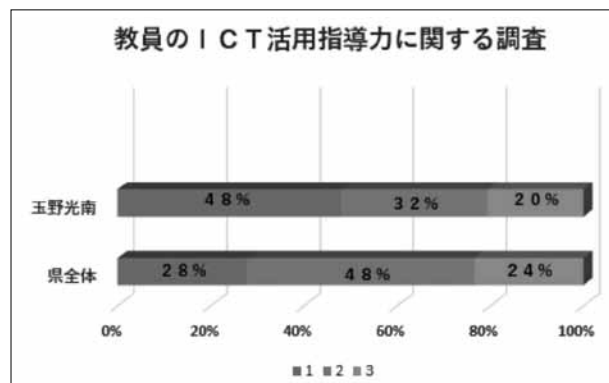
全体で88%の生徒が1及び2の肯定的回答をしている。2年次の同調査で71%であったことから光南の夢育は確実に成果をあげていると言える。ただし同時に聞いた「自分の活動は地域の子どもの夢を育てることに役立っている」の質問には体育科が77%、情報科が66%、普通科53%の肯定的回答であった。普通科は前述のシトラスリボンプロジェクトの取組を地元の小学校や倉敷市内百貨店とのコラボ企画へと発展させ小学生の夢の後押しの一助としたが、希望者による参加であり全生徒の取組とはなっていないことが課題として現れた。この仮説の検証については次年度以降の研究開発における継続課題として取り組みたい。

3 成果と課題

昨年度のオンライン・遠隔指導の実践において、全県に先駆ける取組が進んだことから、教員は本校の取組に改めて自信をもち、一人一台端末活用においてもさらに前向きに取り組んでいる。8月24日、「GIGAスクール構想（一人一台端末の活用）について」を議題に県教育委員会と県立高等学校長の意見交換会が開催された。取組を加速させている県内五校のうちの一校として本校に白羽の矢が立ったことも大きな成果の一つである。この会議の中では特に「ビジョン共有と共感」「シンプルな校内体制の構築」を本校の大きな特長として説明した。鍵本教育長を始め各教育委員の方々からは「各学校がしっかりと取り組んでおり頼もしい」との感想をいただき、取組に自信を深めるとともに一層の「受信と発信」に努めようと決意した。

各仮説の検証のまとめとして県教育委員会が実施した

Google Workspace活用指導力調査の結果を考察する。



- 1 主体的にGoogle Workspaceを活用した学びを生徒に提供している教職員（Google Workspace複数のアプリケーションを活用、日常的課題提示・回収、学習状況把握を実施）
- 2 主体的ではないが、Google Workspaceを活用した学びを一人で生徒に提供することができる教職員
- 3 他の教職員の支援がなければ、GoogleWorkspaceを活用した学びを生徒に提供することができない教職員

本校の「1 主体的に提供」の48%は全県の28%を大きく凌駕している。早い時期にビジョンを策定し、コンセンサスを図り取り組んできた成果と言える。ただし「3 他の教職員の支援が必要」20%は全県の24%とそれほど差がなく今後の課題である。これは教員個人により活用指導力に大きな差があり、活用へのモチベーションが異なることにも起因する。特に50歳～60歳のベテラン教師には「新しいもの」に対する拒否反応も顕著である。個に寄り添った研修や研修メンバーのグルーピングに工夫するなど、個別最適な教員の学びも実現したい。本校では教員の学年配置にも工夫をし、ベテラン教師が孤立しないクラスの持ち方に配慮をしている。

GIGAスクール構想の実現に対峙し、西山圭太氏著「DXの思考法」を熟読した。「デジタル化は学校教育の在り方そのもの」「縦割りのなかで最適化しようという発想自体を転換するのが教育DX」「GIGAスクール構想や学習指導要領のコード化はカリキュラム構造転換への不可欠な手段」など多くのヒントをいただいた。

今後も「誰一人取り残さない一人一台端末の活用」を肝に銘じ、玉野光南らしい取組を加速させたい。

<参考文献>

- ・市川太一他、「WE HAVE A DREAM」、いろは出版、2021
- ・アンドレアス・シュライヒャー他、「教育のワールドクラス：21世紀の学校システムをつくる」、明石書店、2019
- ・西山圭太、「DXの思考法」、文藝春秋、2021

視覚障害児童の主体的・対話的な学び合いを支える集団づくりと学習活動の充実を図る取り組み

— 盲学校同士をオンラインでつないだ遠隔合同授業の実践を通して —

沖縄県立沖縄盲学校
教諭 伊波 興 穂

I 主題設定の理由

全国には盲学校（視覚障害特別支援学校）が約70校あり、これまで各地の視覚障害教育の専門機関としての役割を果たしてきた。

しかし、本校や多くの盲学校では児童生徒数の減少と障害の重複化という課題を抱えている。本校小学部では「準ずる」教育課程を履修する児童は全児童数の22%（令和2年度）で、そのすべての学級が児童一人のみの学級である。そのため、多様な意見に触れる機会が少なく、児童同士で教え合ったり学び合ったりする協働的な学習が行いにくいなどの課題がある。また、児童生徒数の減少をうけ、盲学校内で継承されてきた視覚障害教育についての専門的な指導法や内容を継続的に継承することが容易ではなくなっている。

「すべての視覚障害児の学びを支える視覚障害教育の在り方に関する提言」（2010）においては、障害の発現率が少数である視覚障害児にとって、地域の学校で同年代の児童生徒とともに学ぶ経験だけではなく、同じ障害のある友達と悩みを分かち合う機会の必要性や、同障害種の友達がいる一定規模の集団での学びの確保が視覚障害児の成長過程には不可欠であることが示されている。しかし、本校と同じように同一県内に盲学校が一枚のみという都道府県も多く、単独校のみでそのような集団を確保することが困難な現状がある。

現在、離島や小規模校におけるウェブ会議システムを活用した遠隔合同授業の取り組みが「遠隔学習導入ガイドブック第3版」の中で報告されているが、特別支援学校での実践例は多くはない。そこで本研究では、県外の盲学校2校とオンラインを活用した遠隔合同授業に取り組むことで、視覚障害児童同士が主体的・対話的に学び合いながら自身の考えを広げたり深めたりできるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

遠隔合同授業に適した単元や場面を設定することで、児童同士の主体的・対話的な学び合いが深まり、

児童が自身の考えを広げたり深めたりできるであろう。

III 研究内容

1. 理論研究

(1) 遠隔合同授業とは

「遠隔学習導入ガイドブック第3版」によれば、遠隔合同授業とは「ウェブ会議システムを利用して、離れた学校の学級同士をつないで行う授業のこと」とされている。本研究では、Microsoft TeamsとZoomの二つのウェブ会議システムを使用し、同時双方向で学級間をつないだ授業を行う。また「遠隔教育システム活用ガイドブック第3版」では、遠隔教育を実施する目的や接続先によって12のパターンが示されている。本研究では、その中の遠隔交流学习（児童同士が交流し、互いの特徴や共通点、相違点などを知り合う）の段階から、遠隔合同学習（継続的に合同で授業を行い、多様な意見に触れたりコミュニケーション力を培ったりする機会を創出する）の段階へ移行していくことをねらい、授業改善を図っていく。

(2) 遠隔合同授業で身に付けさせたい力や態度

鷹岡ら（2018）は、過去の遠隔合同授業を分析し、身に付けさせたい力として①学習内容を広げる・深める力②コミュニケーション力（対話力）③主体的に参加できる態度の3つを示している。本研究では、鷹岡らの観点に視覚障害児童が学び合う上で必要な視点を加えて、以下の評価観点を設定した。

- ① 自分の考えと友達の考えを比較したり関連づけてりして、自分の考えを広げたり深めたりしている。
- ② 自分の考えを友達に正しく伝えるために話し方（順序立てる、指示語を使わず具体的に説明するなど）を工夫したり、友達の話を正確に聴いたりしている。
- ③ 共に学び合う必要性や良さを感じ、積極的に関わり合おうとしている。

IV 実践研究

1. 本校対象児童について

対象は小学部6年のA児。全盲で点字を使用して学習している。自ら考えて行動したり、自分の意見を伝

えたりすることはできるが、1年生から一人学級のため、友達と切磋琢磨する機会が少なく、友達の意見を聞きながら合意形成を図ることが苦手である。また、これまで居住地校交流などを通して同年代の児童と関わる機会はあったものの、晴眼の児童からの支援に対して受け身になりがちで、主体的な学習参加には至らないことが多かった。A児からは「一緒に勉強する友達がほしい」という声が聞かれ、同年代の視覚障害児童同士で学習する機会が必要だと考えられた。

2. 連携校と実施期間

本研究に賛同いただいた以下の2校それぞれとともに、遠隔合同授業に取り組んだ。

- (1) 大阪府立大阪南視覚支援学校（以下、大阪南）6年生2名（墨字使用1名、点字使用1名）
期間：令和2年8月～令和3年3月
使用したウェブ会議システム：Teams
- (2) 筑波大学附属視覚特別支援学校（以下、筑波附属）6年生8名（墨字使用4名、点字使用4名）
期間：令和2年9月～令和3年3月
使用したウェブ会議システム：Zoom

（墨字とは、点字に対してふつうに書かれた文字や印刷された文字のことで、拡大教科書の文字も含む。）

3. 授業計画と単元の選定

授業実践開始前に、各連携校の担任と児童の実態や遠隔授業のねらいなどについてそれぞれ話し合いを行い、児童の使用文字による学び方の違いを考慮した上で、集団での学習が効果的な単元や内容を選定し、年間を通して取り組むこととした。通常、他校と合同授業を行う場合、異なる教科書の単元や題材を揃える必要がある。しかし全国の盲学校では、同じ点字教科書を採用しているため、単元や題材を合わせる作業をスムーズに実施できた。また、授業後は各校の担任とオンライン会議で振り返りを行い、児童の様子との共有と次時の確認を行いながら授業を進めた。

(1) 大阪南との合同授業計画（合計 23時間）

月	教科等	単元・題材名（合同で取り組んだ時数）
8月	総合	自己紹介をしよう(1)【遠隔交流学習】
9月	道徳 国語	ひきょうだよ(1)【以下、遠隔合同学習】 利用案内を読もう(2)
10月	道徳 国語	ブランコ乗りとピエロ(1) 対話の練習 一番大切なものは(2)
11月	算数	比(6)
12月	算数	比例（5年の復習）(1)
1～2月	算数	比例と反比例(7)
3月	国語	思い出を言葉に(2)

(2) 筑波附属との合同授業計画（合計 10時間）

月	教科等	単元・題材名（合同で取り組んだ時数）
9月	総合	自己紹介をしよう(1)【遠隔交流学習】
10～11月	国語	やまなし(3)【以下、遠隔合同学習】
12月	道徳	友達だからこそ(1)
1～2月	国語	海の命(4)
3月	社会	戦争と人々の暮らし(1)
11～3月	その他	休み時間の自由交流（毎週2回）

4. 授業の実践

各校と実施した遠隔授業の中から一部を取り上げて報告する。

(1) 大阪南との合同授業：6年算数「比」（11月）

単元計画（全10時間のうち、6時間を合同で実施）

	目標及び主な活動	形態
1	「比」の用語とその意味を知り、数量の割合を比で表す方法について理解する。 両校で分担し様々な比のカルピス作りを行う。	合同 オンライン
2	一人分と二人分のカルピスの味が同じ（比が等しい）ことや、1とみる大きさを変えても比は等しいことを理解する。 両校の実験結果を発表し合う。	合同 オンライン
3	何を1とみるかによって、いろいろな比の表し方ができることを理解する。	各校
4	比の値の意味と求め方を理解する。	各校
5	a : bに同じ数をかけたりわったりしても比は等しいことを理解し、等しい比を作ることができる。 等しい比を作る問題を作り、出題し合う。	合同 オンライン
6	比の性質を使って、比を簡単にできる。	各校
7	小数や分数で表された比を、簡単な整数の比に直すことができる。 小数や分数で表した比を簡単にする方法を話し合う。	合同 オンライン
8	比を利用し、一方の量をもとに他方の量を求めることができる。 カルピス作りの活動から、カルピスの量をもとに水の分量を求める方法を考え、話し合う。	合同 オンライン
9	ある量を、示された比に分ける（比例分配する）ことができる。 教科書の問題をもとに解き方について話し合う。	合同 オンライン
10	既習事項の定着を図る。	各校

第1・2時は、一人分のカルピスと同じ濃さのカルピスを作って等しい比を調べ、その結果を報告し合った。一人で調べるよりも多くのデータを



写真1 実験の様子

を集め、各校で得たデータを全体で共有することで、比が等しくなる法則を見出すことができた。（写真1）

また、第7時の小数や分数で表した比を簡単にする方法を話し合う活動では、考えた解き方を発表し合っ

たり質問し合ったりすることで、A児一人だけでは出てこなかった解き方や考え方に触れることができました。

また本単元の授業では、両校共通の点字ワークシートを作成した。通常、オンライン合同授業の場合、視覚障害児は音声を中心に授業を理解することになる。しかし、音声のみの授業や話し合い活動では、児童同士の理解が食い違ってしまうことがあったため、手元に触りながら確認できる共通の点字資料を用意することにした。また、導入時にカルピス作りという両校で同じ体験活動を行ったこともあり、問題の解き方を話し合う場面では、体験活動のことを事例として取り上げて説明する様子が見られた。さらに、問題の解き方を説明し合う場面では、手元の点字資料を触りながら友達に説明したり、計算過程を確認したりするなど、児童同士が積極的に話し合う様子が見られた。(写真2)



写真2 話し合いの場で挙手をして発言をするA児

単元終了後のA児のふり返しシートからは、以下のような記述が見られ、多様な意見や考えに触れ、自身の考えを深めることができた様子がうかがえた。

カルピス作りの実験は、一人だったらたくさん調べられないけど、大阪南の二人と分担したのでたくさん調べられました。(中略)話し合いながら問題の解き方を考えるときは、Bさんがほくと違う解き方をしている最初は「えっ、どうしよう」と思ったけど、話し合いながら「こんな考えもあるんだなあ」と思いました。ほくの解き方も説明できてうれしかったです。

連携校の児童からは、「同じ教室で一緒に授業しているみたいで楽しかった。沖縄のA君の考えも納得した」という感想が聞かれた。

(2) 筑波附属との合同授業: 6年国語「海の命」(1月) 単元計画 (全7時間のうち、4時間を合同で実施)

	目標及び主な活動	形態
1	物語の概要をつかみ、感想を持つことができる。 「海の命」の正体は何なのか、イメージを発表し合う。範読を聞き、感想をまとめる。	合同 オンライン
2	感想を伝え合うとともに、学習課題を設定し、単元の見通しを持つことができる。 感想を発表し合い、単元を貫く問いを作る。	合同 オンライン
3	太一とその他の登場人物の関係や、その影響を受けた太一の変容(成長)を捉えることができる。	各校
4		

5	太一が瀬の主に対して抱いている感情について叙述をもとに読み取ることができる。	各校
6	太一が瀬の主を殺さなかった理由について、太一が影響を受けた登場人物との関係や叙述をもとに自分なりにまとめることができる。 「なぜ太一は瀬の主を殺さなかったのか」について互いの意見を出し合う。	合同 オンライン
7	太一が瀬の主を殺さなかった理由について自分の考えを発表し合うことができる。 単元を貫く問いに対する自分の考えを発表し合い、共有する。	合同 オンライン

第1時で「海の命」の感想をまとめ、第2時でそれぞれの感想や疑問に思ったことを出し合い、単元を貫く問いづくりを合同で行った。これまでA児は、一人で単元の問いづくりに取り組んできたが、一人では問いづくりの視点を広げることに限界があり、その後の読解でも読みを深めることが難しいことが多かった。しかし、合同での問いづくりでは、連携校の児童の発表を聞いていたA児から「CさんとDさんの疑問をまとめたら、新しい問いが作れると思う」という発言があり、友達の意見を関連づけながら話を聞いたり、別の視点から意見したりする姿が見られた。(写真3)



写真3 メモを取りながら友達の発表を聞くA児

また、各校に分かれて読みを深める学習では、「筑波のEさんが作った問いの答えて、この段落に書いてある部分じゃないかな」と話し、合同授業でのやり取りが自校のみの授業場面でも活かされた発言が聞かれた。単元後のふり返しでは、以下のような記述が見られた。

問いづくりは、一人でやるよりもみんなでやったほうがいろんな問いが出て楽しかった。みんなで考えると、自分では思いつかない問いが出てきてワクワクした。また、最後の話し合いは自分では見つけきれない意見も出てきてとても納得できたし、楽しかった。

連携校の児童からは、「難しいこともあったけど、意見を出し合いながら楽しく授業を進めていけた」「みんなで問いを作って読んでみると、内容がわかりやすくなった」などの感想が聞かれた。

V 成果と課題

1. 研究の成果と仮説の検証

(1) 児童の学習内容を広げる・深める力とコミュニケーション力

A児の全国学力・学習状況調査の質問紙回答（令和2年7月）と遠隔合同授業後の自己評価（関連する項目を抽出、令和3年3月）を比較した。（表1）

表1 遠隔授業を通じた自己評価の変化

当てはまる：4 やや当てはまる：3 やや当てはまらない：2 当てはまらない：1		
質問紙の設問	7月	3月
友達と話し合うとき、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、自分の考えをしっかりと伝えていたと思う。	1	4
友達と話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思う。	1	3
友達と話し合うとき、友達の考えと自分の考えの同じところや違うところを受け止めて、自分の考えをもつことができる。	1	4
国語の授業で目的に応じて文章を読み感想や考えを持ちたり自分の考えを広げたりしている。	2	4
算数で問題を解くときに、自分で考えた後に友達の意見を聞いてより良い考えがあれば、それをほかの問題を解くときに使おうとしている。	2	4

質問紙の比較から、話し合いに関連する項目で評価点の向上がみられたことから、A児は遠隔合同授業を通して自分の考えと友達の意見を比較したり関連づけたりするなど、多様な意見をもとに自分の考えを広げたり深めたりできたと考えられる。また、担任同士のふり返りから、「合同授業を開始した頃は、児童同士の会話の間に教員が入らないと会話が続かなかったり、一問一答のような会話が多かったりしたが、徐々に話し手も聞き手も相手を意識したやりとりができるようになり、児童だけでも会話が続くようになってきた」という意見が聞かれ、両校の児童のコミュニケーション能力が育ってきた様子がうかがえた。

(2) 主体的に参加できる態度

これまでの居住地校交流や学校間交流とは違い、今回の合同授業は話し合いを行いやすい人数だったことや、見えにくさを抱えた児童同士だったこともあり、毎回の授業を楽しみにし、積極的に授業参加する姿が見られた。また、互いの見え方について話したり、中学部進学に向けての不安や期待を話し合ったりする姿も見られた。各校に分かれての学習時にも、合同授業を思い出して自分の考えをまとめる様子が見られ、個別で学ぶ場面でも合同授業の効果が感じられた。

これらのことから、年間を通して遠隔合同授業に適した単元や場面を設定することで、視覚障害児童同士の主体的・対話的な学び合いが深まり、児童が自身の考えを広げたり深めたりできる可能性が示唆された。児童数の減少により、単独で集団での学びを保障することが困難な状況にある全国の盲学校にとって、オンラインを活用した遠隔合同授業は、これまで盲学校が培ってきた専門性に合わせて、視覚障害児童同士の学び合いを可能にする新しい学びの方法だと考えられる。

(3) その他の効果

今回の遠隔合同授業では、児童だけではなく、職員にとっても大きな効果があった。普段は一人で教材研究を行う日々だが、遠隔合同授業では担任も二人になる。これは、1つの授業について職員同士が意見を交換し合う機会が生まれるということだ。この点は、盲学校の専門性を維持継承していく上でも重要だといえる。児童生徒数の減少に伴い、職員数も減少している全国の盲学校にとって、単独校だけではこれまで培ってきた専門性を維持継承することが困難な状況にある。そんな中、オンラインを介して他県の盲学校の職員同士が授業のノウハウや視覚障害を有する児童生徒に対する指導法を共有し、ともに授業づくりを行うことは、複数校同士で視覚障害教育の専門性を共有し、維持継承していくことにつながると考える。

A児は小学部を卒業後、本校の中学部に進学したが、中学部でも他県の盲学校との遠隔合同授業が継続されており、学部を越えた連続的な取り組みが実現している。今後も遠隔合同授業の継続的な取り組みを通して、授業の質を高めていきたい。

2. 課題

- ・遠隔合同授業に取り組むための連携校をいかにして見つけるか。
- ・児童の評価を両校の教員間でどのように共有するか。

<参考文献>

- ・文部科学省 2018 「遠隔学習導入ガイドブック第3版」文部科学省
- ・鷹岡亮・大塚佑亮 2018 「小学校における遠隔合同授業で身に付ける力と態度の整理について」教育システム情報学会第43回全国大会
- ・池谷尚剛 2010 「すべての視覚障害児の学びを支える視覚障害教育の在り方に関する提言」文部科学省

あ　と　が　き

日教弘岡山支部は、昭和31年、全国に先駆けて教育研究助成事業を開始し、個人研究、グループ研究、教育研究論文・著書助成事業と順次事業を拡大して66年目を迎えました。これまでに延べ1,702人の方々に総額93,421千円を助成しました。

また、平成5年に、創立40周年記念事業の一環として「教育研究集録」を創刊して以来、本県の教育振興に寄与するべく県下の学校園や教育機関に頒布し、今回で第30号の発刊となりました。ご多忙な中、ご尽力された教育実践の成果をお寄せくださいました先生方のおかげだと感謝しています。これらの素晴らしい教育実践の報告が更に教育現場に広がるよう願っています。

今後とも、本県教育の振興・発展を支援するべく、本事業の更なる充実に努めてまいりますので、学校現場等が抱える課題の解決に向けた取組、また教材研究や教育実践等の実践・研究を論文としてまとめられ、多数応募されることをご期待申し上げます。

令和4年3月 教育研究集録 第30号

令和4年3月15日発行

編集 公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

発行 公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

〒703-8258 岡山市中区西川原255番地

TEL 086-272-1909

印刷 株式会社 創文社
